F33
D89a

×
複写

始

44484
F33
D89a

コナン・ドイル作
石川正通譯

全譯

シャロック・ホウムズ

東京
越山堂發行

大正
11. 9. 11
内交

序

探偵小說に最初指を染めたのは亞米利加のエドガー・アラン・ポー（一八〇九——一八四九）だと言ふ事が久しく信ぜら て居たが、今では佛蘭西のバルザック（一七九九——一八五〇）が探偵小說の鼻祖だと言ふ事になつて居る。ポーの作品の或物がバルザックの作品の影響を受けて居る事は文藝史上で見逃す事の出來ない事實である。と筆を起しては來たものゝ、私は此處で探偵小說史を溯原的に說述しやうとするのではない。只探偵小說の起原がさう古くないと言ふ事を讀者に知つて戴きたいのである。

處で探偵小說と言へばコーナン・ドイルを聯想する。それには幾多の理由があらう。芥川龍之介氏に言はせると英國人は「シエークスピアと泥棒を愛する國民」である。さう言ふ國民間に探偵小說が旺んに歡迎されるのは極めて自然であらねばならぬ。全歐を風靡しやうとして居たシャーロック・ホウムズ物も一時はライダー・ハガードの冒險談やセクストン・ブレークと云ふ匿名作家の探偵物が壓せられやうとする氣味がないでも無かつた、又近頃佛蘭西のルブランを始め多くの群小作家の探偵物が雨後の筍然として現はれて來たので探偵物愛好家はドイルの存在をすら忘れて

し新しい探偵小說の應接に遑無い事であらう。

併し、着想の奇拔、筆致の暢達、氣品の高潔から言つて未だドイルの右に出る同類の作家

見出す事が出來ない。若し文藝史上にクラッシックとして後世に傳はる運命を誇り得る探偵物があるなら我がシャーロック・ホウムズ丈けがその運命の寵兒であらう。即ち探偵物復活の氣運を示してゐる我が讀書界に事新しくシャーロック・ホウムズを提げてまゐゆる所以である。況んや今年六歳のドイル翁が圓熟の筆を握つて兩び探偵小説界に乘り出したと傳へられるに於てをやだ。

私は今「私のホーマー」と公言し得るボープや「私のハイネ」と宣言し得る生田春月氏の事をふと慚愧に堪えない。「これは私のシャーロック・ホウムスです」と言ひ得ない理由があるからである。否「飜譯者は反逆者なり」と云ふ伊太利の格言すら私には没交渉なのだ。只中村詳一氏に對する一片の友誼の表象としてのみこのシャーロック・ホウムズは記念さるべきものだ。

ともあれ、本書は凉木貞雄、加藤しづ子兩氏の御力添へが無かつたら生れて來なかつたであらうと思へば何はさて置き兩氏に對する感謝の念が湧いて來る。だから本書の美點の全部は當然兩氏に歸せらるべきものである。私としては他日力作の發表を待つて本書の足りない處を補ふ日の一日も早く來る事を祈らう。

八月二日夜　代々木にて　石川正通

目次

一、ボヘミヤの宮廷事件(The Adventure of a Scandal in Bohemia) ……五
二、紅髪社事件(The Adventure of the Red-Headed League) ……(五七)
三、花婿の行方(The Adventure of a Case of Identity) ……八七
四、ボスコム谷の慘劇(The Adventure of the Boscombe Valley Myste
五、五つの蜜柑の種子(The Adventure of the Five Orange Pips)……
六、阿片窟の秘密(The Adventure of the Man with the Twisted Lip
七、緑玉冠事件(The Adventure of the Blue Carbuncle) ……
八、まだら紐(The Adventure of the Speckled Band) ……
九、技師の拇指(The Adventure of the Engineer's Thumb) ……
十、獨身華族(The Adventure of the Noble Bachelor) ……

目次

十一、綠玉髓と鷲鳥(The Adventure of the Beryl Coronet) ……四
十二、欅林の冒險(The Adventure of the Copper Beeches) ……四

ボヘミヤの宮廷事件

（一）

シャアロック・ホウムズは彼女をいつも『あの女』と云ふ、『あの女』と云ふより外に、他の名前で彼女の事を云ふのを滅多に聞いた事がない。

彼の目から見れば、實に彼女は女性の全部を凌駕し、他の女をして顏色なからしむる程勝れてゐるのである。と云つて決して彼が『あの女』即アイリィニ・アドラに對して戀に似た感情を抱いてゐると云ふのではない。情緒と云ふものは、殊に戀に至つては、彼の、冷靜な、緻密な、して驀然する程好く調和發達した心には實に忌み嫌ふべきもので、相容れる事が出來ないのである。彼は世に珍らしい程完全な推理力と觀察力とを備へた人間であつたが、戀人としては全く間違つた位置に身を置いてゐるのであつた。彼は愛情と云ふ事については慢しい言葉で云つた例がない。云へばきつと愚にもつかぬと云ふ風な嘲笑を持つて云ふのであつた。愛情と云ふものは觀察者にとつては尊重すべきものである――即ち優しい愛情を持つてすれば、人がどうしてこんな事をする樣になつたかと云ふ樣な原因や、或はその行動をほんやり蔽つてゐるヴェールを取り去つてハッキリと知る事が出來る美德である。が然し訓練された推理家には、彼の微妙な鋭敏な、そして好く調和の取れた心

の中に、さうした優しい情が侵入して來ると、その推理して得た結果の上に暗い疑惑の影を投げるやうな破壞的な要素となるものである。彼の樣な性質の男に、熾烈な燒きつくす樣な感情が忍び入りでもする事は、丁度精巧を極めた機械の中に小さい秒粒が一つでも入つたり、又は彼のあの絶大な力のある擴大鏡の硝子に、罅裂が入つた樣に駄目になつてしまふ。だが彼には只一人、彼の心から忘れる事の出來ない一人の女性があつた。實にその女こそは、あの不可思議な、訝かしい思出を呼び起す、アリィニイ・アドラアであつたのである。

私は近頃ホウムズにはちつとも會はなかつた。私が結婚した爲めに吾々二人の間は遠ざかつたのであつた。私の此の上望む所のない幸福と、そして初めて一家の主人となつてその周圍を取り卷く家庭の團樂とは私の心を奪ひ去るに充分であつた。其の間にもホウムズはそのボヘミヤ魂で見ての社會的な交際を嫌惡しベーカー街のあの下宿屋にくすぼつて、古書の中に埋まり、コカインと野心との間を、即ちを痳醉劑に醉つた夢心地と、彼特有のあの熱心な性格から來る旺盛な精力との間に、幾週間もぶつ續けて日を過してゐるのであつた。彼は何時もの樣に相變らず犯罪の研究に熱中し、警察署の手から最早如何とも手をつくす術なきものとして放棄された九里霧中の事件を、彼の驚くべき觀察力と卓絶した能力とを持つて、事件の端緒を辿り辿つて解決する事に努力してゐた。し

て私は彼の行動を風のたよりに聞くのであつた。

トレボフ殺人事件でオデッサに招かれた事や、トリンコマリイに起つたアトキンスン兄弟の不可思議な悲劇を解決した事とか、又は和蘭の王朝の爲めに其處に起つた事件を、巧みに、然かも立派に片付けたと云ふ話しを耳にした。だが然しこれ等の事件については、日日の新聞紙上に報道された記事を讀者と共に見て知つてゐるのみで、それ以外には舊友であり、同僚であるホウムズの事は少しも知らなつかつたのである。

或夜――それは一八八八年の三月廿日のことであつた。私は病家を訪うて、歸途或る患者の所へ廻つてゐた。〳〵と云ふのは其の當時私は再び町醫者を開業してゐたのであつた。その時私が行く路はベイカー街を通り抜けなくてはならなかつた。私の心の中に、私の結婚をした事を思ひ起させ、スカーレットに於けるあの探偵の奇怪な出來事を何時も連想させる、なつかしい思出多い家の門口を通り過ぎた時、私はホウムズに會つて、彼の非凡な才能を何事に用ゐてゐるか聞きたくなつて、急に彼に會ひたくなつて來た。彼の部屋には、畫を欺く計りに燈が明るく輝いてゐた。そして私が見上げた時さへも、彼の脊の高い痩せた姿が、二度までもチラ〳〵簾に映るのが見へた。彼は頭を垂れ、顎を胸に當てて、そして兩手を後で組んで早足に、然も熱心に部屋を歩き廻つてゐるのであつた。

彼の氣持や癖を好く呑み込んでゐる私には、彼の態度や樣子を見れば直ちに彼がどんな事を考えてゐるのか自ら分つた。彼は再び新しい事件に着手してゐるのであつた。彼は痲醉劑注射に依て得た夢心地から目醒め、何か新らしい犯罪の端緒を得て切りに問題の解決に苦しんでゐるのであつた。私が呼鈴を鳴らすと私は以前二人で住んでゐたことのある部屋に案内された。

彼の態度には餘り喜んだ樣な樣子も見られなかつた。それは珍らしい事ではない。が私に會つてよろこんで呉れたことゝ思ふ。彼は殆ど一言も言はずに、私に肘掛椅子に坐る樣に溫い愛嬌のある目付きをして手を振つて指さした。そして葉卷煙草の箱を投げ出して、隅つこの酒の入つてゐる箱と、炭酸水製造機を指したのは自分で遠慮なく飲めと云ふのだらう。やがて彼は暖爐の前に立つて、例の彼獨特の分解的な風で私をジロ〳〵見るのであつた。

『妻君を貰つて藥になつたな。』と彼は云つた。『ワツスン君、見た所君は別れて以來目方が殖へたね、七斤半計り。』

『七斤だよ。』と私は答へた。

『さうか、僕は今少し少なく見るべきだつた。いや、ほんとに少し、ワトスン君、君は又開業したね、別にそんな事も僕には話さなかつたが、』

『じやあどうして分つたんだ？』

『分るさ。理を究めて分るのさ。君は近頃雨に會つてズブ濡れに濡れた事があるだらう？　そして君の内には不器用極まる女中を使つてゐるね。』

『おや〳〵、ホウムズ』と私は云つた。『こりやあ叶はん。實際君が二三百年も前に生れたら魔法使だと云つて、火炙りに會つたんだぜ。成程僕は木曜日に田舍の方をぶらついて歸りに雨に會つてづぶ濡れの體で家へ歸つたんだ。だが僕はその着物を着換へてゐるから君がそれを推知すると云ふことは不可思議だね。下女のメリイ・ゼエンと來たらいくら教へても直らない仕末にいかない奴だつた。だがもう僕の妻はあいつにお暇をやつたよ。だがさ、君がこう美事に推知する事は、どうも僕には解せないね。』

彼は一人でほくほくよろこんで、彼の長い神經質な手を擦つた。

『こんな譯のない事はないさ。』と彼は云つた。『僕の目には分るよ。君の左の靴の内側の、ソラ丁度火の光にあたつて居る所に、殆ど並行に並んだ六本のきづがあるね。その痕は明らかに靴にくついて固くなつた泥を落さうとして、誰かがぞんざいに踵のまわりを引つ掻いたので付いたんだ。そこでさ、ねえ二つの推論が成り立つ譯だろう。君が酷い雨の日に外を歩いたことゝ、君の靴の仕末をし

た女は倫敦きつてのあばづれ女と云ふ事がね。君の商賣だつてさうじやうないか。たとへば今一人の紳士が僕の室に這入つて來る。そして彼がヨードホルムの匂をプンプンさして、彼の右の食指に硝酸銀が黑くなつてくつついてゐるんだ。彼の高帽の一方が膨らんでゐるので彼が其處に聽診器を入れてゐると云ふ事が分つたとしたならばだね、餘程な頓馬でさへなければ彼が開業醫だと云ふ位は分るさ。

私は彼がこう手輕に彼の歸納法の說明をしてゐるのを聞くと、成程と思はず苦笑せざるを得なつかつた。そこで私は云つた。

『君が推論の順序を聞いてゐると、全く物事が馬鹿々々しい程單純に思はれて僕でもやれ相に見える。然しさう次から次へと起つて來る新事件にぶつつかると君にはとてもお供が出來ず參つてしまうよ。そして君の說明を聞いて初めて成程と思ふのさ。だが、僕の目だつて君の位の程度には見へると思ふよ。』

『見へるとも。』と彼は葉卷に火をつけて、肘掛椅子に身を投げ出す樣に倚り掛つて云つた。『君は見へるんだ。だが觀察はしない。目で見ると觀察するとの區別は明らかなものだ。例へばだね、君は度々あの入り口からこの部屋に上つて來る階段を見てゐるだらう。』

『度々見てゐるよ。』

『何回くらいか、』

『そうだね。數百回もだらう。』

『じや段々が何段あるだらうね』

『何段だつて？　さあ知らないね。』

『さうだろう。君は觀察しないのだ。だが見る事は見てゐるんだね。其處だよ、僕の云ふところは。僕はあの階段が十七ある事を知つてゐる。僕は見た上に觀察もしてゐるんだからね。時にね君、君はこうした些細な問題にも興味を持つてゐるし、僕の小さい經驗をも書き留めて呉れるんだから、斯んなものも又一興かも知れないね。』彼はかう云つて卓の上にあつた一枚の厚い桃色の紙を私の方へ投げ出した。

『それはさつきの郵便で配達されたんだ。大きい聲で讀んで見たまへ。』

その手紙には日付もなく、差出人の名も書いてなかつた。で讀んで見ると、次の様に書いてあつた。

今晩八時十五分御貴殿を御訪問申し度候、それは或非常に重大なる事件に關し、御貴殿に是非共御相談申し度く切望致し居る一人の紳士に御座候。最近貴殿がヨーロッパのさる王家につくされし御功績を承知致し、殆ど誇張し難き程の最も重大なる事件を安心して托し得る人は御貴殿より外には無之と存じ候。御貴殿に就ての話は、我々は各方面より聞き入れ申候、何卒指定の時間に御貴殿の室に御出で下され度く、若し其の訪問者が覆面(マスク)をつけて居り候とも、何卒惡しからず御許し下され度候。

『こりや不思議だ』と私は云つた。『君は此の手紙をどう思ふかね。』

『未だ論據を掴まないんだ。論據となる事實を握らないで理論を立てるのは大きな間違だ。人は事實に合ふ樣に理論を立てずに、理論にあてはまる樣に事實を枉げるからね。然し手紙は手紙だ。この手紙から君はどう推斷するね。』

私は注意深くその筆跡や、書いてある文言を調べた。

『この手紙を書いた人は多分裕富な暮しの人だ。』大いに友の推理の方法に倣つて私はこう云つた。

『こんな上等の紙は一綴り一圓計りでは買へないよ。特別に强靱な紙質だからね。』

『うまい。たしかにあたつてゐる。』とホウムズは云つた『これは英國製の紙ではないよ。光線に透

して見給へ。』

私が光に透すと大きいEの側に小文字のYとPとがあり、又大きいGと並んで小さなTが紙の地に漉き込んであるのが見えた。

『この意味が分るかね。』とホウムズ君は尋ねた。

『製造者の名前だね。勿論。と云ふよりむしろ彼の商號だろう。』

『どうしてどうして、Gと小文字のTはね Gesellschaft と云ふ獨逸語で英語の Company にあたる字だ。それを英語のCOの様に略するのが普通だからね。Pは勿論 Papier で、英語の紙だね。さてEgだて、一寸君歐羅巴大陸の地名辭典を見よう。』彼は重い茶色の大冊を棚から取り下した。『Eglow Eglonitz——ア、あつた、あつた、Egriだよ。此處は獨逸語を使ふ地方にある都會なんだ、ボヘミヤのね、カールスバットからさう遠くない處だ。（ヴレンスタイン終焉の地として知られ、硝子及び紙の製造盛んなるをもつて著名なり。）か、ハハ、、、。オイ君、どう思ふんだ？』彼の目は輝いた。そして勝誇つ 様な青い葉巻の煙を吐き出した。

『紙はボヘミヤ製だね。』と私は云つた。

『さうだ。そしてこの手紙の主は獨逸人だ、君は文章の特種な構文に氣がつかないかね。』

'This account of you We have from all quarters received.（貴下に就ての此話は各方面より得候）

どうだ君、文章の終りへ動詞を持つてゆくのは獨乙人にきまつてるる。佛蘭西人や露西亞人には書けない文章だ。動詞を甘く使へない獨逸人だ。で殘る所の問題はだね、顏を見られたくないので假面をつけて來ると云ふ。このボヘミヤ製の紙へ書いた獨逸人がどんな事を僕に頼みたいかだ。

オヤ、やつて來たよ。或はそうでないかも知れんが——本人が來た様だから凡ての僕等の疑惑には解決がつくよ。』

彼がこう話してゐる時、鋭い馬の蹄の音と土止石にうたつて軋む轍の音が聞へて來た。するとそれに續いてすぐ案内を乞ふ呼鈴が鋭く鳴り出した。ホウムズは口笛を吹いた。

『二頭立てだ。音で分るよ。』と彼は云つた。『ウム、』彼は窓から外をチラリと眺めて云つた。

『立派な四輪馬車だ、立派な馬が二頭、一頭千五百圓づゝか。ワツスン君、此の事件には金があるよ、外に何はなくてもさ。』

『ホウムズ君、僕は此處に居ない方が好いだらう。』

『居たまへ君、そのまゝ其處に居てくれ給へ。相手がゐないと張合がない。これやきつと面白さうな事件だ。逃がしちやおしいよ。』

『然し依頼人が……』

『依頼人なんざあどうでも好いさ。僕に君の助力が必要かも知れないし、また彼にも必要かも知れぬ。やつて來たよ。あの肘掛椅子に坐つて居給へ。して出來るだけ注意して聞いてゐて呉れたまへ。』

落ついた重い足音が階段の上り廊下を通つて、扉のすぐ外側で立ち留まつた。そして扉を叩く、高い權威のある音がした。

『お這りなさい。』とホウムズは言つた。

それに應じて、胸や手足が巨人の様に大きく身の丈が六尺六寸もあらうと思へる様な一人の男が這つて來た。彼は英國では反つて下品に思はれる様な、あくどい華美な服裝をしてゐた。アストラカンのどつしりした紐が袖や二重胴衣の胸にからまつて、肩から投げかけた様に着流した濃い綠色の外套には燃へ立つ様な色の緋の絹の裏がついてゐて、それは、頸のところを、只一箇の焰の様に輝く紅の寶石のついた胸飾りで留めてあつた。そして脛の邊りまで來てゐる長靴は、その上の端を茶褐色の房々とした毛皮で緣がとつてあつて、それが一層、彼の全体の服裝から受ける裕富な野蠻人の様な印象を強めてゐるのであつた。彼は手に緣の廣い帽子を持つてゐた。そして顏の上部から頬骨の下までも覆つてゐる黑い假面をつけてゐた。

この假面は確かに彼がこの室へ入る時直したものらしく、這入つて來た時には、まだ手をそこにあてゝゐたのであつた。彼の顏の見へてゐる下の部分から察すると、彼は性格の強い男であるらしかつた。彼の唇は厚く下つて、そして永い眞直な顎は彼がどこまでも頑强で云ひ出した事は一歩も後へひかぬといふ様な性質を表してゐるのであつた。

『私の手紙を御受け取りになつたですか？』と彼は腹の底から出るな様、嗄れた大層辯のある獨乙訛の强く響く聲で問ひかけた。

『私は訪問する様に云つておいたんです。』と彼は私等二人の顏を見較べて、どちらへ話し掛けて好いのか迷つてゐる様であつた。

『何卒、御掛け下さい。』とホウムズは云つた。『この人は私の友人で又同僚のヲツスン博士です　そしてこの人は時々私の取扱ふ事件に力を盡して呉れる人です、して、貴方の御名前は？』

『私の名前ですか。ボヘミヤの或る貴族で、クラアムの伯爵として話して下さい。貴方のこの御友達の御方は、この最も重大な事件を安心して打明る事の出來る、信義を重んじ思慮もおありの方と存じます。が若しさうでなかつたならば私は貴方と差向ひで御相談申し上げたいのです。』

私は扉をはづさうとして立ち上つた。がホウムズは私の手首を掴んで、再びもとの椅子に坐はら

せて

『二人でなくばお斷りします。』と彼は云つた。『貴君が僕の前で御話し下さる事が出來る事でしたら何でも、この方の前でお仰つても差支へはありません。』

伯爵はあの巾の廣い肩をすくめて『では始めませう。』と云つた。『貴君方御二人共二年間は絶對に祕密を守つて貰はなくてはなりません。三年目の終りには此事件も左程重大ではなくなるでせう。けれ共、目下は歐羅巴の歴史に大影響を及ぼすかも知れない樣な重大問題です。』

『祕密は嚴守します』とホウムズは云つた。

『私も』と私はホウムズの後について云つた。

『何卒この假面をつけてゐる事を御赦し下さい。』とこの妙な訪問者は言葉を續けて云ふのであつた。『畏れ多くも私を御遣しになつた高貴な方は、貴君に使者が誰であるか知られない樣に望んでゐられるのです。して實を申せば只今自分のだと云つた私の爵位は私自身のものではないのです。』

『それは分つてゐます。』と彼は不愛想に云つた。

『その事件の内容は非常に複雜なものです。で、歐羅巴の王家の一つの名譽を汚し、又醜聞の立つ樣な事になることをふせぐ爲めには綿密なあらゆる注意を拂はなくてはなりません。何を隠さう、

實はボヘミヤ譜代の王家、オルムスタイン家に關した事件です。』

『それも私は承知してゐます。』と彼はつぶやくやうに云つて、肘掛椅子に腰を下し乍ら目を閉じた。

この訪問者は、最も鋭敏な推理家とし、又歐洲に於ての最も有力有爲の探偵として彼の目に映じてゐる其の人の、このだらしなく腰を下してゐる姿を見ては、流石に驚いた樣に彼を一瞥したのであつた。ホウムズは靜かに目を開けて、この巨人の樣な依賴者をさももどかしげに眺めて云つた。

『若し陛下が親しく事件の詳細を御述べ遊ばせば、私も好く御助言申し上げる事が出來るで御座いませう。』

その訪問者は椅子から飛び退いた。そして制へ難い胸中の動搖にたへられない体で、部屋の中を歩き廻つた、が、やがて彼は捨鉢だと云ふ樣な絶望的な態度で覆面を引はぐ樣に顏からはづしてそれを床の上に叩きつけた。『圖星を指された』と彼は叫んだ。『余が王じや。余は何としてそれを藏さうとしたのだろう。何も隠す必要はない全く余の誤りであつた。』

『さうですとも』とホウムズはつぶやいた。

『私は陛下が御話しにならない内から、ボヘミヤの世襲王家、カツセル・フエルスタインの大公ウイ

ルヘルム・ゴットフライヒ、シキスモンド・フォン・オルムスタイン陛下に話し掛けてゐる事を知つてゐました。』

『御存じの通り！』とその變つた訪問者は云つて、再び椅子に腰を下して、あの秀でた白い前額を撫でた『余は自らこうした事を爲る事は至つて不馴である。だがこの事件は極めて手加減ものだから、余がこれを使者に托すれば必ず余は其の人に生殺與奪の權を握られる。で余は微行でブレイグからわざ〳〵君に相談する爲めにやつて來たのだ』

『それじやあ何卒御話し下さい。』とホウムズはそう云つたまゝ再び目を閉ぢた。

『簡單に云へば事實はこう云ふ譯だ。數年前のこと、余がヲーソウに長く滯在してゐる間に、あの有名な女浪人のエリィニ・アドラと親しくなつたのだ。名前は無論君は御存じだろう。』

『君、濟まないが僕の控帳を調べて見て呉れたまへ。』とホウムズは目を開けないで私につぶやく樣に云つた。彼は長年の間に種々な人や事件に關する記事の大意だけを順序を立てゝ書き留めて置く樣にしてゐたので、どんな問題が出ても材料の供給が出來ぬと云ふ樣な事はなかつた。

私はそれを出して開いて見るとラビと云ふ猶太人と、深海に棲息する魚に關して專攻論文を書いた或る海軍の一將校の名前との間に彼女の名前を見出した。

『どれ見せたまへ、』と彼は云つた。『うむ、一八五八年にニウヂヤアシイに生る。最底女聲樂者。ふむ、ヲーソウ帝國座の花形――成程 歌劇劇場を隱退……：ハハア。目下倫敦に住居す、……なるほど、陛下はこの若い女と御關係遊ばされたのですな、そして名譽に關する樣な手紙でもお書きになつて。今その手紙を是非共取り返へしたいと御望になつてゐるのですね。』

『全くその通りだ。がどうしてそれを……？』

『秘密に結婚遊ばした人ですか。』

『いや』

『法律上の書類とか或は證明書でも？』

『それもない。』

『では、陛下のお言葉が分りかねますね。たとへばこの女が、强請とか又は他の何かの目的でこの手紙を使はうとしても、別に有効に使ふ事は出來ないではありませんか。』

『筆跡が余の直筆だから。』

『これはどうも、然し僞造だと仰しやいませ。』

『余專用の紙を用ゐた』

『盗まれたと仰しやつては。』
『自分の印形が押してある。』
『偽造だと仰しやいませ。』
『余の寫眞がある。』
『買つたと云へば好いでぜう。』
『だが二人で撮影したんだ。』
『驚きましたね。これや仕末が悪い。陛下は本當に無分別な事をなさいましたね。』
『余は氣が狂つてゐた。――狂人だつた。』
『陛下！取り返しのつかぬ樣な名譽にかゝる事をなさいました。』
『その當時は余は只皇太子に過ぎなかつたのだ。そして血氣盛りであつた。余は今三十になつた計りだ』
『それはどうしても取り返さなくてはなりません。』
『余は取り返さうと試みて失敗した』
『金を御出しなさい、買へるに違ひありませんよ。』

『彼女は中々賣る氣遣はない。』
『では盗んだら好いぜう。』
『余はそれを企てた。二度は金を與へて泥棒に家を隅から隅まで搜がさせた。一度は女が旅行してゐる時に荷物を横取りして調べたし、又二度は、彼女を待伏せしてゐたが、効果を見なかつた。』
『ありかが分りませんか？』
『さつぱり手掛りがない。』
ホウムズは笑つて云つた。
『こりやなか〳〵面白い事件だ。』
『然し余には容易ならぬ問題だ。』と王は恨めし相に云ふのであつた。
『さう全く容易ならぬ、して彼女はその寫眞をどうし樣と云ふんですか。』
『余を浮む瀬がない樣にすると云つてゐる。』
『がどうして？』
『余は今結婚する事になつてゐる。』
『それは私は聞いてゐます。』

『スカンヂナビヤ王の第二皇女のクロテルデ・ロートマン・フオン・サクセメンニンゲン内親王とだ。君もあの王家の、嚴格な家憲を知つてゐるだろう。そして女王の高い氣品は、淑德の龜鑑とも云つてもよい。で余の品行に暗い疑惑の影のさしてゐる事が少しでも分つたら、切角の結婚も駄目になつてしまう。』

『でエリイニ・アドラはその緣談に對してどう云ふ意見なのですか?』

『女王にあの寫眞を送ると云つて脅迫してゐる。彼女の事だから送り兼ねまい。余は彼の女が送らないではおかない事を知つてゐる。君は彼の女を知らないね。彼女は鐵の樣な意志を持つてゐる。彼女は女の中でも最も美しい顏をしてゐるが、心は男子よりも斷乎としてゐるのだ。余が他の女と結婚する事が邪魔ならどんな事をしても彼女は目的を貫徹しなくてはおくまい。どんな事をしても。』

『では未だ彼女は寫眞を送つてゐないのですね。』

『大丈夫送つてゐない。』

『何故ですか?』

『それは彼女はその結婚が公布される日に送ると云つたからである。その布告は次の月曜日だ。』

『オヽ、じやあ未だ後三日の時日がありますね。』とホウムズは云つて欠呻をした。

『僕は早速調べてしまはなくてはならない事件が二つ三つあるから、それは好都合だ。で勿論陛下は當分倫敦に御滯在遊ばすでせうね。』

『滯在するよ。クラムの伯爵と云ふ名前で、ランガムに滯在してゐるから、御出でになれば分ります。』

『では手紙で事件のなりゆきを御知らせします。』

『何卒余は心配でたまらないから。』

『で報酬は?』

『Carte blanche を差上よう。』(Carte Blanche とは署名したる書付にて、適宜に金額を書き入れる樣に余白を殘したものである。)

『確か?』

『その寫眞さへ取り返して下されば、余の國の一洲を割いて君に贈つてもおしくない』

『そして當座の費用は?』

王は彼の外套の下から重い鞣皮の袋を取り出してそれを卓の上に置いた。

『こゝに金貨で三千圓と札で七千圓ある。これを差上げやう。』

ホウムズは手帳の紙に走り書きに受取證を書いて、それを王に渡して云つた。

『してその婦人の番地は何番ですか？』

『聖ジョンス・ウッドのサアペンタイン街のブライアニ館です。』

ホウムズはそれを手帳に書き留めた。『今一つ御尋ねしたい事がありますが、』と彼は云つた。『寫眞は中判ですか？』

『さうだ。』

『では左樣なら、陛下。間もなく何か好い報告を致します。』『左樣なら。ウォッス君。』と、王の四輪箱馬車が街路をコトコト音を立てゝ去つた時、彼は附け加へた。『君。明日の午後來て呉れたまへね、三時に。この小事件の事をゆつくり話さうよ。』

(二)

丁度三時に私はベイカー街に出かけたが、彼は未だ歸つてゐなかつた。宿の主婦に聞くと彼は朝八時過ぎて間もなく出かけて行つたとの事であつた。然し私は、彼の歸りがどんなに手間取つても彼の歸りを待つ積りで煖爐の側へ坐つた。私はすでにこの事件に非常に深い興味を覺へて來た。それは、私がどこかで書いた、あの二つの犯罪の樣に、殘忍なそして奇怪極まる事柄が絡つてはゐなかつたけれ共、今度の事件の性質と、その依頼人が普通の人とは異つて　高貴な地位の人であると云ふ事が、その事件に又それ丈の特徴を與へてゐるのであつた。私の友が今引受けてゐる問題獨特の性質は別として、巧に事件の局面を攝み、また彼のあの熱心な、そして鋭い推理には自づと興味を引くものがあつた。それは私にとつては彼の仕事の順序を見てゐる事や、解け難い不可思議な事件も、快刀亂麻を斷つ樣な、彼の敏活な鋭い、又靈妙な手段を見てゐる事は、實に痛快なものであつた。私は全く彼が仕事すれば必ず成功する事にすつかり慣れきつてゐるものだから、彼が失敗するかもしれないなどと云ふ事は當底思ひ浮べる事も出來なかつた。

四時を打つ計りになつた頃、入口の扉を開けて泥醉でもしてゐる樣に見へる一人の馬丁が入つて

來た。彼は頭髪に櫛も入れず、頰髯は生へてゐるし、火が出る樣に眞赤な顏をして汚れたぼろ〳〵の着物を着てゐた。友の驚歎すべき變裝術の巧妙さに慣れてゐる私でさへ流石にその男がホウムズであると云ふ事がしつかり、確信出來るまでには三度も好く好く見なければならなかつた。彼は一寸點頭いて寢室の中へ消へて行つた。が五分計り立つと、以前の樣に、品の好い、スコッチの服を着けて寢室から出て來た。彼はポッケットに手を突込んで、足を煖爐の前へ伸ばして、しばらくの間は心から可笑し相に笑くづれるのであつた。

『いや、全く』と彼は叫んだ　そして急に噎せた、そして再び手足もグニャ〳〵になつて體が利かなくなつて椅子へ倒れかゝるほどになるまでに笑ひ出した。

『どうしたのだ?』

『おかしくてたまらない。僕がどうして今朝を過ごしたか恐らく君には想像もつくまい。またそれがどんな結果になつたかはね?』

『分らないね。だが多分エリイニ・アドラ孃の日常の生活や家の樣子を窺つたんだろう。』

『そうだ。全くそれに違ひない。だがねその結果は全く意外さ。まあ話さうか、今朝八時少し過ぎに家を出て行つたよ。職を失つた馬丁の樣に變裝してね。馬の好きな者とか、馬を取り扱つてゐる人

人の間には、不思議に、同情とか、同氣相求むる樣な所があるものだ。で、仲間の樣な仕度をして行けば、どんな事でも聞き出せるものさ。直ぐブライアニ館は見つかつたよ。小じんまりした綺麗な家でね、後には庭があるが、前側は直ぐ道に向いてゐて、二階建だ。入口には錠が掛つてゐた。這入ると右手の方には設備のよく調つた居間があり、殆ど床までもとどく樣な長い窓がついてゐて子供でも開けられる樣な、例の英國流の御話しにもならぬ戸締りさ。家の後には馬車小屋の屋根から行けば忍び込める樣な廊下の窓より外には別に注意を引く樣なものもなかつた。僕は家の廻りを歩いて　凡ゆる方面から調べて見たが、別に興味を引く樣なものも得られなかつた。そこで僕は街をぶら〳〵迂路ついてゐると、豫期してゐた通りに、庭の塀に沿ふてゐる小路の突きあたりに厩があるのを發見したんだ。で僕は馬丁に手を貸して馬の毛を擦つたり二片(ペンス)を小さくして貰つたりね、一杯の酒を半分半分飲んで刻み煙草を二服はかりのんだりし乍ら出來る丈けアドラ孃の話を聞いた譯さ。然し、僕には面白くもない隣り近所の人々の噂まで聞かされたのは云ふまでもない事さ。だが僕はその人達の身の上を止むなく傾聽しなければならなかつたよ。』

『そして、エリイニ・アドラの事については?』と私は聞いた。

『ア、、彼女はあの邊りでは大いに垂涎の的となつてゐるよ。何しろ、婦人帽(ボンネット)を冠つては天下に二

人とはない樣な素的な美人だからね。サアペンタイン街の厩の人々の噂さではこうだ。彼女は極めて平穩無事な生活をしてゐる。音樂會へ出演する。毎日五時になると馬車で出掛けて七時には間違なく夕食に歸つて來る、然し他の時間には音樂會へ行く以外には滅多に外出する事はない。只一人の男の訪問者が居るが、それとは水も洩らさぬ樣な親密な仲らしい。その男は色か淺黑くて好男子で隨分とおめかし屋ださう、そして一日に一度は缺かさずやつて來るが、時には二度も三度も訪問する。彼は法學院のゴッドフリ・ノオッンと云ふ男ださうだ。どうだ君、辻馬車の厩者を知己に持つとこんなにうまい利益のあるものだ。彼等も十回許りサアペンタインの厩から家まで彼を乘せて行つた事があるので、彼の事は好く知つてゐたよ。僕は彼等が知つてゐること丈皆きいてしまつた後、今一度ブライアニ館の近くをぶら〳〵歩き初めたよ。出陣の劃策をめぐらしてね。

このゴッドフリ・ノオッンは明らかに、この事件の立役者だぜ。彼は辯護士だ。辯護士だと云ふことが何だか氣味惡く聞へるね。二人の間にはどんな關係が結ばれてゐるのだらう?。彼があゝ度度やつて來るのは何の目的かしら?、彼女の事件の被依頼者か? 友人か? 或は情夫かな? 若し被依頼人だとすると寫眞は屹度彼の手許に委托されてあるに違ひない。だが若し情夫だとすると寫眞は見せはすまい。此の問題の要點は、このまゝブライオニ館で此のまゝ仕事を續けて行くか、それ

とも、法學院のあの男の部屋へ注意を向けるか、二つの一つにあるんだね。其處が微妙な點さ。そして、探偵の場所も廣くなつて來るよ 逐一こうくどく〳〵と話をするのは君にも堪へられぬ事だろう。然し、若し君が事件の內容を知りたいなら、僕の苦心を一通りきく必要があるよ。』

『興味を持つて聞いてゐるよ。』と私は答へた。

『で僕はまだどうしたものかと思案してゐた譯さ。すると一臺の二人乘の辻馬車がブライアニ館へ驅けつけて、一人の紳士が飛び下りたよ。餘程の美男子なんだ。色の淺黑い、かぎ鼻の、髮を生したね。——明らかに僕が聞いた男だ。彼は餘程周章してゐる樣子で、厩者に待つてゐる樣に言ひ棄てて、扉を開けた女中を押し除けて家の中へあわてゝ消へて行つた所を見ると、全くその家の勝手は自分の家の樣に心得てゐるらしい。

彼は半時間許り家の中にゐた。僕は居間の窓から彼の姿をチラ〳〵見たよ。彼は部屋の中を歩き廻つて何かしきりに興奮してゐる樣子で手を振つてしきりに何か話してゐた。だが彼女の姿は見えなかつた。間もなく彼は前よりも一層あはたゞしく出て來てね、待たしてある馬車に飛び乘つて、ポケットから金時計を出して見てゐたが、『大急ぎでやつて呉れ!』と叫んだ。

『先へリイヂエント街のグロス・エンド・ハンキイに。それからエッウエァ街の聖モニカ教會へ!

二十分で行つたら五圓やるよ。』馬車は行つてしまつた。僕は後を追はうかどうしようかと躊躇してゐた時、小路の方から小さい綺麗な四輪馬車が走つて來た。餘程大急ぎで仕度したと見へて馭者の上衣のボタンは半分かけかけで、頸飾は耳の下の方に結んであつた。そして又馬具の華紐についてゐる留金ときたら背にかゝつてゐないでぶら〳〵してゐる。そして馬車が彼女の玄關に止まるか止らないに彼女は玄關から飛んで來て馬車に乘りこんでしまつた。僕は只その瞬間チラリと彼女を見たが、惚れ惚れする程美しい女で、たしかに男を惱殺する容貌さ。

『聖モニカの教會に、ジョン、二十分間で着いたら五圓上げるよ。』と彼女は云つた。

全く又とない好機會さ。一刻も猶豫なるものか、オッスシ君。僕はその後を追かけて走り出さうか。馬車の後へ攀つて行かうかと思つてゐる時、辻馬車がやつて來た。馭者はみすぼらしい御客を二度まで熟々見たが、僕は跳び乘つたのだ。彼が斷るも間ないさ。『聖モニカの教會だ。二十分でついたら五圓やる。』僕はこう云つて時計を見ると十二時二十五分前だ。こうなりや勿論何事だか判つてゐるさ。

馬車は驀進に走つたね。僕はあんなに早く走る馬車には乘つた事がないと思ふよ。が二つの馬車は前を走つてゐた。僕が到着した時には辻馬車と四輪馬車は教會の入口の前に留つてゐて馬は汗びつ

しよりでボッボッ湯氣が立ち上つてゐた。僕は金を拂つて、急ぎで教會へ這入つて行つたよ。教會の中には僕が追跡した二人と白衣を着た牧師の外には人影一つ見えなかつた。

そして牧師は何かしきりに彼等を諫めてゐる樣子だ。三人は祭壇の前に顏をあつめてゐる。僕は迷ひ込んだのらくら者の樣に廊下をうろついてゐると、驚いたね。急に祭壇の前に立つてゐた三人が僕の方へ顏を向けたんだ。そして、ゴッドフリイ・ノオトンが走つて僕の方へやつて來るじやあないか。「有難い。」と彼は云つたよ。『君で間に合ふ。サアサア、』と云ふんだ。』

「どうするんですか？」と僕がきくと。

「來て呉れ給へ。君。來たまへ。たつた三分間だ。でなきや法律が認めないんだ。」

僕は半分引づられる樣に祭壇の所へ行つた。そして僕がどこにゐるかと云ふ事を氣がついた時には、僕はいつの間にか彼等が耳元で囁くのに口ごもりし乍らうけ答へしてゐたんだ。そして何が何やら分りもしない事を請合つてしまつてゐたよ。獨身女のアイリイニ・アドラと、獨身者のゴッドフリイ・ノオトンとの緣組、保證人になる譯さ。それは全く瞬間に行はれてしまつた。終ると花婿と花嫁が右と左から盛に僕に感謝してゐるではないか、その間その牧師は僕の前に立つてニコ〳〵笑つて僕を見てゐたよ。僕は臍の緒切つて初めてこんな馬鹿々々しい位置に立たせられたね。僕はあん

まり可笑しいからさつきもそれを思ひ出して笑つた譯さ。それはこうに違ひないんだ。彼等は結婚し樣と思つたけれども、何處か形式の缺けるところがあつて、牧師は誰でもいゝから證人がなくつては結婚させる事は出來ないと頭から斷つたんだろう。そこへ僕が幸ひ現れたものだから花婿さん、街へしほ〳〵適當な人を見付けに行かなければならなかつたのが助かつたんだ。ところで花嫁さん僕に十圓金貨を一枚呉れたよ。僕はそれを懐中時計につける積りだ、この記念にさ。』

『こりや飛んだ方へ形勢が變つたものだね。』と私云つた。『それから？』

『ウム。其場で僕は切角の計畫も破れ相になつたのを見てとつたよ。何だか二人は直ぐ別れるらしく思はれたので、僕の方でも又即刻チキパキした手段を取らなくてはならなかつた。彼等は教會の入口で別れてしまつた。彼は法學院の方へ、彼女は自分の家の方へね。「私は平常の樣に五時には馬車で公園へ行きますわ。」と別れる時彼女は云つた。それきりさ。何も外には聞かなかつた。彼等は各々異つた方向へ馬車を驅つて走り去つたので、僕も僕で自分の用意をする爲めに去つたよ。』

『用意つて何の？』

『冷肉（ルビーフ）と、麥酒一杯やりにさ。』と彼は呼鈴を鳴らし乍ら答へた『餘り忙がしかつたものだから食事も思ひ出さなかつたよ。だが何だか今晩はなほ忙しさうだぞ。時に。君に一つ助力を仰ぎたいね。』

『喜んでやるよ。』

『法律を犯しても構ふまい？』

『いや、そんな事はちつとも構はないさ。』

『捕縛される憂のある事でも？』

『相當な原因があればね。』

『オヽ、動機は立派なものさ、』

『じや、相棒にならう。』

『君ならきつと頼りになるよ、』

『一体何だね、それは？』

『それか。ターナー夫人が食事を持つて來てから、打明けるとしよう。扨て……』と彼はの時、宿の主婦が用意して持つて來た御馳走を、空腹さうに眺めて云つた。『食ひ乍ら熟議ばならないね。何しろ時間がないのだから。殆ど五時だ。二時間の中に活劇の舞臺へ行ならない。馬車に乘つて出かけたアイリイニ嬢、いやアイリイニ夫人は七時には歸つてはブライオニ館で夫人を御出迎へしなくてはならないよ。』

『それから？』

『外の事は僕に委して呉れなきやあならない。用意は既に出來上つてゐるからね、だが、只一に念を押して置かなくてはならない事があるよ、それはどんな事が起らうとも、君は干渉してはならない事だ。分つたかね。君。』

『僕は局外中立の譯だね？』

『何もしない事なんだ。多分少しは氣味の惡い事があるかも知れないけれどもね。それに一緒になつたり何かしてはいけない、それが結局僕があの家の中へ擠ぎこまれる事になるんだ。四五分たつと居間の窓が開くだろうから、君はその開いた窓の外側に陣取つてゐて呉れ給へ。』

『あゝ、』

『そして君は僕の一擧一動を注意してゐるのだ、僕は君の見える所にゐるからね。』

『好いよ、』

『そして僕が手を擧げた時……さう……僕は君に投げ込むものを渡しておくから部屋の中に投げ込んで呉れ給へ。そして同時に、「火事だ」と叫ぶのだ。どうだ、好く分つたか、君？』

『大丈夫だ。』

『それはちつとも怖ろしいものではない。』と彼はポケツトから長い葉卷の樣な型をした管を取り出し乍ら云つた。

『それは鉛細工師が下水管の試驗に使ふ煙花火で、自然發火する樣に兩端に雷管をつけたものだ。君の仕事はそれ丈だ。「火事だ」と君が一聲叫けぶと、大勢の彌次馬連が火事だ〳〵と騷いで驅けつけるだらう。そした　君はもう用事がないから街の端に行つてゐても好い。十分間も經てば僕は君と一緒になるからね。どうだね。君、よく分つたかね？』

『僕は中立を保持する事だね。それから窓の側へ近付く。君の擧動に注意してゐて、君が合圖をするとこれを投げこんで「火事だ」と叫ぶ。そして街角で君を待つてゐる事だね。』

『さうだ、さうだ。』

『では大丈夫だ。引きうけたよ。』

『有難い、だが、こん度は新しい役を演じるのだからもうそろ〳〵仕度する時間だ。』

彼はこう云つて寢室の中へ消えた。そして二三分經つと、彼は溫厚質朴な獨立新教の牧師の樣に變裝して出て來た。彼の巾の廣い黑い帽子と、袋の樣にダブ〳〵したヅボンと、純白な襟飾、同情ある微笑と、慈愛のあふるゝ樣に見廻してゐる目付はどう見てもジョン・ヘエアそのまゝだ。それは

單にホウムズが彼の服裝を變へたと云ふ許りではなく、彼の表情、動作、そしてその魂までも、體の筋肉の各部分と共に、彼が如何なる人の役を演じやうとも、すつかりその人に變つてしまふ樣に思はれる。實に彼が犯罪專問の研究家――卽ち探偵になつた時、劇壇は優れたる名優を失ひ、又科學界は鋭敏なる推理家を失つたのだ。

私等がベイカア街の家を出たのは六時十五分であつた。そして、サアペンタイン街へ到着した時は未だその時間までには十分間あるのであつた。私達がブライオニ館の前を、その家の主人公の歸りを待ち受け乍らぶら〳〵迂路ついてゐる頃は已に暗くなつて洋燈が點つてゐた。その家は、私がシャロック・ホウムズの簡單な話を聞いて想像に畫いたと同じ樣な家であつたが、その場所は私が豫期してゐた程に閑靜な場所とも思へない。反つてこの靜かな横町としては、驚く程賑かで活氣に滿ちてゐた。そして此處には汚たない、むさくるしい着物を着た人々の群が、煙草の煙を吹き乍ら、聲高く笑ひ合つてゐる。又其處には一人の鋏磨ぎの男が車を置いてゐるし、二人の近衞兵が、子守の小娘とふざけ散らしてゐる。又着飾つた數人の若者等は悠々と葉卷を燻らし乍らその邊を逍遙してゐるのであつた。

『ねえ、君』と私達がその家の前をぶら〳〵ゆき〳〵してゐる時ホウムズは話し掛けた。

『二人が結婚したので、事件は反つて單純になつたよ。でこう云ふ見込みが立つね。僕等の依頼人があの寫眞を內親王に見られてはならない樣に、彼女にはあの寫眞がゴッドフリイ・ノオトンに見付かると大變なんだ。だが當面の問題はだね――どこに寫眞がかくしてあるかと云ふ事なんだ。』

『さうだ、何處だらう？』

『彼女が何時も持つて歩くとはとても思へない。何しろ寫眞は中判だから。着物の中に隱すには大き過ぎてかくせないんだ。それに彼女は、王樣が待伏せて身體搜索位しかねない事を知つてゐる。二度さうした計畫は企てられてゐるんだからね。だから、先づ寫眞は彼女が持つて歩かないとしなくてはなるまい。』

『じやあ何處にかくしてあるか知ら？』

『彼女が常に金を預ける所か又は頼みつけの辯護士かだ。どちらだとも思へば思へるね。然し僕はどちらでもでないと思ふよ。女と云ふ者は生れつき祕密を好む者なんだ。そして何でも人に頼まないで自分で內證にする事が好きだ。どうして彼女が寫眞を他人に手渡しなんかするものか、自分で寫眞を隱蔽してゐるさ、保護者かなにかなら安心して托しもしようが。賄賂が利く樣な辯護士なんかにどうして委托なんかするものか。それにさ、彼女はそれを、數日中に利用しようとしてゐるん

だからね、どこか直ぐ手近な所に隠してゐるに違ひない。だからどうしても自分の家の中だね。』

『然しそれは二度までも捜索されたではないか？』

『馬鹿々々しい。彼奴等なんか捜方を知るものか。何奴等に見つかりつこないさ。』

『じやあ君はどうして捜さうと云ふのだ？』

『僕は捜したり何かするものか』

『では？』

『彼女自身にその在處を見せて貰ふんだ。』

『頭から拒絶するに決まつてゐるよ、』

『斷る事は出來ないよ　オヤ、車の音がする。彼女の馬車だ。では好いか君、僕の命令を間違ひなく實行して呉れたまへ。』

彼がさう話してゐる時、馬車の側燈の光が通りの角を曲つて見へて來た。それは小さい氣の利いた綺麗な四輪馬車で、ブライオニ館の玄關の方へガタ〳〵威勢よく音を立てゝ近づいて來た。馬車が玄關に止まると、街の角でぶら〳〵してゐた例の男の一人が銅貨にでもありつく積りで、馬車の扉を開きに飛んで來た。が同じ様に飛んで來た破落漢に肘でつき飛ばされた。さあこうなれば喧嘩

だ。猛烈な喧嘩が初まつた。それへ例の二人の近衛兵の男が飛んで來て無賴漢の一人の方へ肩を持ち、鋏磨ぎの男は他の一方へ加勢して負けじと互に爭ふからたまらない、喧嘩は次第に烈しくなつて來る。拳固が飛ぶ、その時馬車から下りて來た婦人は、忽ち、拳と、ステッキとで互に火花を散らす様な猛烈な撲り合ひに取りかこまれた。

ホウムズはこの時その貴婦人を保護するために大立廻りを演じてゐる無賴漢の中へ飛込んで行つた。が、丁度彼が彼女の側へ近づいた時。彼は突然一聲叫びを上げて地上にどつと倒れた。と彼の額からは鮮血がダラ〳〵流れた。彼が倒れたのを見て近衛兵の男は片方に、無賴漢共は他の方向に一目散に走り去つてしまつた。その間この喧嘩に加はらずにこの大立廻りを眺めてゐた、着飾つた大勢の人々はこの貴婦人を助け、そして負傷した男の介抱するためにどや〳〵集つて來たのであつた。アイリイニ・アドラは――私は猶アイリイニ・アドラと呼ばう。――入口の石段の上まで急いで登つて行つたが、廣間から射し出る光を身に受けて、スンナリした優美な姿を浮き出させる様に石段の頂に立ち留まつた。そして振返つて街の方を見て美しい聲で尋ねた。

『可愛想にあの御方は、大した御負傷はありませんでしたかしら？』

『死んだよ。』と五六人の聲がした。

『いや、いや、未だ命はあるよ、』と他の者が怒鳴つた。『然し病院に連れて行くまでには死んでしまうだろう！』

『男々しい御方ね、』と一人の女が云つた。『若しこの人が來なかつたら、あの婦人は財布も時計も取られたでせう。あれ奴等は無賴漢ですよ、然も亂暴ね、ォヽ、息を吹きかへした。』

『だが街へ寢かして置く譯にはゆかないね。御家の中へ連れ込んではいけませんでしようか、御婦人？』

『よろしう御座いますとも。居間へ御連れ下さいませ。長椅子が御座いますから。こちらへ、さあ何卒、』

嚴肅に、一言も云はないで皆は彼をブライオニ館へ運び込んで居間に寢かした。其間に私は窓の側の私の立場からその有樣をじゝと見てゐたのであつた。祥燈には灯がともされたけれ共簾は下されなかつた。それで私は彼が寢臺椅子の上に横はつてゐるのを見る事が出來た。私は此時あの女に對して、彼のあの企らみをホウムズが後悔してゐるかどうかは知らなかつたけれ共、心の中で自分達が敵となつて計略を向けてゐるあの美しい女が負傷したホウムズを甲斐甲斐しく介抱してゐるその熱心さとしとやかな態度を見た時には、生れて初めて心から穴へでも入り度い樣な慚愧の情を感じ

たのであつた。けれ共彼が切角頼んだ役目から手をひく事は彼に對して此上ない反逆であつたのだ。私は心を鬼にして、長外套の下から例の煙花火を取り出した。「結局は、」と私は考へた。「我々は彼女を害さうとしてゐるのではない。只彼女が他人の名譽を毀損するのを防止し樣としてゐるのだ。」

ホウムズは寢臺椅子の上に身を起した。そして私は彼が息苦しくて新鮮な空氣を吸ひたがつてゐる人の樣な風をするのを見た。すると一人の下女が横合から走て來て窓をさつと開いた。同時に、私は彼が手を擧げるのを見たので、私は一れを合圖に、部屋の中に、花火を投げ込んだ。事だ！』と一聲大聲で叫んだ。その言葉が口から洩れるか洩れない中に、今までの光景を見てゐた見物人は、――好い仕度をした人も、襤褸をまとつてゐた者も、――紳士も、馬丁も、又は女中までも、――一所になつてどつと「火事だ。火事だ。」と叫び出した。濛々とした黑煙は渦卷いて部屋を通して開け放つた窓から捲き上つた。家の中では慌てゝ走り廻る人々の姿が見える。少したつと家の中で「火事は虛報だ」と云つて立騷いでゐる人々を制してゐるホウムズの聲を聞いた。私は叫び合ふ群集の間をソッと拔け出して街角の方へ行つた。そして十分間許りたつと彼はやつて來て、二人は互に腕を組んで喧騷の場から立ち去つた。彼は足早にそして默々と暫らくの間は歩むで行つた。そして私達はエッヂウエヤー街の方へ通じた靜かな街の方へ行つた

『全くうまくやつて呉れたね、君』と彼は口を開いた。『あんなにうまくは誰だつて出來ないよ、全く首尾好くいつた。』

『寫眞をとつた？』

『場所が判つたよ。』

『どうしてそれを發見出した？』

『彼女が致へて呉れたよ。僕が云つた通りにさ。』

『僕には未だ判らないね。』

『君を不思議がらせる譯ではないけれ共』と彼は笑ひ乍ら云つた。『事件は全く單純なあのさ。勿論君には街にゐた人々が皆僕とぐるだと云ふ事は分つたらうね。今晩丈け、みんな雇つたんだ。』

『いや判つたよ。』

『それから大騒ぎが初まつた時、僕は掌へ濕つた赤い繪具を幣かして持つてゐたんだ。僕は飛び出してさ、倒れる、顏へ手を當てる。そしてあの物凄い姿さ。だがそれは古い術策さ。』

『それも分つたよ。』

『それから彼等が僕を運び込んだ。彼女だつてあゝなれば義理にも入れなくてはなるまいさ。外に

どうも仕方はないじやしないか。そして彼女の居間へ連れこまれた。其處こそ僕が目星をつけた部屋なんだ。寫眞はその部屋か、彼女の寢室かに置いてある。で僕はどちらにおいてあるか見てやらうと思つたのさ。彼等は僕を寢台椅子の上へ寢かしたんだ。僕は風にあたりたい樣な風をすると彼等は窓を明けなくてはならなかつた。そこで君の機會が來たのさ。』

『だがどうしてあの花火が役に立つたのか？』

『そこが重大問題だ。女と云ふものは、自分の家が火事だと云ふと、女の本能として第一番に飛んで行くのは彼女がかねてから一番大事にしてゐるものの置いてある所だ。それは全くどうする事も出來ない情なんだ。そして僕はそれを幾度となく利用したんだ。ダーリングトン・サブスティチユーション・スカンダルの事件でもそれは僕に役に立つたよ。又アーンスワース城の事件にもね。結婚した女は小兒の所へとんでゆくし、未婚の娘なら寶石の這入つた箱の所へ走るものだ。でさ、今日の例の女が一番貴重なものと云へば、我々が搜索してゐる物より外には家の中にはないと云ふ事は明らかな事實だね。スハ火事だと聞けば何よりも寫眞を安全に取り出す爲めに飛んで行くだらうさ。いや、全く火事の警報はうまく行つたよ。あの煙を見て、あの騒ぎをされてはどんな鐵の樣な度胸の好い者だつて全く吃驚くりしたさ。彼女は全くうまく思ふ壺に嵌まつたね。寫眞は右側の呼

鈴の紐の上側の引き戸になつてゐる羽目板の蔭にかくしてあるよ。あの瞬間彼女　其處にゐたよ。そして僕は彼女がそれを半分許り取り出した時チラと見たんだ。僕が火事は虚報だと叫んだ時、彼女は再びそれを突き込んで、花火をチラリと見てそして部屋から走り去つたきり姿を見せなかつた僕は立ち上つてさ、云ひ譯をし乍らあの家を逃出したんだ。僕はすぐ寫眞を手に入れようか、どうし樣かと躊躇してゐたが、馭者が部屋へ這入つて來て、僕をジロ〳〵見護つてゐるものだから、待つた方が安全に思はれたよ。一寸した輕卒から全く取返しがつかなくなるかも知れないからね。』

『そして、今は？』と私は尋ねた。

『僕等の探偵は實際的に仕遂げられたんだ。明日は王樣と一緒に彼女の家を訪問しよう、君も若し差支へなかつたら一緒に行かう。すると僕等は十中八九あの婦人を待つ爲めに居間へ通されるだらう。そして、彼女が這入つて來て見ると僕等もゐないし寫眞も見付からないだらうさ。王樣にとつても自分の手であの寫眞を取り返す事は滿足に違ひなからうからね。』

『で、何時君は訪問する？』

『朝の八時。彼女は未だ起きてゐないだらう。だから、人目にかゝる樣な憂はないよ。だが、僕等は敏活にやらなくてはならないよ。と云ふのは此の結婚の爲めに、彼女の生活や習慣がこれまでとは全く一變するかもしれないからね。僕は早速王樣に電報を打たなくてはならない。』

私達はバイカア街へ到着した。そして玄關に立ち留まつて彼がポケットに手を突込んで鍵を探してゐた時、誰か通り過ぎ乍ら云ふ者があつた。

『お寢みなさい。シャロック・ホウムズさん。』

其の時街路の敷石の上には五六人の人々が居た。けれ共、その挨拶して通り過ぎた男は忙がしく行き過ぎた長いマントを着たスラリとした痩形の若者らしく思はれた。

『僕はあの聲には聞き覺えがある。』とホウムズは朧ろに光の薄れた街を眺めて云つた。『はてな。あの惡戯は大體何者か知ら。』

(三)

私は其夜バアカア街で夜を明かした。そして王様が部屋へとびこんで來た時は、私達は、燒パンと珈琲とで食事をしてゐる時であつた。『君は本當に寫眞を手に入れましたか?』とシヤロクホウムズの兩肩を摑んで熱心に彼の顏をのぞき込んで王は叫んだ。

『未だ。』

『然し取れる望みはあるんだね?』

『エ、望みはあります。』

『では、行かう。早く行きたくてたまらない。』

『馬車へ乘らなくてはなりません。』

『いや、余の四輪箱馬車が待つて居るよ。』

『ジヤ、そりや手取り早くつて好い』

私達は二階から下りて揃つて、プライオニ館へ向つて再び出掛けて行つた。

『アイリイニ・アドラは結婚しましたよ。』とホウムズは氣がつたい樣に云つた。

『結婚した? 何時?』

『昨日です。』

『然し誰と?』

『ノオトンと云ふ英國の辯護士とね』

『然しまさか女は彼を愛す事は出來まい?』

『愛し得る 思ひます。』

『どうしてそう思ふ?』

『あの女か彼を愛すれば、陛下に將來御迷惑を掛けるおそれもなくなるでせう。若しあの婦人が夫を愛すれば陛下の事は忘れるでせう。彼女が陛下を愛さなかつたらどうして彼女が陛下の御結婚を邪魔なんかするものですか。』

『それもそうだ。だがそれにしても……あゝ。彼女が余と同じ地位であつたらなア——どんな立派な女王になれたかもしれない。』

彼は何時の間にか鬱々とした沈默に耽けつてゐた。そして馬車がサアペンタイン街へ到着するまで彼は一言も發しなかつたのであつた。

ブリアニイ館の入口の扉が開いて年老ひた一人の女が石段の上に立つてゐた。そして私達が馬車から出るのをさもおかし相な目で眺めてゐるのであつた。

『貴君は、シャロック・ホウムズさんでせう。』と彼女は云つた。

『僕がホウムズだ。』と私の友は女の心を探ぐる様な、と云ふよりもむしろ驚いた様な目で女の顏を見た。

『本當に！　あの奥様が仰有るには多分、貴君が御出になるだらうつて私にお話しなつたんですの、奥様は且那様と御一緒で今朝チャーリングクロスから五時十五分發の列車で大陸の方へ御出發になりました。』

『ナヽ、何だと』シャロック・ホウムズは驚きと無念さ　爲めに眞蒼になつてタジ〳〵と後へよろめいた。『ジャ、本當に英國を去つたと云ふのか？』

『もう吾び御歸りになりません。』

『そしてあの書類は』と王樣は聲を嗄らして尋ねた。『あゝすつかり駄目か！』

『どうか今に判りますよ。』彼は下女を突きのけて應接間へ飛びこんだ。王と私は其の後へ續いた。

婦人は餘程狼狽して、逃走する前に上へ下へと掻き廻したものらしく、棚ははづしたまゝにされ

抽斗は開けたまゝで、家具などは、其處此處に座敷中に取り散らされてあつた。ホウムズは呼鈴の紐のついてゐる所へ走つて行つて小さい扉をひきはづして、手を突き込んだ。そして一枚の寫眞と一封の手紙とを取り出した。寫眞は夜會服を裝つた、アイリイニ・アドラ自身のもので、手紙の表には、(シャロック・ホウムズ樣御許へ、御訪問あるまで留置き)と書いてあつた。私の友達は手紙をひき裂いて開封して、私達三人は頭をあつめて讀んだ。手紙は前夜の眞夜中の日附けで、そして次の樣に書いてあつた。

『御なつかしき、シャロック・ホウムズ樣、貴君は本當に巧みに仕事を御遂行なされました。私は全く瞞まされました。火事だと云ふ警報の後までも　私は少しも貴君を疑はしいとは思はなかつたので御座いました。然し、妾は、瞞まされてゐた事に氣がついた時、考へ初めましたので御座います。妾は最早數ヶ月以前から、貴君を警戒する樣に注意されてゐるので御座います。若し王樣が探偵を御使ひになるとすれば、それは、必ず貴君に違ひないと云ふ事も聞かされたので御座いました。そして、私は貴君の番地までも敎へられました。その注意があつたにも拘らず、皆こうし　警戒にもかゝはらず貴君が知らうと御思ひの事を、私自身にお示さしになりました。妾が怪しいと思ひ

初めましてからも、私はどうしてもあのやさしい、親切な牧師様が悪い事をなさらうとは思ふ事は出來なかつたので御座います。けれ共、御存じの通り、私は女優として育つて來たので御座いますから、男の仕度をするのは私には別に珍しい事でも御座いません。私は男裝すると何處へでも自由に行けるものですから時々それを利用しました。私はジョン――あの馭者――に貴君を見張る樣に申しつけ、二階へ走つて上り散歩服をつけ(私はそれを散歩服と呼んでゐます)そして丁度貴君が御歸りになると私は二階から下りたので御座いました。

私は、それから貴君の玄關まで貴君の後をおしたい申し、私があの有名なシャロック・ホウムズ樣の眞に興味の目的物であつた事を確めたので御座います。それから私は、むしろぶしつけとは存じましたけれ共、お寢みなさいませとお言葉を掛けた後、夫に會ふ爲めに私は寺院街へ參りました。

私達二人は、かく恐ろしき敵の追求から逃れる第一の良策は逃去するより外にはないと考へたので御座います。で御座いますから、明日は貴君樣が御訪問遊ばしても、私の宅には私はゐないで御座いませう。寫眞につきましては、貴君樣の御依賴者は御安心遊ばして宜敷う御座います。私は今は、王樣よりも好い人に愛され、愛してゐるので御座います。王樣には、あの方が慘酷なる仇を遊ばされし人より、今は何等の故障も受けず、御望みの事を遊ばしてよろしう御座います。

私は寫眞を私の自衛の爲めに持つてゐる事に致します。王樣が未來に御取りなさるかも知れない御手段から逃れる爲めの武器として、私は王樣の御寫眞を保存して置くので御座います。私は寫眞を置いて立ちさります。それは或は王樣が御望みかも知れません。ではこれで擱筆いたします。

かしこ。

アイリイニ・ノルトンより

前姓　アドラ

御なつかしい　シャロック・ホウムス樣

『何と云ふ怖ろしい女だ。――オヽ何と云ふ偉い女だ。……』私達三人がこの書簡を讀み終つた時、ボヘミヤの王は叫んだ。『恐ろしく敏活な、斷乎とした女ではないか、あの女は驚くべき良い皇后になれたのだ。オヽ、余と同等でなかつたと云ふ事は、何と云ふ氣の毒だらう!』

『私があの婦人を見た所では、彼女は――いや全く、陛下よりも、もつと勝れた女の樣です』とホウムズは冷やかに云つた。『陛下の御望みをもつと効果ある樣に終局をつける事が出來なかつたのは全く殘念にたへません』

『いやどうして〳〵、君』と王は叫んで、『これ以上の成功はない。余は彼女は決して自分の言葉を破らないことを知つてゐる。寫眞は燒いて了まつた樣に先づ安全だ。』

『陛下のその御言葉をきけば僕も喜びにたへません。』

『いや、御禮の申し樣もない程君に御世話になつた。どんなに君の勞に酬いたら好いか云つて吳れたまへ。此の指輪は――』と彼は指から綠石の蛇形の指輪を拔きとつて掌の上へのせて差出した。

『陛下は私がもつと〳〵貴重に思ふものを持つてゐらつしやいます。』

『何です。云つて吳れたまへ。』

『此の寫眞！』

王樣は驚いて彼の顏を見つめた。

『アイリイニの寫眞！』彼は叫んだ、『ウムよろしい。若し君が御望みなら！』

『有難う御座います。では此の事件にはもう何もする事は御座いません。では陛下、左樣なら、』

彼は一禮して、王が握手する爲めに差し出した手を見返りもせず私と一緒に彼の部屋へ歸る爲めに立ち去つた。

以上はボヘミヤ王國を脅やかした大事件と、そしてシャロック・ホウムズの全力をつくした計畫が女の智慧によつて打ち破られた顚末である。彼はもと女だと云つてそのする事爲す事を嘲弄したものであつたが、近頃は彼は少しもそれを口にしなくなつた。そして彼がアイリイニ・アドラの噂をする時や、又は彼女の寫眞を指す時にはいつも『あの女』と云ふ尊敬すべき名で呼ぶのである。

紅髮社事件

昨年の或る日のこと、友人のシャロック・ホウムズ君を訪ねるとでつぷりした赭顔の、髪の燃えるばかりに紅い中老の男と切りに懇談中であつた。『飛んだ御邪魔をした』と言ひながら其の儘引返さうとすると、ホウムズが突然僕を室内へ引つ張り込んで扉を閉めた。

『いや、ワトソン君、實に好い時に來て呉れた。』と心から嬉しさう。

『御用中かと思つて。』

『御用中も御用中も、大變な御用中なのさ。』

『ぢや僕は次の間で待つて居つても宜しい。』

『いやその御遠慮には及ばん。ウィルソンさん、此の方はね、私の相談役で、從來も此の人の御蔭で成功した事件が澤山あるのですが、今度の貴君の事件にも屹度非常に役立つことゝ思ひます。』

でつぷりした男は椅子から半ば身を起して、小さい張れぼつたい様な眼でヂロリと一寸評しさうに僕を視ながら挨拶顔に點頭いた。

『まあ掛け給へ。』

とホウムズは、再び席に就いて、何が判斷事でもあると何時もやる癖だが、指頭を揃へながら、

『ワトソン君、君も何だね、僕と同じ様に日常生活の單調と平凡を厭つて何でも異つたことを好む

性質だね。その事は是迄屢々僕の充らぬ事件を書き立てゝ呉れた、否事實よりも面白く書立てゝくれた其の熱心さ加減でも分る。』

『といふのも、君の關係した事件が僕には頗る興味があるからさ。』

『ねえ君、先達メリー・スザーランド嬢の事件に着手する前にも云つた通り、奇妙不思議といふ様な事柄が見度くば宜しく實生活を見る可しだよ。想像力で捏ね上げたものよりも事實の方が遙かに奇拔だ。』

『それは僕には疑問だと、遠慮のない所を述べて置いた筈だね。』

『如何にも君はさう云つた、が併し結局君も僕の意見に贊成する様になるのさ、ならなければ、なる迄幾らでも事實を示して僕の意見の正しいことを證明して見せる。時に君、此のウィルソンさんが今朝おいでになつて近頃珍らしい話をして下すつたのさ。僕が毎日言ふことだが、最も奇妙不思議な事柄といふものは、存外大きな犯罪ではなく一寸した犯罪と關係があるもので、時としては其の犯罪が果してこれが犯罪かと疑はれる様なそんな些細な場合もある位だ、今度の事件も、今迄聞いた所だけでは犯罪であるか、ないか何れとも云へないが、事件の經路からすると、未だ曾て僕も耳にしたことがない位に不思議なものだ。どうでせう、ウィルソンさん、もう一度最初から御話を願

ひ度いものですが。といふのは、單に友人のワトソン君が初めの方を聞かなかつたからといふ譯ではなく、話が如何にも奇拔ですから出來る丈詳しい事實を貴君のお口から伺つて置き度いと思ふのです。一體私は、事件の經路の緒口を一寸でも聞くとそれから色々と似奇つた事件を想ひ出して何とか見當をつけ得るのです。ところが、今度の事件と來てはどう考へてみても不思議無類と申す外ありません。』

客は少々得意の氣味で、ぐつと反身になつて、外套の内隠袋から汚いしわくちやになつた新聞を引つ張り出した。そしてそれを膝の上にひろげ首を前へ出して其の廣告欄を見渡して居る間、私はホウムズが何時もやる樣に、衣服や容貌で此の人物が讀めることもあらうかと、熟々眺めた。

併し大して得る所もなかつた。どう見ても、只肥つた、ゆつたりした、勿體振つた、一個の平凡な英國商人としか見えない。服裝ばといふと、余り綺麗でもないフロックの胸釦は掛けずに、茶色の古ほけたチョッキに太い鎖をつけ、穴の明いた四角な金屬を飾りに振ら下げ、だぶだぶした太い辨慶縞のズボンを穿いて居る。傍の椅子には、毛の磨り切れたシルクハットと、羊羹色になつて、しわくちやな大鵝絨の襟の附いた外套とが載つてゐる。いくら眺めても、極度の煩悶不滿を表した顏色と、燃える樣に紅い頭髮の外には、これぞといふ變つた點はてんでない。

ホウムズは、逸早くも僕の親ふやうな眼付を見てそれと悟り顏に首肯きながらにこり笑つてから云つた。

『しばらく手先の仕事を爲された事、喫煙をやられること、共濟組合員であること、支那に行つて居られたこと、それから、大分書き物をやられたこと、これ丈のことは明らかだが、それ以上の事はどうも僕には見當がつかんのだ。』

ウイルソン氏は愕然として、食指で新聞を抑へた儘、ホウムズの顏をじろじろ視て、

『一體まあどうしてそんな事が御解りなので、第一私が手先の仕事をしたなぞいふことが。いかにも仰せの通りで私は根が船大工です。』

『貴君の御手で分ります。貴君の右の手は左の手よりも一周り大きい。右の手を多く御使ひになつた爲に一段と筋肉が發達してゐます。』

『成る程、では喫煙と共濟會員とは。』

『どうして分るなんて、云ふ丈け野暮ですよ。それに徽章のピンは組合の嚴格な規則から云ふと犯則の方ですな。』

『いや、大きに。頓と忘れてゐました。ところで書物といふのは？』

『右のカフスが五寸ほど目立つて光つて居るのと、左肘の机に凭れる邊につぎが當つて居るのを見ては、他に考へやうがないぢやありませんか。』

『成る程、して支那とは。』

『右の手頸の直ぐ上に魚の文身があるが、此奴は支那でなけりや出來ぬ藝當です。私は文身模樣に就ては多少研究もし、又著作もしましたが、その細かく赤い魚鱗を文身する技術は支那獨特です。のみならず、御時計の鎖にぶら下つてゐる支那の貨幣で事が愈々明白になります。』

ウィルソン君はからからと打笑つて。

『なあんだ。初めの中は旨い事を仰しやると思つてゐましたが、後になつて見りや下らない事ですね。』

『つまり種明しをして了ふから悪いのですよ。「來て見ればさほどでもなし富士の山」でね、かうざつぐばらんに云つて了ふと、僕の名聲も、假令聊かなものながら、地に墜ちて了ふ。ウィルソンさん、廣告は見つかりませんかね。』

『いや、ありました。』

と太い赤い指を廣告欄の中程に据えて、

『此處にあります。これが抑もの發端で、お自分で御一寸御讀み下さい。』

僕は新聞を取つて讀んでみると次の通り。

『紅髮社員に告ぐ。

北米合衆國ペンシルベエーニア州レバノンの住人故ホプキン氏の遺言に依り設立せられたる紅髮社に又々欠員あり。單に名義のみの仕事にて一週四圓の給料を與ふべし。年齢二十一歳以上にして身心共に健全にして頭髮紅き者を望む。月曜日午前十一時フリート町ポープ屋敷七番地、紅髮社事務所内ダンカン・クロッス迄本人來談あれ。』

『全體何の事だらう。』と、私は此の奇妙きてれつな廣告を繰返し讀んだあとでかう叫んだ。

ホウムズは、クス〳〵笑つて身を搖がせた。得意になるとかうするのがホウムズの癖だ。

『少々風變りさね。さ、ウィルソンさん、ずつと初めに戻つて、貴君と、貴君の御一家と、それから此の廣告の爲貴君の身上に起つた變化、それを殘らず御話し下さい。ワトソン君、君其の前に新聞の名前と、日附を一寸書取つておいて呉れ給へ。』

『一千八百九十年四月二十七日の朝刊新報だ。丁度二ヶ月前だね。』

『宜しい。さ、ウィルソンさん、拜聽しませう。』

『先程から申上げて居る通りで』と云つて、額の汗を拭きながら。『私は、シチー附近のコーブルブ小路で、小さな大屋をやつて居ります。大して大きな商賣でもありませんし、それに近年はほんとの食つて行くのが關の山です、もとは番頭も二人程置きましたが、今では一人きりです。それも、見習の爲といふので半額の給料で甘んじて來てくれるから宜いやうなものゝ、さもないと私は何か外に番頭の給料稼ぎをしなけりやならないのです。』

『其の親切な若い人の名は？』

『ヴインセント・スボールデイグといふ男で、そんなに若いとふほどの人ぢやありません。年齢はどうも分りかねますね。ホウムズさん、恁麼氣の利いた番頭たらありませんよ。もつと宜い所へ行つたら私が拂つてる給料の倍額は貰へることは私も承知してますが、何もそんな智慧をつけるでもありませんからね。』

『さうですとも。そんな安給料で來て呉れる番頭さんがあるとは貴君も幸福者ですよ。此の節そんな運の好い雇主は滅多にありやしません。どうも廣告よりも其の男の方に曰くがありさうですね。』

『併しまた相應に欠點もありますよ。その寫眞道樂と來たら、こんな男も珍らしいですね。勉强でもすればよいのに、暇さへあれば寫眞ばかり寫して、寫しちや兎か何その樣に地下室へ潜り込んて

現像をやらかす。これが欠點と云へば欠點ですが、まあ大體働き手の方ですね。惡い道樂はなりません。』

『今でもお宅に居るのでせうね。』

『さうです。外に臺所のことや拭掃除をやる十四になる少女が一人居るきりです。私は獨身者で、未だ妻子を持つたことがありません。でかうした三人が、一つ屋根の下に、拂ふものは拂つて至極閑靜に暮して居るのです。間違の原因はと云ふと、あの廣告で、丁度八週間前の今日でした。ブボールデイングが、此處にある此の新聞を持つて來て、「且那、私は頭髪が紅かつたら宜いと思ひますよ」と申すのです。「何故だ」と聞くと、「何故つて且那、今度紅髪社 また室が出來たんですよ。これには、まれば、まあ一寸した身上にあり付いた樣なもの。それに聞けば、室が多くて人間が不足してゐるので、金を預つた人が金のやり場に困つてゐるといふ話です。私の頭髪の色が變つてくれようものなら、それこそ開いた口に牡丹餅なんだが。」「一體、そりやまあ何の事だ」と私は聞きました、私は大の出無精でしてね、それに商賣が商賣なので、此方から出向かずとも先方からやつて來るし、一ケ月も二ケ月も閾居の外へ出ないことが往々あるのです。ですから世間の事は蔭張り分らず、一寸した事でも私には聞くのが嬉しいのです。番頭は眼を丸くして「且那は紅髪社の事を御存

じないのですか。」と尋ねますから「知らない」と云ふと、「こりや驚いたな、且那なんざあかういふ口には乗つて來いなんだがな」「一體それで幾らになるんだ」「高が知れた一年に二百圓ですがね、仕事が樂だし、それに片手間にでも出來る仕事ですからね、」商賣は不景氣だし、それに余分の收入が二百圓もあると事法なので、私は乗氣になつて、「詳しい話をして貰はうと」と云ひますと、あの廣告を私に見せて「お覽になりや分りますが、今度社に欠員が出來て、委しい事を問合す所も出てゐます。何でも此の社は、エゼキア・ホプキンと云ふ變り者の遺言に依つて出來たもので、此の大將は自らが紅髮であつたものだから、天下の紅髮の人間に同情を寄せ、死んだ後を調べて見たら、莫大な遺産と遺言狀が殘つてゐたんです。其の遺言狀には、此の金の利子で、紅髮の人々に樂な口を設けてやれ　と云ふのでした。聞いた所ぢや、素適にいゝ給料で、おまけにからきし、暇なんださうですよ」「だが、望み手が多いだらう」「いや思ふ程ぢやないんです。ロンドン兒で、丁年以上といふ注文なんですからね。」此の米人はロンドンから出た人なんで、其の緣故で此の市の爲に盡さうと云ふのですが、人の話にや、頭髮が少し位紅かつたり、紅くても黑ずんでゐたりしては駄目なんですつて、てかてか光つて、それで焰を立てゝ燃えるやうでなくちや駄目なんだそうです。思召があるならまあ行つて御覽なさい。だが、二百や三百の端金の爲に足を運ぶがものはありますまい。」

『御覽の通り、私の頭髮は實際思ひ切り紅いので、此の點で競爭するとなりや、誰にでもひけは取らぬと思ひました。番頭は此の事をよく承知して居る樣だから、助けになるだらうと思つて、今日はこれで店を終ひにして、早速同道して呉れといふと、先生休業とあつて大喜び、そこで店を閉ぢて廣告の番地を宛てに出掛けました。

『あんな光景は二度と見られませんね。苟も頭髮に多少とも紅味のあるほどの者は、廣告の募に應じようとして四方八方からシチーに繰込んでゐました。フリート街は紅髮の人間で通行が出來ないほど、ボープ小路は丸で手車に積んだ野菜と同然。たつた一回の廣告でこんなにも人が集まつて來るかと思ひましたよ。麥藁色、レモン色、蜜柑色、錬瓦色、赭土色、いや樣々な色がありましたが、成る程番頭の云つた通り、眞當に燃える樣に鮮やかな奴は餘りありませんでした。待つてる人數があんまり多いのでこいつは駄目だと諦めて歸らうとしましたが番頭が聞かない。何處をどうしたものか、番頭は押し合ひへし合ひ群衆の中を切り拔けて事務室の石階まで連れ出してくれましたが、此處も中々の混雜。望みを懷いて昇る人あり、落膽して下る人あり、かういふ人達が二條に分れてぞろ〳〵と潮の樣。その中を私達は無理やりに割込んで、やがて事務室へ出ました。

『それは實に面白い目に會ひましたな。何卒其の面白い所を續けて。』

とホウムズが、客が一寸一休みして一服やつて記憶を呼び起して居る間に云つた。

『室内には、椅子が二脚と、縦の卓子が一臺あるだけ。其の卓子の向ふに、私より一層頭髪の紅い小柄な男が坐つて居る。此の男はやつて來る候補者毎に二言三言云つては、何とか難癖をつけて追返す、口にありつくのも並大抵の事ぢやないと思ひましたね。所が私の番になると、他の人に對するとは打つて變つて丁寧な應對振り、私達が這入ると扉を閉めて、差向ひの談話になりました。此の方はウィルソンさんと云つて、入社御志望なんで」と番頭が云ふと、先方は「いや至極適任です。全く注文通りの方です。こんな立派なものは未だ見た覺えがない。」とかう云つて一番後ろへ退がつて首を傾げて私の頭髪を熟々眺めますので、私はこつ恥かしくなりましたよ。すると突然飛んで來て私の手をいやといふ程握つてお出度う云ふのです。『お疑ひ申しては相濟みません話ですが、一應用心の　ですから』と云つて、兩方の手で私の頭髪を摑んで引つ張るのです。私が「痛い」といふと、やつと手を放して、「あ、涙が出てゐる。これでこそ本物。實は假髪で二度、繪具で一度、欺されたことがあるので、用心をせんと不可んのです。封獵で誤魔化さうなどゝする連中はいくらもあるので、お聞きになつたら人間の根性つてこんなものかと愛想がつきますよ。」かう云つて窓際へ行つて、聲を限りに口は塞がつたと怒鳴りました。失望の聲が下から聞えて來る、群衆は思ひ思ひの

方向へ散らばつて、殘る紅髪は私と幹事だけになりました。

「私はダニカン・ロスといふ者で、矢張り慈善家ホプキン氏の遺産で扶助を受けて居る一人です。時にウィルソンさん、貴君は既婚者ですか御家族はおありですか。」と聞きますからありませんと答へると、急に失望した體で　おや〳〵それは困りましたね。一體此の基金は、紅髪を保護して行くばかりでなく、益々種を殖さうといふ爲のものなのですから、御一人とあつては殘念至極です。」私もこれを聞いて、折角の口も外れるかと思つて悄氣ましたが、相手は良久考へた後で「いや、宜いでせう」と云ひました。「餘人ならば如何しても不可ない所ですが、貴君の髪に免じて少し位の故障は我慢せずばなりますまい。では何時から御仕事に取掛れますか」『そいつは少々難かしいので、今現に他の商賣があるのですから」「いや、旦那、その御心配は無用です。其の方は手前が引受けますから」と番頭が申します。「時間はどんなものでせう」と聞くと「十時から二時までです」との答。

『質屋の商賣は多く夜分、それも支拂日前といふので木曜金曜に多いので、午前中の金儲には好都合なのです。それに番頭が好い男だし、何事があらうと萬事は見て呉れると思ひましたので、

「それは至極誂向きです。して給料は」

「一週四圓で」

「仕事は？」

「全く名ばかり。」

「名ばかりとは？」

「といふのは、時間中、此の室内、には限りませんが、兎に角此の建物の中に居ればそれでいゝのです、併し此の建物から出たら最後お拂ひ箱ですよ。遺言にも其の點は特に嚴重に斷つてあります。執務時間中に事務所を離れたら條件に背くことになりますぞ。」

「一日に僅か四時間位のことですから大丈夫でせう。」

「どんな言譯でも、假令病氣にせよ、用務にせよ、言譯は駄目ですぞ。出たら最後免職です。」

「で仕事といふのは？」

「英國百科全書を寫すのです。彼の押入に第一卷があります。インキと、ペンと、吸取紙は自辯で此の卓子と椅子を御使ひ下さい。明日からでも宜いですか。」

「宜うがすとも。」

「では左樣なら。重ねて好位置を得られた御好運を祝します。」

と云つて私を送り出しました。私は番頭と連れ立つて家へ歸りましたが、棚から牡丹餅の此の幸

運に如何してよいやら、如何云つてよいやら分らぬほどの嬉しさでした。』

『さて私は一日中其の事を種々と考へてゐましたが、夕方になると心細くなりました。といふのは如何いふ目的か知らないが、これはてつきり大のペテン仕事に違ひないと鑑定をつけたからで。第一こんな遺言狀を書くといふことも何だし、又百科全書を寫す丈で一週四圓といふ金を拂ふなどゝ云ふことは、迚も眞當とは受取れぬと思つたのです。番頭は私の氣を浮立たせようとしてあらゆることをしましたが、寢る時分にはもう私は凡てを嘘と極めて了ひました。併し翌朝になると、まあ兎に角覗いて來ようと思つて、インキの小壜と鵝ペンと大判紙を七枚買つて、ボーブ小路へ出掛けました。』

『ところが行つて見ると、意外なことには、又嬉しいことには、萬事萬端滯りなく、卓子はちやんと据えてあり、ダンカン氏は愈々私が仕事をする處を見に來ました。Aから始めち樣にと云つて出て行きましたが、折々監督にやつて來ました。二時になると大層拂取つたと御世辭を云ひながら、其の日の暇乞をして、私が出て行つた後の室の錠を下しました。』

『こんな調子で一日々々と經つて、土曜が來るとロス氏がやつて來て、一週間の給料だと云つて金貨を四枚机の上へ置きました。次の週も、又其の次の週も同樣、私は毎朝十時に出勤して二時に退

出しました。其の中に段々ロス氏は朝の中にたつた一度しか來ない樣になり、暫くすると全く來なくなりました。それでも私は勿論一寸だつて室を出る樣なことはしませんでした。何時やつて來ないとも限らないし、それに下手なことをして折角ぶつかつた怎麼結構な仕事をフイにするのは嫌でしたから。』『八週間もかくて過ぎ、Aの部は大方終つて、勉强すりやもう少しでBの部にかゝれさう。紙代も多少かゝり、書いた物は棚に殆んど一杯になつたと思ふと、仕事がばつたり止まつて了ひました。』

『止まつた？』

『さうです。それもたつた今朝の事で、私は例の通り十時に參りますと、扉には錠が下してあつて眞中に鋏で止めた四角い紙がありました。これです、御讀み下さい。』

男は、書翰紙大の白の厚紙を突出した、それを見ると、

『紅髮社解散。千八百九十年十月九日』

ホウムズと僕とは、此の簡單な揭示文と、其の向ふの悔しさうなウィルソンの顏とを見比べてゐる中に可笑しさがこみ上げて來て前後の考へもなく到頭二人は笑ひ出した。

客は燃える樣な髮の毛を根元まで赤くなつて。

『一體何が可笑いのです。何も別に可笑しいことはないぢやありませんか。笑ふより外に分別がないと云ふなら　他所へ行つて賴みますよ。』

ホウムズは、起上らうとする客を無理に座らして、

『いや、いや、笑ふ段ぢやありませんよ。實際此の事件は何にも替え難い見逃すべからざる事件です。いや實に氣味のよいほど奇拔な事件です。だがかう申しては失禮かも知れんが少しばかり滑稽な所があるんですよ。ところで、揭示を見てから貴君は如何なすつた。』

『驚いて腰を拔かしちやつたんです。全く途方に暮れましたね。で近所の店々を訪ねて樣子を聞いてみましたが一向に分りません、で最後に階下に住んでゐる差配に尋ねてみましたが、てんで紅髮社などいふものは知らないと云ふ。ではロス・ダンカンといふ人間はどんな人間かと聞くと、そんな名は初めて聞く名だと云ふ「四番にゐた彼の人ですよ」と云ふと、「え、彼の髮の赤い男ですか？」「さうです」「あゝ、彼の人ですか、あれはね、ウィリアム・モリスと云つて辯護士です。新宅の出來る迄當座の間に貸せにといふ譯で宅の一室を使つてゐたのですが、昨日引越しました。」「何處へ行つたら會へるでせう。」「今度の事務所へ行つたらよいでせう』と云つて番地を敎へて呉れました。

ええと何でも、セントボール寺院の傍で、エドワード町十七番地つて云ひましたつけ。」

『早速駈け付けてみると、其處は義足製造所で、ウイリアム・モリスも、ロス・ダンカンもどちらも知らぬとのこと。』

『それからどうしました』とホウムズ。

『でサックス・コブルグの長屋の自宅へ歸つて、番頭に相談しましたが、これとても別にどうすることも出來ず、唯先方から手紙でも來るのを待つたら如何です位のところ。だが、それぢや物足りませんや。恁麼結構な仕事をむざむざ失ふ氣にもなれません。それで貴方が困つて居る者にいゝ智慧を御貸し下さるといふ話を豫々承つて居りましたので、直樣御訪ねした樣な譯で……。』

『それはいゝ所へ御氣が付きました。貴方の事件は如何にも奇絶妙絶ですから、私も喜んで一つ調査をしてみませう。御話に依つて察すると、見掛けに依らぬ重大事件が潜んで居るらしいです。』

『重大ですとも、何しろ一週四磅といふ金を取り損なつた譯ですからな。』

『けれども、貴方一個人からいふと、餘り苦情も云へまいて、苦情どころぢやない、Aの部を寫しとつた爲に大分物知りになつたことは勿論のこと、お蔭で三十磅ほど身代が殖えたといふも、損はありませんや。』

『さうです、損はありません。だが、一体奴等が何者であるか、又如何いふ了見で恁麼惡戯――惡

戯かどうか實は分りませんが――をやつたものか、それを知り度いのです。三百二十磅といふのは惡戯にしちや隨分費用のかゝつた惡戯ですよ。』

『一肌抜いて此等の問題を解決して上げ度いと思ひます。ところで、二三御質ねしますが、例の廣告を貴君に知らした御宅の番頭ですね、その男は何時頃御雇ひになつたのです。』

『その時から一ヶ月ばかり前です。』

『如何いふ緣で參りました。』

『廣告を見てゞす。』

『應募者は此の男だけでしたか。』

『いえ、十二人ほどありました。』

『如何して此の男を採用したのです。』

『器用で御負けに廉く來て呉れますから。』

『さうさう、半額といふのでしたね。』

『さうです。』

『そのヴインセントス・ボールディングといふ男はどんな男ですか。』

『小柄な、頑丈造りの、てきぱきした、年齢は三十より下とは見えませんが鬚髯も何もなく、額には硝酸でもかけたらしい白い痕があります。』

ホウムズは餘程興奮した体で、居住ひを直をし。

『さうだらうと思つた。耳に環を箝める孔はありませんでしたか。』

『ありました、小さい時分に、ヂプシィが明けて呉れたとか云つてゐましたつけ。』

『フフム』と云つて、深く椅子に身を落して考へ込んで、

『まだお宅に一緒にゐますか。』

『えゝ、ゐますとも、たつた今留守をさして出て來たばかりです。』

『これまで御留守の間に商賣上不都合はありませんでしたか。』

『別に不都合はありませんでした。尤も朝の中は商賣も暇ですから。』

『いやこれで十分です。一兩日中に此の問題に就ての私の考を發表しませう。えゝと今日は土曜ですから、日曜迄には片が附くでせう。』

客が歸つた後でホウムズは、

『ワットスン君、君はこれを如何見るね。』

『僕には薩張り分らんね。實に不思議な事だ。』と私は正直のところを云ふ。

『一般に不思議な事件ほど後になつて見ると何でもないものだ。一番困るのは平凡な犯罪さ、丁度有り觸れた顏は見別が付き悪いと一般だ。何は兎もめれ早速事件に取掛らう。』

『で、君はこれから如何する積りかね。』

『一服やるのさ。二三服はかゝりさうな問題だね。五十分程僕に話を仕掛けずにゐて呉れ給へ。』

と云ひ乍ら、椅子の上に身を丸くし、痩せた膝頭を鼻先まで引寄せ眼を閉ぢたが、其の口から突き出てゐる黒いパイプは宛ら怪鳥の嘴の様。こいつは先生眠り入つたなと思つた、そして斯く申す私までがコクリ〳〵とやり出したが、其の中に突然ホウムズは、決心でも着だらしく、つと起上つて暖爐の庇の上へパイプを置いて。

『午後聖ジエームス館でサラサーテの演奏があるぜ。君、五六時間患者の方を手放す譯には行かんか。』

『今日は閑だ、僕の職業は、一休眠の廻る程忙しいといふことはない。』

『では行かう、帽子を被り給へ。最初シティを通つて行くから辨當は途中で食へる。プログラムを見ると大分獨逸音樂があるやうだが、この方が伊太利や佛蘭西ものよりも僕の趣味に叶つてる。獨

遇ものは内省的だからね、内省的な僕には丁度會ふのだ。さあ行かう。』

僕等はアルダースゲート迄地下鐵道で一つた。それから少し歩くと、朝の中に聞いた事件の發生地のサックス・コーブルグ街へ出た。狹い汚苦しい陰氣な所で、煤けた煉瓦の二階造が四角に建並んで居る中に、柵を廻らした狹い土地があつて、其處には雜草が生茂り、威勢の惡い桂の植込が煤煙と蒸氣とに攻められて苦戰して居る。角の一軒に、金箔の球が三個と、ジアベヅ・ウィルスンと白い文字で書いた茶色の看板が見えたので、ハハアこれが例の紅髪先生の店かと頷かれた。ホームズは其の前に佇んで小首を傾けて邊りを物色してゐたが、其の間彼の眼は輝いてゐた。それから通りを徐かに歩いてまた元の所へ歸つて鋭い眼付で家並を睨んでゐた。が終ひ質屋の前へ來て鬚石を杖で二三度コツ〳〵と強く叩くと思ふと今度はツカ〳〵と戸口に歩み寄つて戸を叩いた。すると直ぐ戸を明けた男は顏を奇麗に剃つた利巧相な若者。何卒御這り下さいと云ふ。

『ありがたう。なにちよつと海岸通りの方へ行くには如何行つたらよいのか、それを御尋ねし度いと思ひまして。』

『三番目を右、四番目を左。』

と番頭は機敏に答へて戸を閉めた。

ホウムズは其の家を離れると

『鋭い奴だ。僕の鑑定では、ロンドンでは四番目を下らぬちやきちやき者だ。太つ腹な點に於てはひよつとすると第三位を占めるかも知れんで、まんざら知らぬ男でもない。』

『あの番頭が今度の紅髪社事件に大いに關係があるのは明かだ。君が道を聞いたのもつまりは奴を見たい爲だらう。』

『奴ではない。』

『では何をさ。』

『ズボンの膝を』

『何が眼についたね。』

『僕の豫想したものが。』

『鬚石を叩いた其の譯は。』

『君、今はね觀察の時で語るべき時ではない。吾々は敵國にある間諜だ。サックス・コーブルグ街の事はこれで多少分つたから今度は一つ裏通を探險しよう。』

寂しいコーブルグ街から、角を一つ曲つて出た街路は、繪の表と裏ほどの相違。此處は市の中心

から西部北部くと通ずる大通りの一つで、車道は商品の運搬で往来織るが如く、人道はと見ると、これも急ぎ足の群集が蟻の様。ズラリと軒を並べた立派な店や嚴めしい商館を見ては、今しがた後ろにして來て。あのさびれた生氣のない街の一歩裏へ廻ると怎麼通りがあらうとは迚も受取れなかつた。

ホウムズは角に立つて家並を見渡し乍ら、

『待てよ、僕は此處らの家の順序をちやんと呑込んで置き度いものだな。ロンドンの事を精しく知つてゐたいのも僕の道樂の一つなのだから。かうつと、煙草屋、新聞屋、中央銀行コーブルグ支店精進料理、それから馬車製造所、材料置場、これだけだ。その次へ行くと町の名が變るのだな。よし、これで用事は濟んだから、これからが芝居見物といふ段取。サンドウィッチと珈琲でもやつてそれから音樂の世界に悠々遊ばうぢやないか。其處には美妙の聲あり優雅の調べあり、難問以て吾人を煩す紅頭の客なしだ』

ホウムズは大の音樂狂で、演奏も中々巧みだし、作曲にかけても非凡の技倆を持つてゐる。其の日の午後中、彼は如何にも愉快さうに痩せた細長い指を動かしながら音樂に聽惚れて棧敷に坐つてゐたが、その微笑を含んだ温顔、どんよりと夢見る樣な眼付を見ては、これがあの冷酷な、鋭い機

智を持つた、手の早い、獵犬と綽名を取つた探偵ホウムズとは到底受取れなかつた。彼の奇異なる人格には二重の性質があつて、これが交互に其の鋒鋩を露はすのだ。或る時は大に詩的な瞑想的な氣分が勝つてゐたかと思ふと今度は其の反動として極端に峻嚴な、鋭さを露すといふ樣な事がある。極端なる安逸から極端なる活動と早變りするといふのが彼の性質の傾向で、幾日も幾日も安樂椅子に凭れて即興の詩作をしたり、古書を讀み渉つたりした後の活動ほど眞に恐るべきものはない。其の時こそは丁度狩獵家が獲物を追ふ時の樣な燃ゆる樣な熱望が猛然として彼を襲ひ、明快な推理力が殆んど本能とも思へるほどに働き出すものだから、彼の遣口を知らぬ人から見ると、彼の頭の働き方は迚も人間業とは思へぬほどである。で僕は、其の日の午後聖ジェームズで餘念なく音樂に聞き惚れてゐる彼を見てかう思つた。あゝ此の男に覘はれてゐる人こそ災難だと。

音樂を聞いて外へ出ると、ホウムズが、

『勿論君は家へ歸るのだらうね』

といふから、

『さう、歸つても宜いね』

『僕は少し暇のかゝる用事があるんだ。此のコーブルグ・スクエアの事件は中々容易ならぬ。』

『容易ならぬとは？』

『大罪をたくらんでゐる者があるのだ。尤もそれを未然に防ぎ得る自信は十分ある。が、今日は土曜だけに事が面倒だ。事によると今夜君の手を藉りることになる。』

『何時頃？』

『十時なら結構。』

『では十時に、ベーカー街に行つて居ることにしよう。』

『何卒。それから君、多少危險があるかも知れないから、衣嚢に軍用ピストルを忍ばせて來て呉れ給へ。』

かういひさま、彼は手を振つて踵を回らして忽ち人込の中に消え失せた。

僕は世間の人間に比べて格別頭の鈍い男とも思はないが、ホウムズと一緒になつて事をするとなると、熟々自分は間抜だなといふ感じがしてならぬ。今度の事でもさうだ。同じ事を聞き同じ事を見ながら、彼には既往に起つた事が判然と分るばかりか、將來起らんとする事さへも承知してゐるらしいのに、僕には如何かといふと、全事件が只もう複雜して不思議たといふ位に止つてゐる。僕はケンシントンの自宅に歸る馬車の中で、百科全書を寫した紅髮の客から聞いた奇妙な話から、コ

ーブルグ街の檢分、さては、ホウムズが別れ際の薄氣味惡い言葉など、それからそれへと思ひ浮べた。一体今夜の探險は何だらう？　何故自分は武器を携へて行かなけりやならないのだらう？　何處へ行つて何ういふ仕事をするのだらう？　あののつぺりした質屋の番頭といふ奴が恐るべきもので、此奴が惡をやりさうだとホウムズが仄めかしたが、此の謎は如何しても解けない。到頭斷念めて夜になつて一切の解決を待つことにして、其の問題はそれなりにしてしまつた。

其の晩の九時十五分過に、僕は家を出てパークを拔け、オックスフォード街を通つてベーカー街へ出た。見ると戸口に馬車が二臺待つてゐる。廊下へ掛ると二階に話聲。ホウムズの室に這入ると來客二人、談恰も酣といふ所。一人は警吏のピーター・ジョンズ、今一人は、丈の高い、痩身の愁顏をした男で、ぴか〳〵した帽子と窮屈なほどきちんとしたフロックが眼につく。ホウムズは外套の釦をはじめ、帽子掛から太い獵杖を下ろして、

『さあ、これで頭數が揃つた。ワットスン君、君は警視廳のジョーンズ君を知つとるね。メリウエザー君を紹介しよう。今夜の冒險に加つて貰ふ方だ。』

警吏は例の勿體振つた調子で、

『また二人が相棒になつて狩に出掛けるのです。ホウムズ君は狩出しの名人だが、但し此の人には

力を添へて其の獲物を追詰めるといふ助太刀の老犬が附いてゐなけりやいけない。』

『捕えて見れば鴨一羽といふ樣な結果に了らなければよいが。』

ヒメリウエザー君は不景氣な事を云ふ。

警吏君は昂然と

『ホウムズ君の技倆には多大の信用が置けるです。ホウムズ君には獨特の遣口があるので、さう云つちや何だが、少々理論に走り過ぎた、空想に偏し過ぎた嫌ひはあるが、探偵の素質は十分あります。例のショルトー殺人事件や、アルガ寶物事件などで一二回は殆んど專門家を凌いだと云つてもよい位でしたからね。』

メリウエサー君はジョーズに敬意を表して

『いや貴君がさう仰しやるなら間違ひはありますまい。それは兎も角お蔭で今夜はトランプも出來ない。土曜の晩にトランプ遊を缺かしたのは二十七年來今夜が始めてですよ』するとホウムズが

『今に分りますがね、今晩の賭は今迄にない樣な大した賭で、花々しい勝負ですよ。メリーウエザーさんは三十萬圓許りの賭だし、ジョーンズ君には今迄捉へてゐた犯人の首が賭つて居るのです。』

『眞當にあのジョン・クレイ！殺人、窃盗、贋造、僞造の大犯人。年こそ若いが、其の道にかけて

は中々の豪の者。他の犯人は兎も角、彼奴だけは如何にもして捕縛し度いものだ。此のジョン・クレイといふ奴は中々由緒のある男だ。祖父は皇族で、自分もイートンやオックスフォードに學んだこともある。惡い事にかけては手も八丁口も八丁、犯罪の證跡は隨所にあがつても肝心の當人の姿は一向見當がつかない。今週スコットランドで賊を働いて居たかと思ふと、もう次の週にはコーンウエンへ行つて孤兒院を建てる資金を募集してゐるといふ樣な始末。吾輩は何年となく此奴の跡をつけて居るのだが、とんと出會はさない。』

『其の當人を今晩は紹介出來ると思ひます。僕も御同樣此のジョン・クレイには從來二三の關係事件もあり、其の道の巨魁といふ點に於て貴説に同意です、それはそうと、もう十時過ぎですな。もう出掛けても好い時分でせう。何卒お二人で前の馬車へ、ワツトスンと私は後の車でお伴をしませう。』

馬車の中ではホウムズは餘り口を利かずに、後ろに凭れ掛つて午後の演奏會で聞いた曲を口誦んでゐた。車はがら〳〵と瓦斯燈に照らされた八幡の藪知らずといつた樣な長い長い街を右往左往してフアリントン街へ出ると、ホウムズが、

『もうぢきだ。此のメリウエザーといふ男はね、ある銀行の取締で、今度の事件には直接關係があ

るんだ。ジョンズを序に引張つて來る氣になつたのは、大將仕事をさせちやからきし無能だが、根が悪い人間ぢやなし、それに一つよい事には、食ひ付いたら放さないといふ壁蝨の樣な粘り强い所がある。さあ此處だ。前の二人が待つてる。』

見れば今朝來た往來だ。相變らずの雜沓、馬車を捨て、メリウエザー君の案内で狹い路次を通つて、同君の開けてくれた潜戸を潜つて中へ入ると其處に狹い廊下があつてこれが盡きると頑丈の鐵門。これも開けてうね〳〵した石段を下りゐと又もや恐ろしい大きな門がある。メリウエザー君は一寸立止つて提灯を點けてそれから眞暗な土臭い路を引張り廻して第三の扉を開けて大きな土窖へ案内した。其處には柳細工の籃や大きな箱やが其處ら中に堆高く積んであつた。

ホウムズは提灯を翳して四邊を見廻し乍ら、

『上の方からは手出しが出來ませんな。』

『下からも大丈夫』

と云ひながらメリーウエザー君は床石を杖で叩いてみたが、

『おや、おや、こりや洞の樣な音ですぞ。』

と意外といふ顏付。ホウムズは屹となり、

『ほんとにもう少し靜かにして貰ひませう。これでは折角の探險も臺無しになつて了ひますよ。此の箱の上へでも腰を下ろして默つて見てゐて下さらんか。』

眞面目なメリウエザー君は、尠からず癪に觸つた氣色で、籃の上にのる。ホウムズは提灯片手に蟲眼鏡で敷石と敷石の間の隙間を仔細に檢べる。五六秒もすると、もうこれで十分といふ狀で、つと起立つて蟲眼鏡を懷中に收め

『未だ一時間と十分ある。どうせ彼の質屋の主人が床に就くのを見屆けた後でなければ奴等には手の出し樣がないのだ。愈々主人が寢たとなつたら奴等は一刻も猶豫しない、それも其の筈、仕事を早く片附ければそれ丈けゆつくり落延びられる譯だから。ウットスン君、君にも分つたらうが、此處はロンドンのある大銀行の支店の土窟なんだ。市中の悪徒どもが現在何故に此の土窟に多大の注意を拂つて居るかは取締のメリウエザー君に聞けば分る話だ。取締は低い聲で、

『佛蘭西の金塊があるからです。盗難の憂があるといふ警告は制度となく聞かされました。』

『佛蘭西の金塊ですつて?』

『さうです。數ヶ月前に、增資の必要がありまして、佛蘭西銀行から二十五萬圓許り借受けたのですが、此の金が未だ手を付けずに此の土窟に寢せてあるといふ事が世間に知れたのです　現に私が

腰掛けてゐる此の籃の中にも一萬五千圓といふ金が、鉛の板に狹んで入つてゐるのです　一支店に貯藏して置く金塊としては現在の高は可成り大きい方です。これに就ては重役連も頭痛に惱んでゐる次第です。』

『お尤もな事で』とホウムズ。『ところでもうそろ〳〵手筈をきめても好い時分ですな。一時間も經たぬ中に眼鼻がつきますよ。時にメリーウエザーさん、其の提灯を隱さないといけませんね。』

『そして暗闇に坐つてゐるのですか？』

『まあ、さうですな。實はトランプを一組懐中して來たことですから、幸ひ四人組でお好きな遊びも出來ると思つたのですが、敵も用意周到な事でせうから一提灯の爲にみすみす失敗しても殘念な話　ところで先づ第一に御互の位置をきめなけりやならない。何しろ相手は大膽不敵の奴輩だから、假令不意打を喰はしても、此方が用心してゐないと反對にやられるかも知れない。僕は此の籃の陰に隱れますから、貴君方も其の邊へ。それから私が奴等に角燈を向けたら直ぐに皆で押寄せること。若し敵が發砲したら、ウツトスン君、構ふこたあないから擊殺し給へ。』

僕は拳銃の引金を上げて自分の前の箱の上に置いた。ホウムズが角燈に覆ひをすると、あとは眞の闇。嗜いのなんのつて、こんな暗さは生れて初めてだ。燒した金屬の臭がつんと鼻を突く。燈火

が未だ消えないで居ることが分る。いざといふ場合にはサッと惡漢の顏を照すのだ。神經が無性に興奮して今か今かと片唾を呑んで待つて居る僕には、急に眞暗になつた此の冷たい濕つぽい土窟の空氣は何となく頭を壓へ付ける樣に感ぜられた。

ホウムズは囁いだ。

『敵の遁道は一つしかない。コーブルグ街へ後戻りするだけだ。ジョンズ君。賴んだ事はやつゝ呉れたでせうな。』

『大丈夫、表には警部一人に巡査二人を張番さしてあります。』

『それぢや穴は皆塞がつた。さあもう口を利かずに默つて待つて居なけりやならぬ。』

いや、その待つてゐ間の長かつたこと！後で聞いて見りやたつた一時間と十五分ださうだが、僕には　もう夜が明けさうに思はれた。動いちや惡からうと思つて我慢してゐたものだから手足は疲れて丸で棒の樣、それとは反對に神經は極度に緊張し耳は非常に鋭敏になつて連中の靜かな呼吸つかひが聞えるばかりか、肥滿したジョーズ君の深い重苦しい息と、頭取の力ない細い溜息との區別さへ分つた。僕の居る所から床石の見當に箱が見える樣になつてゐた。突然光がチラッ！

初の中は床石をぼんやり照すだけの薄光であつだが、やがて　れが段々廣がつて線となり音も何

もせずに割目がすうと開いて女の手かとも思へるほどの白い手がにゅきつと現れて光の射す眞中邊を手探りするかと思ふと忽ち其の手は引込んで、あとは、先刻の薄光だけが罅隙の邊りにほんのりと青白く見えるばかりで室はまた元の暗黑に歸つた。

併しそれもほんの束の間。みりみりといふ音がして幅廣の白い床石の一つが横になると四角な穴が口を開いて其處から角燈の光が射した。其の穴から童顏が覗いて、四邊を見廻してゐるが、今度は穴の兩側に手を掛けて肩まで顯はれ腰まで出て、しまひには片膝を穴の緣に突いたと見る間に、穴の傍に突立ち上り、同じく小柄な優形の蒼白い顏をした恐ろしく頭髪の紅い相棒を引摺りあげようとしてゐた。

『大丈夫、誰もゐない。』と囁く。『鑿と袋はあるか。や、や大變、逃げろ、おれは絞罪の覺悟だ。』

ホウムズは躍り出て曲者の頸玉を攫んだのである。一人は穴へ潜り込んだが、逃がさじと引捕へようとするジョーンズの爲に裾を裂かれる音がした。角燈の光にチラと敵の拳銃が見えたが、ホウムズは携へた獵杖で相手の手の甲を叩き擲ぐつたので、拳銃はがちりと床の上に落ちた。

『もう駄目です。ウレイ君、逃げる道はありませんよ。』

とホウムズは言葉優しく言ふ。クレイは落付拂つて、

『それは私も承知してゐます。併し相棒は無事です。尤も裾を裂かれた樣ですが。』

『入口に三人待つて居ますよ。』とホウムズ。

『おやそうですか。實にぬかりがありませんな。感服感服。』

『いや私も貴君には感服します。紅髪の趣向は斬新奇拔、中々有効です。』 するとジョーンズが、『今直きに相棒に合はしてやらう。彼の男の穴潜りの速いことといつたら迚も吾輩の及ぶところではない。さあ手錠を嵌めるから手を出せ。』

ピンと手錠が掛かると曲者は、

『そんな汚らはしい手で觸つて貰ひますまい。御存知ないかも知れないが、かう見えても王族の血が通つてゐる身體なんだ。それから私に物を云ふ時は、『貴殿』とか『何卒』とか云つて貰ひたいものだ。』

ジョーンズは相手をじろじろ見てくすくす笑ひ乍ら、

『宜しい。では、何卒上に御出でを願ひます、其處から御馬車を調へ殿下を警視廳へ御連れ申すで御座りませう。』

『うむ、その方が宜しい。』

とクレイは落付いたもの。吾々三人に輕く會釋をして探偵に連れられて徐々と歩を運んだ。

續いて土窟を出る時にメリウエザー君は

『ホウムズさん　お蔭で眞實に銀行は大助かりです。何と御禮を申して宜いやら、どんな御恩返しをしてよいやら分りません。私共の經驗にない樣な此の大膽な銀行盜賊の行爲を探知して遺憾なくその裏をかいた事は隱れもない事實です。』

『此のジョン・クレイには私も二三怨みがあつて、何時かそれを晴らしたいものと思つてゐたのです。此の事件に就ては多少費用も要りましたから、それは銀行の方から支辨して頂くことゝして、それ以外には何等報酬は望みません。種々珍らしい經驗を得たことゝ、紅髮社の奇談を聞いた丈けでもう十分酬いられてゐますから。』

* * * * *

翌朝、ベーカー街でウイスキー・ソーダを傾けながらホウムズは次の如く說明した。

『ねえ、君、紅髮社といふ名前で百科字書の筆記といふ奇怪な廣告をやつた其の目的は、あの餘り利巧でない質屋の亭主を毎日何時間か邪魔にならぬ所に片附けて置かうといふ魂膽とは初めから見え透えてゐた事さ。隨分變な遣方とは思つたが、成　程これ以上の名案は一寸浮ぶまいさ。此の考

は勿論工夫上手のクレイが仲間の頭髮が紅いところから思ひ付いたものに相違ない。一週四圓は質屋を釣る餌で、一寸好い値段だが、何萬圓といふもろい大金儲をしやうといふ先生等にとつちや何でもないことさ。そこで新聞廣告をする、一人が假事務所を開いて一人は質屋の主人を勸誘する、かうして二人が協力して毎朝主人を留守にさせるといふ手筈。あの番頭が半額で來たといふことを聞いた時から、これや口を得やうとする外に何か强い動機があるのだなといふことがちやんと分つてゐた。』

『それにしても、其の動機が何でめるか如何して分つたかね。』

『質屋の家に女でもゐたら、野郎助平根性があつたな位に思つたらうさ。併しそんな事のあらう筈がない。商賣といつても極めて手狹にやつてゐるのだし　家の中を見ても、それほど周到の用意をし、それほど多額な費用をかけてまでどうしやうといふ代物は一つだつてありはしない。さ、さうすると、覘つてゐるのは家の中でなくて外だ。何だらう？　僕は不圖番頭の寫眞道樂と土窟潛りの藝當を思ひ出した。土窟！　其處に縺れた糸の一端が見付かつたのだ。其處で僕は此の胡亂な番頭に關して尋問を試みると、どうしたもんだ、ロンドンでも最も大膽な冷靜な罪人として其の名を知られたジョン・クレイぢやないか。此奴は土窖の中である仕事――數ヶ月に亘るあの仕事をしてゐる

たのだ。何だらう？　どう考へても他の家へ通ずる窖道を穿つてゐたものとしか思へない。』

『そこ迄は現場を見に行つた時に分つた。あの時僕が鋪石を叩いたのを君は不思議に思つたらう。あれは窖道が前に延びてゐるか後ろに延びてゐるかを確めたのさ。前ではなかつた。それから呼鈴を押すと豫期した如く例の番頭が出て來た。此の男には以前一寸した事件が二三あつたが、顏を合したのは此の時が初めて。顏は碌々見もしなかつた。見度いと思つたのは膝だ。彼奴の膝を見て、君も擦り切れて、皺くちやになつて汚れて居ることに氣が付いたらう。これが穴掘りの證據さ。さて一體何の爲に穴を掘るのか、それが最後の疑問であつだのだが、角を曲つてみると地續きに例の中央銀行があるので疑問が解けたりと思つた。音樂會が濟んで君が歸つた後で、僕は警視廳と銀行の取締を訪問したのだが其の結果は御覽の通りの次第さ。』

『併し奴等が今夜仕事に取掛るといふことが如何して分つたね。』

『それはかうさ。紅髪社の解散は最早ウィルスン君が家に居つても關はないといふ證據、言換へればトンネルが完成したのさ。ところで發覺の危險、といふことはつまり金塊が他に移動する虞れがあるから、トンネルは一刻も早く使用しなければならぬ。で土曜ならば次の日曜を入れて逓走に二日の餘裕があるから至極好都合。といふ樣な處から今晩と覘をつけた譯さ。』

『なある程見事な推論だ。經路は加何にも長い連鎖だが、一環毎に金玉の響がある。』

と僕は心から感服して言つた。ホウムズは欠伸しながら、

『これで多少退屈凌ぎになつたが、あゝ、またそろそろ退屈になつて來た。僕の生涯は、平凡から脱し樣脱し樣とする一つの長い努力なのだ。こんな事件があるといくらか退屈が紛れる』

『君は人類の恩人だ。』

彼は肩をすくめてかう言つた。

『プロウベルがヂョージ・サンドに送つた手紙の文句ぢやないが、『人間畢竟何爲者ぞ、事業なる哉〳〵だよ。』

花婿の行方

『ねえ。君。』と、私達が例のベーカー街の彼の宿の暖爐の兩側に坐つてゐる時、シャロック・ホウムズは云つた。『人生と云ふ奴は、人間が考へ得る如何なるものよりも、遙かに無限に不可思議なものだね。實際僕等は、存在してゐる單なる平凡な事でも想像しようつたつて想像出來やしないよ。今假りに二人が手を取り合つて窓から抜け出してだね、この大都市の上をうろ〳〵飛び廻つて、靜かに屋根をめぐつて中を覗き込んで見たまへ。氣味の惡い事が行はれてゐるよ。不可思議な符合もあれば畫策もあるだらう。目的の齟齬や、驚くべき出來事の連鎖があるだらう。それは何代も前から繼つれ合つて、途方も無い珍妙な結果になつてゐるよ。それはみな、紋切り形な、結果を豫想した、陳腐な役にも立たない小說になるんだね。』

『だが小說になるとは信じられないね。』と私は答へた。『日常新聞紙上に報道される發覺した事柄を見たまへ　概して露骨　野卑を極めたものだよ。警察署の調書は實生活を出來る丈け壓縮したものだが、その結果はと云ふに、人の心を魅する樣な所もなければ、藝術的な所もないんだ。』

『それは君、寫實的の効果を產むには幾分の選擇と手加減は必要さ。』とホウムズは云つた。『これが警察の調書には缺けてゐるよ。微細な點に重きを置いてゐると云ふよりも、多分は取り調べた平凡な事に力を入れてゐるからね。この細微な點が觀察者にとつては全事件の肝腎な要素を含んでゐる

んだ。だがこの事丈は安心して信を置きたまへ。凡庸なもの程不自然な物はない事をね。』

私は微笑して頭を振つて『君がさう思つてゐるのは理解出來るよ。』と私は云つた。

『そりや、君の地位は私立探偵所を持つて、三大陸の隅から隅までの、困じ果てゝゐるものは誰れでも來い助けてやる、忠言を與へてやると云ふ立場にゐる人だからね。だから君の所へ持ち込む事件はみな不可思議な奇怪な事件計りさ。然しこゝに――』と私は朝刊新聞を取り上げて――『實際の例に徵して見樣ではないか、此處に僕の最初目に止まつた題『女房を虐待する夫』と云ふのがあるね。半段も書きたててあるが、讀まなくつても、お馴染みの記事さ。無論、隣の女房は美しいと云ふ奴で、他の女が出て來るね。酒を飲む、こづき廻る、果ては撲り合ひをして、打撲傷さ。そして紫色のあざは絕へず、同情ある姉か、女將さんかが出ると云ふ段取り、作家のどんな粗雜な筆もこれ以上粗雜にはなり得ない。』

『君。それは、君の例は不幸にして君の議論が當を得て居ないね。』ホウムズは新聞を取り上げてざつと目を通して云つた。『これはダンゲスの離婚事件で偶然僕はそれに關して、些細な點だが明らかにする爲めに手をつけたんだ。その夫と云ふのは絕對禁酒家で、情婦なんかゐない。そしてその不平な點と云ふのが、彼が何時の間にか、食事をする每に義齒を逃して妻君にひどく投げつける癖が

ついたと云ふんだ。どうだ、これなんかは下手な落語家の想像にも、浮んで來さうにもない事だらう。君まあ嗅ぎ煙草でもやり玉へ。これで君の引例で君の鼻をひしいだ譯だらう。』

彼はこう云つて古い黄金の嗅煙草入れの函を出した。見ると其の蓋の中央には紫水晶が嵌めてあつた。その華美なのが、彼の質朴な簡易な生活振りに餘り妙な對照をなしてゐるので私はそれについて尋ねざるを得なかつた。

『あゝ』と彼は云つた。『暫く會はなかつたので忘れてゐたよ。これは例のアイリニ・アドラの事件で僕が助力した禮にボヘミヤの王が贈つて呉れた一寸した紀念品だよ。』

『そしてその指輪は？』と私は彼の指に輝く素晴らしい金剛石の指輪を見て尋ねた。

『これは和蘭の王室からの贈物さ。だがこの事件丈は秘密だから、つまらない乍ら僕の探偵を親切に記錄して呉れる君にさへ打ち明けられないんだ。』

『そして何か着手してゐる事件があるかね、今？』と私は興味を持つて聞いた。

『十計り。然しこれと云つて、に面白い事件は一つもないよ。だが、それ等は、興味はなくつても重大なものなんだよ。實際探偵に魅する樣な興味を與へて呉れる原因及び結果の鋭い敏速な解剖を許す餘地があり　觀察の廣い局面がひらけるのは普通餘り重要でない事件だと云ふ事が分つたよ。

犯罪が大きければ大きい程事件は得て單純なものなんだ。と云ふのは大きければ大きい程概して動機と云ふものは明瞭なものだからね。僕が着手してゐる事件の中でも、マルセイユから僕に頼んで來た複雜な事件が一つあるきりで、あとは皆平凡な面白くもないもの許りさ。然し、事に依ると數分を出でずして何か面白い事件が舞ひ込むかも知れないよ。と云ふのは、それ、僕の思ひ違ひならば格別さもなくばありりや事件の依頼人だぜ。』

彼は椅子から立ち上つて、窓の側に立つて簾を分けて、どんよりとした灰色の色彩を帶びた倫敦の市街を見下してゐた。僕は彼の肩越しに眺めると、大きい女が向ふ側の敷石のしてある人道に立つてゐるのが見えた。彼女は首に毛の長い首巻きを巻いて、緣の廣い帽子には渦巻のある大きい鳥の赤い羽毛をつけて、横に曲げてデボンシャー公爵夫人の樣な風に冠つてゐる所などは、中々婀娜つぽい所があつた。この大きい帽子の下からをくした、躊躇した風でこちらの窓を見上げて、その間身體を前後にゆり、指で手袋のほたんをもじもじ弄んでゐた。急に彼女は水泳者が崖を離れて飛び込む樣に急いで道路を横切ると、鋭い呼鈴の鳴り響く音が聞へて來た。

『こうした兆候は以前にも見た事があるよ。』と紙巻煙草を火の中へ投げ込んでホウムズは云つた。『人口の前で躊躇するのは何の事かと思ふと大抵は戀愛事件だ。彼女は事件は頼み度いが、云ひこ

くいので話すのは止さうかとしてゐるんだよ。でも同じ戀にも兆候に多少異同があるよ。男が薄情で不義理でもすると、女はもう處置に迷はない。そして、其の場合の普通の兆候は表の呼鈴の紐を引き切る樣な權幕さ。この事件は、戀愛事件だと決めて無論差支へないが、この女は腹を立ててゐると云ふよりむしろ、處置に窮してゐるか或は悲歎に暮れてゐるんだぜ。然し本人が來れば何より確かさ。』

と彼が云ふ途端に、扉を輕くコツコツ叩く音がして金釦鈕の給仕が入つて來てマアヲイ・サザーランド嬢が御面會を――と取り次いだのであつた。その間にその婦人が小さい黑い服裝をした少年の後に立ち塞がつた樣子は、小さい水先案内の小蒸氣にひかれて帆をはりつめて來る商船の樣であつた。シャロック・ホウムズは人なみ優ぐれた彼獨特の例の心を置かせない御愛想で婦人を迎へて、扉を閉めて腰掛け椅子に彼女を招じ乍ら、婦人の樣子を緻密に見渡した。それは精密は精密だが。彼獨特のどぼけた樣ゝ風であつた。

『貴嬢の樣に近眼では、タイプライターを使ふのは少々骨が折れませうね？』と彼は云つた。

『始めは骨が折れましたが、今では一一見ないでも字が何處にあるか分りますの。』と彼女は答へたが、急に彼の言葉の意味を思いついて彼女はひどく驚き、恐怖と驚愕の色を、その巾の廣い愛嬢の

ある顏へ浮べて顏を上げた。『貴君は妾の事を委しく御聞きゝなつたんですの？』と彼女は叫んだ。

『でなければ、どうしてそんな事まで御存じなのです』

『何うしても好いではありませんか。』とホウムズは笑ひ乍ら云つた。『商賣柄だからそれが判るのです。大方私は他の人が見る事が出來ない事が見えるでせう。さもなかつたら、何もわざ〳〵貴嬢が私の所へ御相談に入らつしやる筈がないでせう。』

『妾が御願に上りましたのはエサレーヂ夫人から貴君のお噂を承つたからで御座いますの。この方の夫が行衛不明におなりになつて、警察でも、又他の人々も死んだものと見放してゐたのを、貴君が譯なく捜し出して下さつたのですつてね。ホウムズ樣。同樣に私にも力を貸して下さいな。妾お金持ちではないんですけど、一年に百磅の收入が御座いますし、その上タイプライティングでは入るので御座いますの。で妾は此のお金を皆出しても、ホスマア・アンゼルさんの行いんですわ。』

『故貴嬢はそんなに慌てゝ御出でになつたんです。』とホウムズは兩手の指の先を井へ向けて尋ねた。

と云はれて、驚きの顏色が、幾分かぼんやりしたマアヲイ・サザーランド嬢の

『エ、私飛び出して參つたんですわ。』と彼女は答へた。『だつてウィンディバンの父なんですが、餘り暢氣な事計り云つてゐるんですもの、私怒つてしまつたへ行つて下さいつて云つても仲々行つて呉れず、貴君の許へも御願ひに參りませもし くつて、あの人の身には心配な事はないと、私が幾度云つても斯ゝ許り云つの。私氣が氣じやありませんから、慌てゝ仕度をして御願に上つたんで御座います

『貴嬢のお父さんは、』とホウムズは云つた。『名前が違ふんですから無論本當のお父様じゃ繼父でせう?』

『エー、繼父ですの、お父さんと呼ぶのも可笑しい様ですわ、だつて五つと二ヶ月外違はないんですもの』

『お母さんは未だ生きて被居しやいますか?』

『えゝ、達者ですの、でも妾、ホウムズ様。母が再婚したのは父がなくなつてから餘り間が無さ過ぎましたので面白くありませんでしたの、そして十五も母より若いんですもの。父はトテンハムコート・ロードで鉛細工をしてゐましたが、死ぬる時は手廣い商賣を殘して亡くなりました。父が死んでから母は職工長を相手に商賣を續けてゐたんですけど、繼父が來てから、母に說いて店を賣らし

てしまつたんですの。だつて今度の父は大層氣位が高くつて、そんな商賣を嫌がるんですもの。そして葡萄酒商の出張員ですもの。店は四千七百ポンドで賣れたんですけれ共、父が生きてゐたらまだ〳〵好い値になつたんです。』

私は短氣なホウムズは此の順序の立たぬ、つまらない物語りを聞いてもどかしく齒痒がるかと思ひの外、却つて注意を集中して熱心に謹聽してゐるのであつた。

『貴嬢の收入と云ふのは。』と彼は尋ねた。

『店の方から出るのですか?』

『いゝえ、全く別ですの』そして『オークランドのネッド叔父さんの遺産なので御座います、それは年に四分五厘の利子でニュージイランド銀行へあづけて御座いますの。二千五百ポンド御座いますけど、私の使へるのは利子丈で御座います。』

『大層面白い御話しです。』とホウムズは云つた。『貴嬢は一年に千ポンドの收入があつて、その上働いて金をお取りだから、無論旅行位はなさるでせう。何んでも好きな道樂が出來ませうね。獨身の御婦人が暮して行かれるには一ヶ年に六百圓の收入があれば結構ぢやありませんか?』

『そんなになくともくらして行けますの、ホウムズさん。でも家にゐる間は親達の厄介になり度く

ありませんから。私が一緒にゐる間はその金をうちの人達に使はせておくのです、勿論それも一時の事なんで御座いますが、繼父のウィンディバンクは四期の勘定日毎に利息を取りに參るんで御座いますよ。そして母に渡すんですの。わたくしはタイプライテングから得た金で結構やつて行れるんで御座います。それは一枚書くと八錢になりますし、日に少なく共十五枚、多ければ二十枚も出來るので御座いますから。』

『貴嬢の身の上は好く分りました。』とホウムズは云つた『これは私の友人のウォッスン博士ですから、私の前と同樣に御遠慮なく御話し下さい。何卒貴嬢とホズマア・アンゼルさんとの間柄をすつかりお話し下さい。』

サザランド嬢の顏の色がポッと紅くなつて來て、はづかし氣に上衣の緣の房をいじるのであつた。妾が最初彼に會つたのは、瓦斯職人の舞踏會で御座いました。』と彼女は云ふのであつた。『父の存命中は父に切符をよく送つて呉れたものです。が父が亡くなつてからも私達を好く覺えてゐて呉れまして母の所へ送つて呉れましたの。繼父のウィンヂバンクは私共を遣りたがりませんので御座いました。妾共が何處かへ行くと云ふと直ぐ反對するんですわ。妾が日曜學校の會へでも强つて參る樣に申しませうものなら氣でも違つた樣に怒るので御座います。然し私は此の度は行く積りなんで

すの、何うしても參りますわ、だつて繼父は私か行くのを止める權利はないんでせう？　そして繼父が申しますには、其の會へ來る方々は皆實父の御友達ですのに、お前達が交際するには足らぬ者許りだ杯と申すんで御座いますの。又、妾には着て行く着物があるまいつて申すんですのよ。私は未だ手も通さない樣な、紫の絹綿天鵝絨の着物を持つてゐるんで御座いますのに。遙々他にする事がなくなると、彼は商館の用事で佛蘭西へ行つて了つたのです。然し妾達は――母と妾と、元の職工長を連れて、その舞踏會へ參りました。そして、ホズマア・アンゼルさんに　お會ひしたのは其の舞踏會でゞ御座います。』

『では…』とホウムズは云つた。『ウィンヂバンクさんが佛蘭西からお歸りになつて、舞踏會へ行つたのが惡いと云つて御立腹なさつたでせうね。』

『まあ、父は案外に機嫌がよろしう御座いましたのよ、繼父は笑つて、私よく覺へてゐますわ、肩をすくめてね。女のしたがる事はいけないと云つても駄目だ。女は我儘で困るつて斯ふ申しました。』

『成程ね。それでは瓦斯職人の舞踏會でホズマア・アンゼルさんとやらに御會になつたのですね。』

『えゝ、左樣ですの、其の夜妾は彼に會つたんです。そして翌日は、昨夜は無事に歸つたかつて尋

ねて來て下さいました。その後で私達は逢ひましたのよ。と云つても私丈で御座いますけれど、二度一緒に散歩したんで御座いますわ。けれ共父が佛蘭西から歸りましたのちは、もうホズマア・アンヅルさんは御見えになりません。』

「其後見えないんですか？」

『えゝ、でも父はそんな事が嫌いで、なくて濟むなら、來客がない方が好きなんですもの　そして豫ねて女と云ふものは一家の團樂で安んずべき者だと申してゐるんで御座ますわ。でも、母にはかねゝ〳〵云つて居る事ですが、先づ第一に、女が欲しいものは自分の家が欲しいんでせう。そして、妾未だ自分の家がないんですの。』

『然しホズマア・アンヅルさんのことはどうです。其後彼は貴嬢に會はうとはしませんでしたか？』

『父は一週間經てば佛蘭西へ再び行く筈で御座いましたので、父が行くまではお互に會はない方が好からうと手紙で云つてよこして參つたので御座います。それまでは手紙にしようと云つて、毎日手紙を寄越したもので御座います。手紙は朝早くうけとる樣にして御座いましたので、父は少しも知る氣遣は御座いませんでした。』

『その時は婚約が濟んでゐたんですか？』

『えゝ、左樣ですの、ホウムズさん。私達一緒に初めて散歩した時約束致しました。

あのホズマア……アンヅルさんは……レヴンホール街の、或る商館の現金係りなのです……

……そして……』

『何の商館の？』

『其處が一番困つた事なので、貴君、私は知らないんで御座います。』

『では住所は？』

「商館に宿つて居りました。』

「番地を御存じで御座いますか？』

『いゝえ、レヴンホール街とより番地は分らないんで御座いますよ。』

『では貴嬢の御手紙を何處へ宛てゝ御出しになりましたか？』

『レヴンホール街の郵便局へ、留め置きで出しましたの。でも彼が申しますには、事務所へ手紙が來ると他の書記共に女から手紙が來たと云つてからかわれるんですつて。で私タイプライターで手紙を書かうと云つたんですの、先でもさうするんで御座いますから、處が彼は嫌だと云つて、手書けば如何にもお前から來た樣な氣がするが、タイプライターだと器械が二人の間に挾つて邪魔す

る様に感じるんだつて、こゝ申すんで御座いますの。彼が思ひついた些細な事なんですけど、ねホウムズさん、これを見ても彼がどんなに私を愛してゐるか御分りで御座いませう。』

『それは大層參考になる事實です。』とホウムズは云つた。『些細な事が最も重要なと云ふ事は昔しからの僕の定論です。外に、些細な事でもホズマア・アンヅルさんについて御記憶の事は在りませんか？』

『彼は大層羞かみやで御座いますの。散歩するにも晝より晩に致すんです。だつて彼は目に立つのが嫌だと云つてゐるんです。大層内氣で紳士らしい御方ですわ。聲までも優しんですよ。若い時に扁桃腺と肥厚腺とを患ひ其の後咽喉が弱くなつたと申してゐるんです。成程思ひ切つた聲が出ない様で小聲で計り物を言つてゐるんですの。そして仕度は何時も好くつて、小ぎれいに、サッパリした着物を着てゐるんで御座いますが、目は丁度私の様に惡くつて、強い光線をふせぐ爲めに常に色目鏡を掛けてゐるので御座います。』

「貴孃のお父様のウィンヂバンクさんが佛蘭西へ御出でになつてからどうなりましたか？』

「ホズマア・アンヅルさんが父家へ御出になりました。そして父の歸らない内に結婚しようではないかと云ひ出したんで御座います。彼は惡ろしく眞劍で、妾に聖書に手を載せて誓へと云ふんです

の。それはどんな事があつても操を立て通すと云ふ誓で御座います、母もそれが宜敷いと申すんですの。それ　彼が妾に情がある證據だつて、母は初めからこの緣談に贊成で、私よりも母の方がその人に惚れこんでゐる位なんで御座いました。それで一週間以内に結婚だと云ふ樣な譯になりましたので、妾は父の事はどうしやうかとたづねますと、二人は父の事など氣　しなくても後で云へば宜いと云ひ、そして母は父の方はよい樣に取りなすと申すんです。

ホウムズさん、妾少々それに不同意なんで御座いました。何しろ父は私より年が五つより違はないんですもの、許可をゑふのは可笑しく思はれるので御座いましたけれども、何をするにも妾はぐずゞ羞かんでする事が嫌ひな質なんですから、ホルドォにゐる父に宛てゝ手紙を書いたんですの。其處は商館の支店のある所なんです。けれ共手紙は然も今日結婚と云ふ朝返つて參りました。』

『えゝそうなのですの。手紙がつく前に父は英國へ向けて立つたんです。』

『はゝあ！それはいけませんでしたね。で貴孃の結婚は金曜日に決めてあつたんですな。教會でなさる筈でしたか？』

『えゝ、人知れずこつそり行ふ筈でしたの。それはキング・クロスに近い聖セイビヤで御座いまし

た。そしてそれが終つてから聖パンクラス旅館で餐をする筈になつて居たんで御座います。ホズマアさんは二輪車の辻馬車で私達を迎へに來て下さいました。けれ共、私達は二人なんですから、その馬車にのせて、自分は四輪車へ乘り込みました。それはたま〳〵通りにはその馬車きりしか居りませんで御座いましたから。私達が先へ教會へ着きました。そして四輪馬車が走つて近寄つて來た時、妾達は彼が下車するかと思つて待つたんで御座いますけれど出て來ないので御座います。そして馭者が馭者臺から下りて來て中を覗いて見ますと誰もゐないでは御座いませんか。そして馭者はお客はどうなすつたのか見當がつかないと申すんで御座います。だつて馭者は現在彼が乘るのを見たんで御座います。それは前の金曜日で御座いました。その後、その人の手掛りになる樣な事は何んにも目にも耳にもふれないので御座います。』

『隨分酷い仕打をしたものですね。』

『いゝえ、決してあんな立派な人が好んで私を棄てゝ行く筈はありません。何故かつてあの方は始終、どんな事があらうとも、俺に操を立てゝ呉れ。どんな不慮な災難が起つて二人が別れても、約束した事を忘れるな、早晩約束の履行を求めに來るつて、斯ふ言つたので御座いましたもの。今日結婚するのに妙な話をするのだと思ひましたが、後から考へて見ますと無意味な事では御座いませ

んでした。』

『勿論そうですとも、それでは貴孃のお意見では、何か不慮の災難に遭遇されたと仰有るんですね。』

『左樣ですの、何か身に降りかゝる危險を蟲が知らしたのですわ。それでなくてはあんな事を話すのは變ですもの。それから豫知した事が起つたのだと思ひますわ。』

『だが貴孃にはそれが何だか分らないのですね。』

『えゝ、些つとも。』

『今一つ御尋ねしますが、此の事が起つた時お母樣はどう思はれた樣でしたか?』

『母は大層立腹して、此の事はもう話しもするなと申すんで御座います。』

『そして貴孃のお父さんは? 御話しになりましたか?』

『えゝ、父は私と同じ樣に、その人の身に何か災難があつたに相違ないから、再び何か消息があると、こう思つてゐる樣で御座います。父が云ふやうに、教會の入口まで私を引つ張つて行つて、逃げ出して大體何の利益になりませう。利益になる筈がないではございませんか。ねえ。彼が若し私の金をかりて居るとか、結婚を濟まして私の金を手に入れてから逃げたとか云へば成る程と思はれ

も致しませう。しかしホズマアさんは至つて金錢には無頓着な方で御座いましたし、私の金には一錢だつて目もくれませんので御座いました。それにしても、何事があつたので御座いますか知ら？手紙位は寄越しさうなものですのに、思ひ出すと妾、氣でも狂ひさうなんですの。そして心配で夜は一睡も出來ないんで御座います。』と云つて彼女は手巾を取り出して、それに顏をうづめてひどく啜り泣き初めた。

『取り調べて上げませう。』とホウムズは立ち上り乍ら云つた、『屹度確かな結果を得る事が出來るでせう。事件は私に安心してお任せ下さい。そしてもうそれについては御心配なさいますな。先づ何より第一にホズマア・アンゼルさんの事を御忘れになるのが一番ですな。彼が貴嬢から消へ去つた樣に。』

『ではもう二度と會へないと仰言るんで御座いますか。』

『事に依つたら會はれますまいね。』

『では彼の身にどんな事があつたので御座いませう？』

『その問題は私にお任せ下さい。そして、委しい彼の人相書きが欲しいものですな、それと御不用な彼の手紙と。』

『私は前の土曜日の新聞に捜索の廣告を出しました。』と彼女は云つた。『こゝに、その新聞の切り抜きと、彼から來た手紙が四通御座います。』

『やッ有難ふ。して貴嬢の番地は？』

『カンバアウエル・ライアンクレイス三十一番地で御座います。』

『アンゼルさんの住所は分らなかつたんでしたね。お父樣　お勤め先は？』

父は出張員で勤めてゐるのは、フェンチャアチ街の佛國赤酒輸入商のウエストハウス・エンド・マアバンク商會で御座います。』

『有難ふ。貴嬢の御話はハッキリ分りました。何卒此書類は此處へ置いて下さい。そして私の忠告は御忘れならぬ樣。こんな出來事は過ぎ去つた事として、そんな事に貴嬢の生涯を左右されない樣にね。』

『有難ふ御座います。ホウムズさん。でも私にはそれが出來ないので御座います。私どこまでもホズマアさんに情を立て通します。妾は彼が歸つて來るまで待ちませう。

お可笑しい途方もない樣な帽子を冠つて、どこかぼんやりした顏をしてゐたけれ共、訪問者の單純に人に信を置く所に尊敬の念を起さざるを得ない樣な何處か心の美しさが偲ばれるのであつた。

彼女は小さい書類の束を卓の上に置いて、『御呼びになれば何時でも參ります。』と再來を約して歸つて行つた。

シャロック・ホウムズは暫く指の先を合せて默然と坐つてゐた。そして足を前へ投げ出してまつすぐに、ぢつと天井を見つめてゐるのであつた。やがて彼は棚から、古い油ぎつた粘土の煙管を取り出した。それは彼には顧問官の樣であつた。彼はそれに火を點けて、濃い青い渦卷く煙を吹いて非常に懶い樣な色を顏に浮べ乍ら椅子に凭れてゐるのであつた。

『面白い研究材料だね。あの娘さんは、』とホウムズは云つた。『事件よりも人物の方が遙かに面白かつたよ。序ながら少し古臭い事件だが、僕の事件錄を見たまへ。一八七七年のアンドウバアに於ける事件を見給へ。符節を合する樣なのがあつたよ。去年ヘイグにも同種類の事件があつた。趣向は古い事は古いが、然し、珍らしい點が二つ三つある。だが當の娘の方が一番有益だつた。』

『君はあの女を見て、僕には見へない點を澤山見てゐる樣だね。』と私は云つた。

『見へないんじやないんだよ。氣がつかないんだ。ウオツスン君、君は見處が惡いからさ。大事な點を見落したのだ。君には袖口の大事な事や、指の爪の參考になる事、そして、靴の紐にも大事な論點がある事などは分るまい。さあ、あの女の樣子をどう思つて見たか委しく云つて見たまへ。』

『あゝ、彼女は石盤色の緣の廣い麥藁帽子に練瓦の樣な色の鳥の羽をつけたのを冠つてゐたね。短衣は黑で、それに黑い球が縫ひつけてあつて、その緣の飾には小さい黑水晶の飾りがつけてあつた。着物は茶褐で、咖啡の色より少々濃く、首と袖には紫のブラシテンがつけてあつた。手袋は灰色掛つて、右の人差指に穴があいてゐた。靴は氣を付けて見なかつたね。小さい金の耳輪をつけてゐたつけ。大体の風彩は裕な樣子だつたね。下卑てはゐるが別に不自由もなく呑氣に暮してゐる。』

ホウムズはかろく手を合してほくほくよろこんだ。

『本當に、ウオツスン君、君の進歩は驚くべきだね。實に出來したりた。なる程大事な事はすつかりぬいたけれ共、方法丈は當つてゐるし、又色を見分ける事が早いよ。大体の印象と云ふ奴は決してあてにならないぞ。何でも細かい所に目を留めて見るんだ。僕が先づ第一に目をつけるのは女なら袖だね。男ならズボンの膝を見る方が好い。君の云ふ通り、袖にブラシテンをつけてゐたが、このブラシテンといふ奴は一番痕の附き易いものだ。筋が二重に手首の上の處についてゐるのは、タイプライターを使ふ時卓に押し當てる所で明瞭に見えてゐたよ。手ミシンを使ふ人にも同じ樣なあとがつくが、然し只左の腕だけだ。そしてタイプライターの方は廣く横につくんだが、ミシンの方は外側につくんだ。それから僕は顏を見ると鼻の兩側に凹んだ鼻眼鏡の痕があるんだ。で、

とかタイプライターとかと云ふと聞いてひどく驚いた樣だつたね。』

『僕も驚いたよ。』

『然しそれは分り切つてゐる事さ。そして一目見て驚きもし面白くもあつたのは、左右の靴が似てゐる事は似てゐたが其の實左跛足だつた事さ。片方は爪先に少し飾が有つたが、一方には飾がない。片方は鈕が五つある内、下の二つ丈掛けてあつて、片方は一つ目と三つ目と五つ目とが掛つてゐたよ。ねえ、君、若い婦人が仕度はさつぱりしてゐ乍ら、片跛足な靴を穿いて、鈕を半分掛けて居りや、慌てゝ家を出て來た位大概分るさね。』

『外には？』と私はそれはいつもの事だが友の鋭い究理法に深い興味を感じて尋ねた。

『序に氣のついたのは彼女が家を出る前に手紙を書いた事だ。然し出掛ける仕度が出來てからさ。君は右の手袋の人差指か破れてゐるのに氣がついたが、兩方の手袋とも指極紫のインキが附いてゐたのに氣がつくまい。彼女は大急きで手紙を書いて、ペンをインキに餘り深く浸したんだ。それは今朝の事に違ひ無いよ。さもなければインキの痕が明瞭に指に殘つてゐる筈がない。こんな事を云つてゐれば面白い事は面白いが初歩さ。然し本件に取り掛からにやなるまいね。君、ホズマア・アンゼルの廣告の人相書きを讀んで聞かして呉れたまへ。』

私は新聞の小さい切り抜きを取り上げて光線の方に向けて讀むと、それには次の樣に書いてあつた。

『尋ね人。』

十四日朝ホズマア・アンゼルと云ふ一人の紳士行衛不明。丈五尺五寸位。頑丈なる体格にて、顏色惡しき方、髮黑く、頭の頂邊禿げたる方。濃くして黑色の頰鬚と口鬚あり。色眼鏡を掛け。言語弱々し。

見失いたる時の仕度は、絹裏折返しの黑のフロックコウトと、黑のチョッキを着し、アルバットの金鎖を下ぐ。灰色のスコッチのズボンを穿き、褐色のゲイトルをつけ深護謨靴をはく。レンホール街の某商館に勤む。何人にても心當りの方は……』

『それでよろしい。』とホウムズは云つた。『手紙は』と云ふと彼はさつと目を通し乍ら續けて云つた。

『平凡だな。一所、バルザックの事が引證してある位で、外にはアンゼル君の手掛りになるものは一つもない。然し、一つ變つた點があるが　無論君も變だなと氣がついてゐるだらう。』

『タイプライターを使つた事か？』と私は云つた。

『それ計りではないさ。記名までがタイプライターだよ。ね見たまへ。下の方に綺麗に小さく

"Hosmer Angel"とね。それ、日附がしてあるが、レヴンホール街より外上書きがない。こりや漠然としてゐるね。だが記名についてのこの點が非常に參考になるよ。――事實、證據十分と云つて好い位さ。』

『何の證據？』

『この點がこの事件に大關係のある事が君には分らないかね？』

『婚約破棄の訴訟でも起された時、記名を非認して己が書いたのでないと云ふ積りなら格別、さもなければ分らないね。』

『そりや見當違ひだ。然し僕がこれから手紙を二通出して置けば事件は落着する筈だ。一通は本街の某商館宛で、今一通は例の若い婦人の繼父のウィンヂバングだよ。明晩六時に此處へ來て呉れつてね。この手紙をやれば男の事はそれで分るだらう。扨て、この手紙の返事が來るまでは何も出來ないから、この問題は暫時お休みだ。』

かねてから、私は友の微妙な推理の力と、驚くべき彼の活動の精力を信じ切つてゐるものだから、彼の前に解決すべく提出された、奇異な不思議な事件を取り扱ふ、彼の確信ある易々とした態度を見ると、何か動かす事の出來ない根底を持つてゐるに違ひないと、僕は感じるのであつた。只一度

私は彼がボヘミヤの王から依頼されたアリイニ・ナドラの事件で失敗したのを知つてゐるけれ共、あの面妖な『四つの符號』事件や、『スカアレット』事件の紛糾した秘密を譯なく解決した事などを振り返つて見る時、私は、如何に怪しく縺れ合つた事件と云へども、彼の手にかゝつては解かれないことはないことを感じるのであつた。

それから私が彼と別れて歸る時には、彼は未だ例の黒い粘土製の煙管で、すぱり〳〵煙草の煙を吹いてゐるのであつた。そしてその態度の中には、『私が次の日の夕方再びやつて來た時にはメイリ・サザランド嬢の紛失した花婿の正体が分るところの、凡ての端緒を握つてゐるんだよ。』と云ふ樣な確信を見せてゐるのであつた。

其の時、私は本業の醫者として、重大な病人があつたので翌日は終日忙しく患者の枕元で暮してしまつた。六時に間もない頃、私は漸く手が空いたので、馬車に飛びのつてベイカー街へ乘りつける事が出來た時は、私はその小さい秘密の解決を見るのに一足おそくなりはしないかと少し心配したのであつた。然し、行つて見るとホウムズは只一人、長い休を肱掛椅子に丸くして眠り掛けてゐた。卓の上には、澤山の壜や試驗管が並べられて、烈しい鹽酸の臭が鼻を衝くのを見ると、彼の好きな化學の實驗に日を過してゐるのだなと云ふ事が分つた。

『どう？　とけたかね？』と私は室に入り乍ら尋ねた。

『あゝ、重土の酸性亞硫酸鹽だ。』

『いや、さうぢやあないよ。今度の事件がさ。』と私は叫んだ。

『あゝ、あれか。僕は今實驗してゐる鹽劑かと思つたよ。昨日云つた樣に、成程面白い點はないでもないが、少しも不思議な事はなかつたよ。只一つ困つた事はこの犯罪に該當する法律があるまい。

「誰だい犯人は？　一体サザーランド嬢を見棄てた目的は何んだね。」

私が此の問を發するや否や、そして未だホウムズが返答の口を開かない内に私達は廊下を踏む重い足音と、コツコツと扉を輕るく叩く音を聞いた。

『例の娘の繼父のジェイムス・ウインヂバンクだぜ。とホウムズは云つた。『六時に來ると云つて手紙を寄越したんだ……。御這入りなさい。』

這入つて來た男は、逞ましい中丈の男であつた。年の頃は三十前後と覺しく顏を綺麗に剃つて、肌の色は惡るく、慇懃な人を上手に取り入れさうな物腰をして、二つの目が人の心を見拔く樣に鋭く光つてゐるのであつた。彼は私達の心を探る樣に私達を見るのであつた。そしてぴか〳〵光る

禮帽を食器棚の上へ置いて、ちよと輕く禮をして手近かな椅子に腰を下した。

『今晩は、ジェイムス・ウインヂバンクさん。』とホウムズは云つた。『この、六時にお會ひ下さる約束の手紙は、貴君が下さつたんでせうね。』

『左樣です。少し遲くなりまして濟みません。動めの身は自由になりませんので。些細な事で娘が御厄介になつて申し譯がありません、と云ふのも内の恥を外へ曝すのは思はしくありませんものですから。娘は、參るなと云ふのに參つた次第です。御覽の通り跳ね出す質で、感情的で困ります。そして一度こうときめると仲々云ふ事を聽かないのです。無論私は、其の筋とは關係がないので、貴君が御聞きになる分には厭ひませんが、然しこの樣な一家中の不吉を世間で評判されるのは氣持の好いものではありませんよ。又その上に盗人に追錢です。萬一にも此のホズマア・アンヅルが知れませうか。迚ても知れますまい。』

『處が……』とホウムズは靜かに云つた。『僕にはホズマア・アンヅルが首尾好く知れるだらうと思へる點があるのです。』

ウインヂバンクはひどくビツクリして手袋を取り落した。『さう仰有れば結構です。』と彼は云つた。

「それは妙ですよ』とホウムズは云つた。『タイプライターと云ふ奴は筆蹟にも劣らず癖がありゝすからね。全く新しければ格別、そうでなければ十臺十色で皆少しづゝ違ふ所がありますからね。二十八文字の内でも早く減る字もありますし、片側丈減る字もありますからね。御覽なさい。此の手紙を見ても、どれを見ても、「E」は少しはつきりしないし「R」の肩は少し缺けてゐるでせう。癖が外に十四あるんですが、今云つたのが一番分り易い癖なんです。』

『店では文通は凡べてこの機械計り使ひますから、無論少しは減つて居ませう。』と訪問者は例の小さい鋭い目で、ぢろつとホウムズの顏を見て答へた。

『それから面白い研究が御目に掛けませう。ウインヂバンクさん。』とホウムズは續けた。『實は、「犯罪とタイプライターとの關係」と云ふ題で、他日再び小論文を書かうかと思つてゐるのです。此の問題を僕は注意を拂つて專問に研究してゐます。此處に失踪者から來たと云ふ手紙が四通ありますが皆タイプライターを使つてゐます。どれを見ても「E」がはつきりせず「R」が缺けてゐる計りでなく、若しよく氣をつけて擴大鏡で御覽になれば、僕が擧げた他の十四の癖も皆ありますよ。』

ウインヂバンクは椅子から飛びはなれて帽子を取り上げた。『そんな馬鹿な話しを聞いてゐるのは暇つぶしだ。』と彼は云つた。

『その男が見つかるなら見つけて御覽。そうして見付かつたら御一報願いますよ。』

『よろしい』と彼は云ひ乍ら扉の方へ行つて錠を下した。『では知らせるが、犯人が知れました。』

『何と、何處に？』ウインヂバンクは罠に掛つた鼠の樣にキョロ〳〵四邊を見廻して叫んだ。

『駄目ですよ。逃げ樣たつて駄目です』と、ホウムズはなだめる樣に云ふのであつた。

『逃げ樣としてもそりやあ出來ませんよ。ウインヂバンク君。それは餘り見えすいた手ですからね、僕がこんな單純な問題が解決出來ないと仰有るのは、少しひどい御挨拶ですね。うむ、それが好い、御掛けなさい。ゆつくり御相談しませう。』

男は、人間らしい色めのない顏をして、額には玉の樣な汗を流して、又何時の間にか椅子へ腰を下した。『ソッ……ソッ……訴訟にはなりますまいね。』と吃つて云つた。

『成りさうにないから困るんだ。然し此處丈の話だが、ウインヂバンク君。斯んな殘酷な、利己主義な無情極まる惡戯を發いて遣つた事は未だ曾つてないんですよ。扨て、事の顚末をザッとおさらいして見よう。若し間違があつたら、さうでないと云つて咎めて呉れたまへ。』

男は首を垂れて、我を折り切つたと云ふ風に、倒れる樣にその椅子に腰を掛けてゐた。ホウムズは兩足を暖爐の隅に突張つて、手をポケットに突つこんで椅子に凭れ乍ら、私達に話すと云ふより

むしろ獨言の様に話し出した。

『その男は、女に惚れたのではなく金に惚れて自分よりずつと年上の女と結婚したんです。』と彼は續けた。『そうして又彼等と一緒にゐる間は娘の金も使へるんです。それは彼等自分には中々の大金で、娘の金が使へなくなると大分手許が狂つて來るのです。それでそれを取り逃がさない算段に一つ褌を締めてかゝる慣値があつた ですな。娘と云ふのは極く人の好い優しい質ですが、人に懐き易く、情にも厚いし、その上彼女は相應に器量も好く、小金もあるところから世間で長くは貝置かぬと云ふ事は一目瞭然です。扨て、彼女が結婚するとなると、無論、一年に千圓の損失にあたるので、繼父が娘の結婚を邪魔しやうとの段取りです。そこで彼は明らかに娘を外出させない方針を取りますね。そして同じ年頃の者と交際させぬ様にするのです。がその方法も一時は好いが長くは續かぬことを彼は見た譯でした。して又娘は云ふ事を聽かなくなつて、自分の權利は主張する、終には或る舞踏會へ行く積りだと云つてきかないんですね。ではこの器用な繼父はどうするでせう？

遂に一趣向を案じたんです。その趣向たるや旨いは旨いが殘酷な趣向でしてね。妻の默許と助力とを得て變裝し、その鋭い目をかくすには色目鏡を掛け、顏を變へる爲めにつけ鬚をして、朗らかな聲を低くして猫撫で聲と云ふいでたち。娘は近視眼ですから二重垣をした樣に安心なものです。そ

してホズマア・アンヅルと云ふ色男に化けて他の男を寄せつけぬ色仕掛です。』

『最初はほんの冗談でした。』と男は呻吟する樣に云つた。『私達は娘があんなに本氣にならうとは思はなかつたんです。』

『さうでせうよ。兎に角、娘はすつかり眞劍となつたんです。繼父は佛蘭西へ行つてゐるものとすつかり思ひこんで、欺まされるなどと云ふ疑念は片時だつて胸に浮びませんからね。彼女は紳士が慇懃なのですつかり喜んでしまい、それに母親もその紳士と一緒になる事が大層御氣に入りなのでその効果が益々揚つて來たのですな。そこでそのアンヅル君が訪問する樣になつて、……と云ふのは若し實際の効果が生じるものだつたら、その事件は進む丈押し進めなければならぬと云ふ事は明らかな事ですからな。……それから密會が行はれ、婚約となつたんです。それは安全に娘の情が他へうつらぬ樣にするんです。然しこの僞りを何時までも際限なく續ける譯には行きませんし、佛蘭西へ旅行する眞似もうるさくなつたから、今度僞なくてはならないことは、暫くの間は他の求婚者には娘が耳を傾けぬ樣にする事と、その男が忘れられぬやうに若い婦人の心に永久的な印象を殘さうと云ふ、芝居掛りのやり方とでその結末をつけ樣と云ふんです。それだから、聖書の上にまで手を置いて操を立てると云ふあんな誓まで立てさせたのだ。そして然かも今日結婚と云ふ朝に何

か不慮の災難でも起る事を蟲が知らせる樣な事を云ふといふ違りかた。ジエムス・ウインヂバンクの考へでは、サザランド孃をホズマア・アンヅルに義理でしばつて、彼の行方については何處までも不明にさせ、マア兎も角も向ふ十年間は他の男を見向きも出來ぬ樣にする積りだつたんだね。教會の入口まで彼女を連れて行つて、自分は馬車の右から入つて左へ拔けて跡白浪と極め込むのは餘り古臭い手でせうね。事の顚末はこんな譯でせう。ねえ、ウインヂバンクさん。』

私達の訪問者はホウムズが話してゐるのを聞いてゐる內に、多少度胸を据へ直して、青い顏に冷笑の色を浮べて椅子から立ち上つた。

『さうであらうと、なからうと、ホウムズ君、君がそんなに目が利くなら、法律を犯してゐるのは僕でなくて君の方だと云ふ位分りさうなもんだ。僕は最初から何も訴訟になる樣な事はしないぞ。君が僕を錠を下して出さないならば、不法監禁の訴訟沙汰を招くよ。』

『仰せの通り君には法律の制裁はないがね。』とホウムズは錠をはづして扉を開き乍ら云つた。『だが君程罪してやり度い人間はないんだ。若しあの婦人に兄弟か友人かがあつたなら、君を撲りつけてゐるのだぜ。いまいましい。』男の顏に浮んでゐる冷笑の色を見て眞赤になつて彼は言葉を續けた。

『それは依賴人に對する義務の中にはならないが、手近に鞭があるから、一寸餘興に……』

と彼は足早に鞭を取りに二歩計り進んだが、それを握る暇もなく、階段を下つて行く荒々しい足音がして玄關の重い扉が開くと、私達は窓から、ヂエームス・ウインヂバンクが一目散に表を驅けて行くのを見た。

『冷血の大惡漢めが！』とホウムズは再びどつかりと椅子に腰を下して、笑ひながら云つた。『彼奴は犯罪に犯罪を重ねて、何か大惡事をやり、疊の上では死ねない奴だ。この事件は、或點から云へば全然趣味のなかつた譯でもなかつたね。』

『僕は未だ君の推理の順序の分らない所があるよ。』と私は尋ねた。

『あゝ、無論、このジエイムス・アンヅルと云ふ男が、結婚の朝逃げ出すと云ふ樣な異樣な事を企てるには何か强い目的がなくてはならないと云ふ事は最初から分り切つた事だ。同じく明瞭な事は、この出來事で利益する男は、僕等が見る所では繼父一人きりじやあないか、それにこれも又參考になる事實ではないか？　二人は一緒にならないで、甲のゐる時に限つて乙が出て來ると云ふ事もね。同じく又參考になる事は、色眼鏡は掛けてゐるし、聲は異樣だからね。濃い頰鬚と共に、はゝア變裝かなと氣がつくよ。いよ〳〵僕の疑念をたしかにしたのは、タイプライターで記名をしたと云ふ妙な行爲のことさ。これは勿論、彼の筆蹟を彼女が見なれてゐるので、筆蹟の些細な點でも彼女が

見別けてしまうと云ふ事を推理せしむるじやあないか。ね、これ等の離れ離れの事實は、多くの小さい事實と共に、同じ方向を指すものだね。』

『そして君はそれをどうして確めたかね？』

『一度一人の人間に目星をつけてしまへば、確かな證據を上げるのは容易な事さ。僕はその男の勤めてゐる商館を知つてゐたよ。僕は新聞の人相書を取つて、それから變裝の結果に違ひないと思はれる樣な所、――即ち鬚とか、眼鏡、聲などを除いて、それをその商館へ書き送つてね、その人相書がその出張員の中の誰かに相當するか否か一報を乞うたのさ。又僕には既にタイプライターの癖が分つてゐたから、彼の勤先の番地で彼に手紙を書いたのさ。その男に此處へ來て呉れないかつてね。僕が豫期した通り、その返事はタイプライターだ。見れば同じ、些細だが特徴となる缺點があるんだ。同じ郵便でフエンチヤード街のウエストハウス・エンド・マアバンク商會から、その人相書は備員の、ジエイムス・ウインヂバンクと、丁度符合すると云つて手紙が來たよ。それだけの事さ』

『そして、サザランド嬢の事はどうするかね。』

『たとへ僕が事實を聞かしても信じまい。波斯の古語にあつたね。『虎兒を捕ふる者には危險あり。

女性より幻影を奪ふも亦危險なり。』と。詩聖、ハアフィズの云つた事にもホレス同樣に深い意味があり、また世の中に就ての知識があるよ。

傑作中の傑作

ボスコム谷の慘劇

或る朝、妻と私と二人で御飯の最中女中が一通の電報を持つて入つて來た。それは、シャロック・ホウムズから來たので、次の樣な電文であつた。

『二ツカカン、ヒマナイカ、イマ、イギリスノセイブカラ、ボスコムダニノ、ヒゲキニカンシ、タンサクノデンウケタ、キミクレバコウッゴウ、クウキケシキトモニヨシ、一一ジ一五フン、バデントンエキヨリタツ。』

『何うなさいますの？　貴君？』と妻は横から私の顏を覗き込んで云つた。『いらつしやいますの？』

『さあ、どうしようかなあ。今は患者が可なり多いいんだが』

『仕事の方はアンストラヴァさんが代診して呉れますよ。何だか此のごろ貴方の御顏の色が少し惡う御座いますよ。變つた所へいらつしやれば、體の爲めにきつと藥になりますわ。それに貴君は、シャロック・ホウムズさんの探偵事件には、大層興味を持つてゐらつしゐんですもの。』

『彼の探偵からは隨分得る所があるからね。興味を持たなかつたらどうかしてゐるさ。』と私は答へた。『だが行くとすれば早速荷拵へをしなくちやならないね。何しろ三十分しかないんだから。』

私はアフガニスタンで天幕生活をした經驗があるから、すくなくともこんな場合には、手とり早く

旅の仕度をすることが出來た。行くにしても持つて行かなくてはならない樣な物は僅かでそれも簡單な物計りだから、思つた程の時間もかゝらない中に、私は手提鞄を持つて辻馬車に乘り込んでパデントン驛へ急いだ。行つて見るとシャロック・ホウムズはプラットホームの上をあちらこちらへ行つたり來たり靜かに歩き廻つてゐた。彼は大體丈の高い痩せた姿をしてゐたけれ共、長い灰色の旅行外套を着て、きつちり合ふ鳥打帽子を冠つてゐた爲めに一層痩せて高く見えるのであつた。

『有難ふ。本當に好く來て呉れたね。ウォッスン君』と彼は云つた。『全く信賴する事の出來る人が一所に來て呉れると呉れないとでは大變な違ひだ。土地の人の助力はいつも少しも役に立たなかつたり、でなきあ最負があるんだからね。君、隅の方へ席を二つとつて置いて呉れたまへ。僕は切符を買つて來るから。』

ホウムズが持て來た驚く程澤山の新聞紙がある丈で、私達は客車を二人で占領してゐた。私達がリーデング驛を通過するまで、彼はその新聞紙の中を搔き廻して探しては讀んで、時々ノートに書きとめたり、何か思索に耽けるのであつた。それから彼は急に新聞を皆グル〳〵丸めて大きな玉にして網棚の上へ投げ上げた。

『君はこの事件の事を何か聞いたかね？』と彼は尋ねた。

『いや少しも聞かないよ。僕はこの數日間新聞と云ふものは少しも見ないからね。』

『倫敦の新聞にはどうも十分な記事が載つてゐない。僕は今、詳細な事實を呑み込む爲めに最近の新聞にみんな目を通したんだ。僕が綜合した新聞の記事から判斷すると、この事件は例　簡單で却つて因難な事件の樣だね。』

『何だか君が云ふ事は少々不合理に聞こへるね。』

『ところが全く眞理なんだ。凡て事件は奇異な點がいつも手掛りとなるものだ。が兇行に何等特殊な所がなく平凡であればある程、その眞相をつきとめるに困難だ。然し此の事件では被害者の息子が重大な嫌疑を受けてゐるよ。』

『人殺しか。ぢやあ?』

『ウム、どうもそうらしいんだね。僕は自分で取調べないうちは何事も極めない積りだ。まあ簡單に、僕がこの事件を理解する事が出來た丈、模樣を說明してみよう。ボスコム谷と云ふのは、ヘリファドシャア州のロスから、さう遠くない、田舍の一地方なんだ。その地方で一番の地主と云ふのはジョン・ターナと云つて、オーストラリヤでうんと金を儲けて四五年前に故鄕へ歸つて來たんださうだ。彼が所有してゐる小作田地の一部のハザリと云ふ所を、チャアルズ・マッカアヴィ君と云ふ人

が借りてゐるが、この人も亦墺太利(オーストレイリヤ)利亞歸りの男だと云ふ話だ。この二人は殖民地でお互に知合になつたんだから、本國へ歸つて住居を定める樣になつた時にもなる可くお互に近い所に家を持つたと云ふ事は、無理な事ではあるまいさ。二人の中で、ターナの方が金持なので、マッカアヴィは彼の小作人になつた。とは云ふものゝ彼等が度々一所になる樣な時は、お互に同等の交際をしてゐたものらしい。マッカアヴィは、十八になる獨息子を持つて居り、ターナにも同年の獨娘があるのだが、どちらも妻君は生きてゐない。彼等はどちらも近所に住む英國人の家族達とは交際を避けてゐたらしい。だがマッカアヴィ親子の者は勝負事が好きで、近隣に競馬會がある時には屢々彼等の姿が見かけられたが、人中に出る事はあまり好まなかつた樣だ。マッカアヴィは男女二人の召使を置いてゐた。ターナの方は隨分大勢人を使つてゐて、少なくとも六人計りはゐるとのことだ。僕がその兩家について綜合して得た事は是丈なんだ。扨てその事件についての事實はどうかと云ふに、それは六月の三日、卽ち前の月曜日の事だ。マッカアヴィは午後三時頃、ハザリの家を出て、ボスコム沼の方へ歩いて行つた。その沼と云ふのはボスコムの谷を流れてゐる河が擴がつて出來た沼なのだ。彼はその朝召使と一所にロスの町へ出掛けたが、三時に大事な約束がしてあるので急いで歸らなければならないと召使の男に話した相だ。だがその約束で行つたきり生きて還らなかつた譯なのさ。

ハザリの家から、ボスコム沼までの距離は、三四丁位で、彼がこの三四丁の間を通る間に、彼を見かけた人が二人ある。一人は老婆で、その名前は書いてなかつた。今一人は、ターナに雇はれてゐる獵場の番人の、ウイリアム・クラウダアと云ふ男であつた。この二人の證人は兩方ともマッカアヴィは只一人で歩いてゐたと證言してゐる。更にその獵場の番人は、マッカアヴィが通るのを見てから四五分の間に、彼の息子の、ジェイムス・マッカアヴィが獵銃を小脇に挾んで同じ方向へ行くのを見たと云つてゐるんだ。彼の信ずる所では父親が未だ見えてゐる時、息子が彼の後へついて行つたんださうだ。が彼はその晩惨劇のあつた事をきくまではその事を思ひ出しもしなかつたと云つてゐる。

獵場の番人のウイリアム・クラウダアにマッカアヴィ親子の姿を見へなくなつてから、二人を見たといふ人がある。このボスコム沼は木が周圍に鬱蒼と生ひ繁つてその水際の周りには雜草や葦が茂り合つてゐるが。丁度その時ボスコム谷の地所の番人の娘でベイシエンス・モウランと云ふ十四になる少女がその森の中で花を摘んでゐた。彼女が陳述する處に依れば、彼女が其處にゐた時丁度その沼に近い森の端でマッカアヴィとその息子とを見た。そして彼等親子は劇しく喧嘩をしてゐる樣で、親父の方が荒々しい言で息子に何か云つてゐると、息子が親父を打たうとする樣に手を振り擧げた

のを見たと云つてゐる。彼女はその親子の勢が餘り劇しいので怖くなつて走つて家へ逃げ歸り母親に、今マッカアヴィ親子が喧嘩をしてゐると云ふ事を話した。そして二人の喧嘩が撲り合ひになりそうだと云つたさうだ。そして、彼女がその話をし終るか終らないかの中に息子のマッカアヴィが番人の小舍の方へ走つて來て森の中で父が死んでゐたと云つて番人に助けを乞ひに來たと云つた。彼は大層興奮してゐて鐵砲も持たず、帽子も冠つてゐなかつた。そして彼の右の手と袖とには鮮血が附着してゐた。で彼等は息子について行つて見ると、その沼の側の草の上に彼の父親の死體が横たはつてゐるのを見出した。頭は何か重い鈍い武器で續け樣に撲りつけたやうに凹んでゐて、傷口は息子の銃の臺で撲つたらつくだらうと思はれる樣なあとで、然もその銃は死骸から二三歩はなれた草の上に投げ出されてあつたと云ふんだ。事情がこうなのだからその息子は早速捕縛されて、火曜日に審問の結果故殺犯の判決が下つて、水曜日にはロスの長官の所へ廻され、次の巡囘裁判にこの事件は附される事になつたさうだ。これが死因檢官の取調べと警察裁判所とで判明したこの事件の主な事實なのさ。』

『こんな明瞭な事件は聞いた事がない。』と私は云つた。『若し狀況證據を以て犯罪人を定めるとしたら、息子が犯人と云ふ事は疑へないね。』

「狀況證據と云ふものは誤解され易くて、當にならないものさ。』と彼は熟々考へ乍ら答へた。『その證據が全く一つの事を指す樣に見えるかも知れないけれ共、若し君が少し立場を代へて見ると、同じ證據が動かす事が出來ぬ樣に、全く異なつたものを指す樣な事がある。

然し、この事件がこの青年にとつて非常に不利益に見える事は爭へぬ事實だ。そして又彼が眞の下手人でないとは限らない。

然し近隣の人々の中には、彼を無罪と信ずる人もゐる。其の一人は、あの近所の地主の娘ターナ孃なんだ。彼女は彼が無罪だと信じてレストレイド君に熱心にこの事件を解決して呉れる樣に依頼したんだ。レストレイド君つて、スカーレツトの探偵に關して君も知つてゐるだらう。所でレストレイド君はすつかり當惑したものだから、僕の所にそれを賴んで來たのさ。そこで、二人の中年の紳士がゆつくり家で朝食も食はづに、一時間五十哩の速力で、西の方へ急行してゐる譯さ。』

「事實が餘り簡單明瞭だから、何だかこの事件では君の腕前を見せる樣な事はないだらう。』と私は云つた。

『その分り切つた事實程當てにならぬ物はない。』と彼は笑ひ乍ら答へて『その外に僕等は、レストレイド君には、ちつとも分らなかつたかも知れない、所謂分り切つた事實を發見するかも知れない

よ。君は僕を好く知つてゐて呉れるから僕が自慢するのだなどと云ふ事は思ひはしないだらう。が僕が彼の意見を立てゝ護るにしても破るにしても、僕が用ふる方法を、彼は決してやる事が出來ない。いや理解する事すら出來ないさ。一寸した例を上げて見れば、僕は未だ君の部屋は知らないんだが、僕には君の寢室の窓が右側についてゐると云ふ事がはつきり分るんだ。だが、レストレイド君にはその樣な分り切つた事さへ氣がつくかどうかすこぶる疑しいものだ。』

『おや〳〵、大體どうしてそんな事が分るんだ?』

『おや〳〵でもあるまいよ。僕は君を好く知つてゐるんだ。君は軍隊生活をしたんだから軍隊のきちんとした綺麗さが君の特性となつてゐるよ。君は毎朝顏を剃つてゐるね。そして此の頃になると君は窓の方へ向いて顏を剃るのだらう。だがそれは僕等だつて同じだが、君の剃り方が右の方から左の方へゆくに隨つて次第〳〵に粗雜になつて、果ては顎の尖つたまりはは特別に粗略になつてゐる。こゝから推して考へると右の方の側は光線が好く當つてゐるから鬚が一本も殘らない樣に綺麗に剃れるが左の方はさうではない。日當が惡くつて薄暗いから自然粗略になつて長い鬚もピン〳〵殘つてゐる樣な仕來になる事が分る。大體君の樣な質の人が光を充分兩方に當てゝ剃つてそんな不細工な結果で滿足してゐるなんて思へないからね。

こんな事は僕の觀察と推理の些細な例に過ぎないよ。こゝが僕の商賣さ。そしてそれが今僕等の前に横たはつてゐる事件の探偵にいくらか役に立ちそうなんだ。ところでこゝに一つ二つ、審問の際判明した、大いに研究の價値のある細かい點があるよ。』

『どんな事だい？　それは？』

『彼が捕縛されたのは、すぐその場でなくつて、ハザリの家へ歸つてからのやうなんだ。警察の役人が彼に繩に掛れと云ふと彼はそれを聞いて少しも驚かないで自業自得で仕方がないと云つてゐる。檢屍官の心の中に未だ、彼が有罪か否かの疑問が殘つてゐたとすれば、彼のこの言葉によつて自然檢屍官の疑が全く晴れ、彼を有罪に極めたのも無理のない事さね。』

『つまりそれは白狀したんだね。』と私は尋ねた。

『いや、その後で、彼は無罪だと主張してゐるんだ。』

『彼に不利益　出來事が續いてゐる最中に、兎に角その一言は怪しい一言だね。』

『處がその反對さ。』とホウムズは云つた。

『その言葉は、今疑雲の間に見る事の出來る、最も輝かしい光明なんだ。彼がいくら惡い事をした覺へがないにしても、事情が凡て彼に非常に不利益だと云ふ事が分らぬ程に、彼は全く馬鹿じやあ

るまい。若し彼が捕縛される場合に驚いた樣な風でもするか、或は怒る眞似でもしたら、僕は却つて大いに怪しいと思ふよ。何故かつてさ。そんな驚きや、怒りやはその場合には自然を缺いてゐるからね。だが、それでも、惡策を巡らす樣な人間にには、驚いたり怒つた樣な眞似をする事が得策だと思へるだらうさ。で彼が逮捕されるのは仕方がないと氣輕に諦めた所を見ると、無罪か、さもなくば彼は自制があり餘程しつかりした男だと云ふ事が分るよ。『自業自得』だ。と云ふ彼の言葉については、彼が父親の死骸の側に立つてゐた事や、然もその日、彼が父と口論する樣な親不孝な事さへしたことの疑ひない事、又、非常に重要な證言をした少女が陳べた樣に、父を打たうと手をふり上げる樣なことさへしたのを考へてみたら、彼がさう云ふのも無理もない事だ。我身を責め、深く前非を悔ゆる樣な情が彼の言葉の中には表れてゐるが、それは却つて身に覺へある人と云ふよりむしろ心に何等疚ましい處のない兆候らしく僕には思はれるよ。』然り。

私は頭を振つて『これ丈の證據がなくとも絞罪になつた人が澤山ゐるぜ。』と云ふと。

『成程有るさ。そして無實の罪で死刑になつた者がいくらもあるからね。』

『でその青年はそれについて何と云つてゐるんだ。』

『處が彼を助け樣と思つてゐる者には餘り思はしくない話だ。けれ共その中に參考になる點が二つ

三つはあるよ。それ、こゝに出てゐる。讀んで見たまへ。』

彼は包の中から、一部のヘリフォドシャアの地方新聞を選り拔いて、それを折つて、彼は起つた事件についてこの不幸な青年が陳述した記事の載つてゐる雜報を指さした。私は客車の隅に身を落ちつけてそれを讀んで見ると次の樣に書いてあつた

『被害者の獨息子なるジェイムス・マッカアヴィは、呼び出されて次の如き證言を與へたり――。私は三日間ブリストルへ行つてゐて不在で、前の月曜日卽ち三日の朝歸つた計りでした。私の父は私が歸宅致しました時は家にゐませんでした。女中に尋ねて見ると父は馬車で、馬丁のジョン・コッブを連れてロスへ行つたのだとの事で御座いました。歸つて間もなく庭に馬車の音がしますので窓から覗いて見ますと、父が馬車から降りて急いで庭を出て行くのを見ました。然し私は父がどちらへ行くのであるかは知りませんでした。それから私は鐵砲を持つて兎の巢へ行つて見る積りでボスコム沼の方へぶら〳〵出かけました。その巢は沼の向ふ岸にあるのです。途中私は、その證言の中に述べてゐます樣にウィリアム・クラウダアと地所の番人とを見掛けましたが、彼等が私が父の後に隨いて行つたと思つたのは間違ひです。私は父が私の先を歩いてゐたのは少しも存じませんでした。私が沼から百ヤード計り離れた所まで參りました時 "Coooee" (クーイー) と云ふ叫び聲を聞きま

した。それはいつも父と私との合圖なので御座います。それで私は急いで行つて見ますと父は沼の側に立つて居りました。父は私を見て非常に驚いた樣子で荒々しく其處で何をしてゐるのかと尋ねました。二人で話してゐる內に、談話が次第に口論となり、殆ど打ち合ひにならうとまで烈しくなりました、と云ふのは父は非常に亂暴な性質の男でした。私は父の怒りがとてもなだめる事が出來ないにやうなつたのを見ましたから、別れてハザリの家の方へ歸りました。しかし、私が五十間も行かない內に、後の方で恐しい叫び聲が聞へて來ましたので、走つて行きました。行つて見ますと父は頭部に恐ろしい怪我をして、倒れて息を引きとりかけてゐました。そこで私は鐵砲を投げ出して父を抱き上げましたが、父は殆ど其の場で息を引き取つたので御座います。私は暫らくの間父の側に跪づいてゐました。それからターナの番小屋の方へ、助を求めに走つて歸りました。それは彼の小屋が一番近いからで御座います。私がひき返した時には誰も父の側にはゐませんでしたし、どうしてそんな怪我をしたのか少しも分りませんでした。大体父はすこし、不愛想で近付きにくい風がありましたから、餘り人に好かれる質では御座いませんでした。だが私が知つてゐる限りでは父を害さうと云ふ程怨みを抱いてゐる敵は持つてゐなかつた樣です。私がこの事件について知つてゐるのはこれ丈でございます。

檢屍官(彼が死ぬる前に君に何か言ひ殘した事があるか?)

證人(何か口の中でモグ〳〵云つてるましだが、聞きとれたのは只 ee と云ふ一語丈です。)

檢屍官(それは何の事だと思ふか?)

證人 私にはその意味は些も分りませんでした。夢中で云つたのではないかと思ひます。)

檢屍官(君と君の父親とは何で喧嘩をしたのか!)

證人(それは私はお答へしたくありません。)

檢屍官 是非きかなくてはならないんだ。)

證人(それは實際私には貴君に申し上げる事は出來ません。それは全くこの悲劇と何の關係もない事なのです。)

檢屍官(關係があるか無いかは法廷で決める事だ。君があくまで答へることを拒絶するならば、今後の審問中に於て、この事件にどんな不利な事が起るかも知れない事は本官が云ふ必要もない事だらう。)

證人(でも、私は拒絶しないわけにはゆきません。)

檢屍官(親が叫んだ coooe と云ふ聲は君とのかねての合圖だつた相だな?)

證人(そうです。)

檢屍官(それでは、彼が君の姿を見ない内に、そして君がブリストルから歸つた事も知りさへしないのにそれを云ふとは一体どう云ふ譯だ。)

證人(非常に狼狽した樣子で)知りません。)

檢屍官 (君がその叫び聲を聞いてひき返して父がひどく怪我をしてゐるのを見出した時、何か怪しいと思ふ樣な疑を起す物は見なかつたか?)

證人(たしかなものは見ませんでした。)

檢屍官(確かなものとは?)

證人(私は森の中から樹木のない所へ走つてゆく時狼狽したあまり逆上してゐたものですから、父の事より外のものは何も心に思ひ浮びませんでした。だが私は走り乍ら、私の左手の地上に何か横はつてゐた樣にほんやり記憶してゐます。それは鼠色をしてゐた樣に思ひます。何か上衣の樣なものでしたが、或は辨慶縞の肩掛かも知れません。私が父を離れて立ち上つて見廻してそれを探すともう有りませんでした。)

(助を求めに行く時にはもう見へなかつたと云んだな?)

（有りませんでした。）

（それが何であつたか分らないのか）

（何か有つた樣な漠然とした氣がします。）

（死骸からの距離は？）

（五六間でした。）

（森の端からはどの位距離があつたか？）

（やはり五六間でした。）

（ではそれを取り去つたものとすると君がゐた五六間以内の間だな？）

（ハイ。だが私はその方へ背を向けてゐました。）

（ではこれで證人の訊問を終結する。）

『ね』と私は欄をづつと見下して云つた。『檢屍官は結論は息子のマッカアヴィの事を酷く云つてゐるね。彼は、理論的に、父親が彼を見ない内に合圖をしたと云ふ辻褄の合はぬ事や又父と話した事を詳細に述べる事を拒絶したこと、又親の最後の言葉だと云ふ妙な言に注意をひいてゐるね。これなどは皆、檢屍官が云つてゐる樣に息子には不利益だね。』

ホウムズはにた〳〵獨り笑をして、腰掛けの上に横になつて、『君も檢屍官も苦心して息子の利益になる樣な點を撰り拔いてゐるんだよ。君は自分で、彼はあまり嘘を吐き過ぎるとも信じ、またあまりに嘘のつき方を知らないとも信じて居る事に氣付かないのかね。彼が陪審官の同情をひく樣な父子喧嘩の原因をうまく拵へる事が出來ないとすれば、嘘の吐き樣もしらないのだし、父が最後に望んで云つたと云ふ「鼠」なる妙な言葉や、上衣が消へて失つたなどと云ふ妙な出來事を自分で考へたとしたら、餘程巧な嘘を吐く事の出來る男だよ。いや、君、僕はこの青年の云ふ事が事實だと云ふ見地からこの事件に近づいて行くよ。そしてその假定を基礎としたらどんな斷定に歸着するか、どうか見樣、あゝ、僕はポケット用のベトラアク詩集でも讀まう。そしてこの事件については犯罪の現場へ行くまでは一言も云はない事しよう。僕等はスウインドンで下車するんだ。もう二十分もかゝればそこへつくだらうよ。』と云つた。私達が風光の美麗なストラウドの谷を通り拔け、廣々とした輝く平原を通つて、ロスの美しい小さな田舍町についた時は、殆ど四時近くであつた。痩せた、眼の鋭い、こそ〳〵する樣な男がプラットフォームで私達を迎へて呉れた。彼は田舍風の周圍に從つて輕い褐色の塵除衣を着て、革の脚絆を穿いてゐたが。それがスコットランド警察署のレストレイド君である事が譯なく認められた。私達はヘリフアド・アームス旅館へ彼と一緒に馬車で出掛けた。そこには

最早私達の爲めに部屋が借りてあつた。

『僕は馬車を頼んで置きました。』とレストレイド君は私達と一所に坐つて茶を飲み乍ら云つた。

『僕は君の奔走好きな事を知つてゐるよ。で兇行の現場を踏査しなければ安心しないだらうね。』

『そりや御親切有難い。』とホウムズは答へた。『馬車の要ると要らぬとは氣壓の問題さね。』

レストレイド君は驚いて彼を見て云つた。『君の云ふ事は少しも分らない。』

『晴雨計はどうだらうね。二十九吋だ。風なしか。雲もないんだね。あゝ、こゝに煙草は一箱ある し、長椅子は普通の田舍旅館にしては上等だ。何だか今夜は馬車の必要もなさ相だ。』

レストレイド君は又例の癖を出したな、仕樣のない男だと云ふ風に笑つた。

『勿論、君は新聞の記事を見て斷案を御付けになつたでしやうな。』と彼は云つた。『分り切つた事件だね。調べて見れば見る程明瞭になる。それに、勿論御婦人の御頼みには嫌とは云へないに極まつてゐるか、然かしあの婦人は云ひ出した事は後へ引かない婦人だからね。婦人はかねて君の事を噂に聞いてゐて、僕が已でに手を盡くした以上君が來ても此のうへ手の盡くし樣がないと幾ら繰り返して云つても君の意見が是非きゝ度いと云んだ。をやを、噂をすれば影とやらで今着いたのが婦人の馬車だよ。』

と彼が云ひ終るや否や、室内に飛び込んで來たのは、私が生れてから未だ見た事もない程の若い美人で。すみれの樣な目を輝かして、口を開いて、頰を紅めて居た。女と云ふものは他人の前へ出れば遠慮と云ふものがあるのに、心配と興奮とですつかり遠慮などは忘れて了つた風であつた。

『おゝ、シャロック・ホウムズ樣！』と彼女は僕等二人を見較べてそして女性特有の鋭い直感で友を見定めて叫んだ。『來て下さいまして本當に喜しう御座いますわ、私は貴方にお會ひして御話し度くつて大急ぎて參りましたの。私はヂエイムズはそんな事はしない事を知つてゐます。私知つてゐますのよ。そして、貴方は此事を御承知下さつた上で、御探偵を御始め下さいました。其の點についてはお疑をおはさみになつてはいけません。私達は小さい子供の時から好く知り合つた仲で御座いますから、他の人が知らない樣な彼の悪い所も知つてゐますの。ですが、彼は氣が優しく虫も殺せない人ですわ。あの樣な人が親を殺したなどゝ云ふ事は彼を好く知つてゐる人が聞くと馬鹿々々しい話で御座います。』

『多分彼の身の明りを立てる事が出來ませうと。』ホウムズは云つた。『手の盡くせる丈は盡して見ますから御安心なさい。』

『然し貴方は證言を御讀みになりましたでせう。何とか御判斷を御下しになつておいでゞ御座いま

せう？　何か彼の嫌疑に矛盾した様な事はありませんんかしら？　貴方は彼が無罪だとはお思になりませんか？』

『無罪だと云ふのが何だか事實に近い様ですね。』

『それ御覽なさい！』と彼女は顏を振り向けて、氣味好さ相にレストレイドを見て叫んだ。『お聞きになつて？　無罪になり相な話ですわ。』

レストレイドは肩をすほめて云つた。『同僚は判斷を下すに少し早まつてゐると思ひますよ。』

『ですけれ共彼の人の仰言る方が正しいわ、私、間違つてゐない事を知つてゐます。彼がお父さんと喧嘩した事に就ては、それを檢屍官に言はなかつたのは慥かに私に關係があるからなのです。』

『どんな關係が？』とホウムズは尋ねた。

『こうなればもう何も隱してゐられません。ヂェイムスさんとあの人のお父さんとの間には私の事に就て一致しない事が澤山御座います。マッカリィさんは彼と私を是非一所にさせたく思つて被居しやいます。ヂェイムスと私とはいつも兄とし妹として愛し合つてゐたんですの。けれ共無論、彼は若くつて未だ世間を知らないので御座いますし、そして……そして……あの、彼は未だその様な事をしたくないのは無理ちない事ですの。それであの人はお親父さんと度々喧嘩してゐましたの

で、此の度もきつとその事についての喧嘩で御座いますわ。』

『で貴嬢のお父さんは？』とホウムズは云つた。

『お父さんはこの縁談に御賛成でしたか？』

『いゝえ。父はそれを嫌がつてゐたのです。賛成なのはあのマッカアジィ様丈で御座います。』ホウムズが例の鋭い、心を探ぐる様な目で彼女を見た時、彼女は若々しい顏をほつと紅めた。

『好い事を聞かして下さつて有り難ふ』と彼は云つて、『明日御伺ひしたら御父様に御面會願はれませうか？』

『醫者が許さないだらうと思ひますの。』

『醫者が？』

『えゝ、御存じ御座いませんか？　父は可哀相に長い間患つてゐるんで御座ますよ、今度の事ですつかり弱つてしまいました。そして床について居ます。お醫者のウィロズさんの御話しではすつかり體をこはして、神經をすつかりいためて居るさうで御座います。父は友達が少なく、ビクトウリアにゐた昔から私の父の友達と云ふものはマッカアヴィさんが只一人なので御座います。』

『えつ、ビクトウリヤに。うむこりや大事な事だ。』

『えゝ、鑛業地で御座います。』

『さうですか。金鑛ですな。そこでターナさんは金を儲けられたんですね。』

『えゝ、さうなんですの。』

『やあ、どうも有難ふ、お嬢さん。貴嬢の御話しを伺ひまして大層參考になりました。』

『明日にでも何か新らしい事實が御座いましたらどうぞ御聞かせ下さいまし。無論貴方はジェイムスに面會に獄舍へいらしやるんで御座いませうね。おゝ、若しさうなさいますなら、ホウムズさん彼が無罪だと云ふ事を私は知つてゐると御話し下さいまし。』

『宜敷う御座います。お嬢さん』

『では妾、歸らなくてはなりません。父が大層惡いので御座いますから。そして一寸でも私が側にゐないと父は大變淋しがるので御座いますもの。さようなら、神樣がきつと貴方の御仕事を助けて下さいますわ。』

彼女は這入つて來た時の樣に、どこまでも感情的な樣子で慌てゝ室を出て行つた。そして彼女の馬車がコト〳〵音を立てゝ街を歸つて行くのが聞こへた。

『君も困つた男だなあ。ホウムズ君』とレストレイド君は暫く無言でゐた後、すましこんで云つた。

『君は失望するに決まつてゐる事に、何故希望なんか起すんだね？　僕も餘り氣の優しい方ではないが、そんな事を云つて騙すのは罪だと思ふ」ね」

『僕はジェイムス・マッカヴィの身の明りを立てる積りなんだ。』とホウムズは云つた。

『君は被告に面會の許可證を持つてゐるか？』

『持つてゐる。だが君と僕丈なんだよ。』

『じや、兇行の現場へ出掛ける決心は取り消しだ。僕等が汽車でヘリフォドへ行つて今晩彼に面會する時間があるね。』

『十分あるさ。』

『じやあ、さうしやう、ウォッスン君、君は退屈だらうが、二時間すれば歸つて來るよ。待つてゐて呉れたまへ。』

私は彼等と一所に停車場まで歩いて行つて、小さい町の通りをぶら〳〵抜けて旅館へ歸つて來た。歸つて來てから長椅子の上に横になつて退屈しのぎに黄表紙の小說でも讀まうとしたけれ共、その物語りの小さい構想を、今我々が探りつゝある事件の底知れない樣な不可思議さに比らべると、實に淺薄なのと、そして小說を讀んでゐるといつの間にかこの奇異な事件の事を考へてゐるとので、

私は小説を投げ出して、其の日の出來事の考慮に耽けり初めた。

此の不幸な青年の話が全然事實と假定すれば、彼が父親と別れて、そして親の叫び聲を聞いて森の中へ走つて入つたその間に、どんな怖ろしい、そして豫期しない非常な悲劇が行はれた事だらうか？ それは戰慄する樣な何事かだつたのだ。こりや大體何か知ら？ 傷の模樣でも見たらこの私の醫學的な直感で、何か祕密か判明しはしないだらうかしら？、私は呼鈴を鳴らして地方の週刊新聞を取り寄せた。それには檢屍の時の詳しい記事が出てゐた。外科醫の證言の中には、左顱頂骨の後三分の一と、後頂骨の左半が何か双物でない兇器で強たゝか撲りつけられた樣に碎けてゐたと述べてあつた。自分の頭を探つて指を當てゝ見ると、慥かにそうした打擊は後方から與へたものに違ひない。後方から撲りつけたものとすれば、彼が父と口論してゐた時には、父と向ひ合ひだつたと云ふのだから、幾らか被告の利益になる。然し、それは利益としても大した利益ではない。と云ふのは、撲りつけられない内に、被害者は背を向けたかも知れなかつた。とは云ふものゝ、此の事實に、ホウムズの注意を促す價値があるかも知れない。それから、被害者が死ぬる時云つたと云ふ。

"Ha!" と云ふ妙な言葉だが、大體何の事か知ら？それは熱の爲めに譫言を云つたのもではないに違ひない。だか不意に打撲を受けて死にかゝつてゐる人間は譫言など云ふものではない。いや、それ

よりもつと事實に近いのは、それは彼がどうしてそうしたひどい目に會つたか說明し樣と試みたのかも知れない、とは云へそれは何の事か知ら？ 私は腦髓を絞つて、若しや此等の事實から、何か事件の實相を掴む樣な事でも發見されはしないか知らと考へて見た。それから若いマッカアヅィが見たと云ふ鼠色の上衣の樣なものゝ出來事がある。若しそれが事實とすれば、下手人は逃げ去る時、何か着物を落したのに違ひない、多分上衣であつただらう。そして大膽不敵にも十二歩もない近くに息子が居るのに、息子がその方へ背を向けて跪まついてゐる時、ひつ返して、それを持ち去つたに違ひない。何と云ふ不思議な、想像だに及ばない樣な事計りなのだらう。成程レストレイド君が有罪だと云ふのも無理もない。だが私は一から十まで十分にシャロック・ホウムズ の見識に敬服してゐるのだから、私は新しい事實が出る毎に若いマッカアヅィが無罪だと云ふ彼の確信を強めて行く樣に見へるので落膽などはしなかつた。

シャロック・ホウムズが、漸く宿へ歸つて來たのは最早かなり夜が更けてからであつた。そしてレストレイド君は町の下宿屋へ宿つてゐるのであつたから、彼は只一人歸つて來た。

『晴雨計が未だ高いな。』と彼は坐り乍ら云つた。『現場を踏査しない内に雨が降ると一大事だ。又一方には、こんな綴密な仕事は頭がよくさえて、鋭い時でなくてはならないんだからね。それに、長

途の旅行で疲れてゐる時直ぐに取り掛るのは嫌だ。若いマッカアヴィに會つて來たよ。』

『彼から何か得る所があつたかね？』

『何も得られない。』

『彼の話しで何か判明した事はないかね』

『些つとも無いんだ。僕は一時はね、彼が下手人を知つてる乍ら、それを隠しだてしてゐるのではないか知らと思つたよ。然しさうではなく彼も外の人々同様に犯人については何の思ひ當りもなく自分も分らないので當惑してゐる事が分つた。彼はなかなか男振りも好く、心も大そう確つかりしてゐる樣だが餘り機敏な青年ではない樣だね。』

『然し趣好の分らない奴だ　。』と私は云つた。『若しターナ孃のやうな素敵な美人と結婚するのだなんて云つてゐる事が本當ならばさ。』

『あゝ、其處にはむしろ、涙を誘ふ樣な、氣の毒な譯があるよ。實は彼はお孃さんに、夢中なんだが、二年計り前、さう未だ……若者と云へば若者だが……、少年位な時、そして未だ彼が彼女を知らない内の事さ。と云ふのは彼女は五年間宿寄舍へ入つて居て家に居なかつたからね――奴さんブリストルの酒屋の女に引つ掛り、登錄所で結婚してしまつたんださうだ。誰だつてこの一

件を知つてゐるものはないんだ。しかし君だつて、たやすく、想像することが出來るだらう、なにものにかへても、さう仕たいのはやま〳〵だけれど、さうすることは、絶對に不可能だと云ふことを、自分ではよく承知して居るのに、人から、なぜそれをしないかとせめられるのは、彼にとつてどんなに氣の狂ふやうな、つらい事であるかと云ふ事はね。彼が父と最後に會つた時、父がタアナ孃と結婚する樣に彼に迫つたので、彼が手を擧げたのはこの樣な狂亂の爲めなのだ。又一方には、彼は自分をさゝへて行く方法がないんだ。彼の親父はとても〳〵手にをへない酷い人間なんだから若し彼がその息子が内證で居酒屋の女と結婚したなどと云ふ事實を知らうものなら、全く息子を棄てゝ了つたに違ひない。彼が三日ブリストルに行つてゐたのは、その酒場の女の所へ行つてゐたんださうだ。そして父は彼が何處にゐたのか、知つてゐなかつたさうである。その點をよく注意するんだね。それは余程大事な事なんだ。けれども凶か轉じて吉になつたよ。と云ふのはね、その女は新聞で彼が獄舍で苦しんでゐると云ふ事を知り、そして死刑になりさうなものだから、全く男を棄てゝしまつたんだ。そして彼女は己にバームダ造船所に夫があるんだと云つて彼に手紙をよこしたんだ。でもう二人の間には夫婦の緣と云ふものはなくなつたんだ。で僕はまあこの吉報は息子のマッカアヴィが今まで苦勞した埋合せにもなるだらと思つてゐるよ。』

『だが彼が無罪だとすると、誰が本當の下手人だらう？』

「さあ、誰かな？ 僕は二つの點に特に注意して貰ひたいんだがね。一つはね、被害者が誰かと沼の所で會ふ約束をしたんだが、その約束の相手は彼の息子とではないに極まつてゐると云ふ事なのだ。だつてさ、息子は不在だつたし、又彼は息子が何時歸るか知らなかつたんだからね。第二には被害者は、息子が歸宅したのを知らぬ内に "Cooee" と云ふ合圖を叫んだと云ふ事なんだ。だがまあ、こんな小さい點は明日までのばして、ヂョオジ・メレディス（四五年前に死んだ英國の小說家）の小說の話でもしようじやあないか。」

ホウムズが豫言した通り雨は降らなかつた。そして朝はさはやかに明けはなれて、空には一片の雲も見られなかつた。九時にレストレイドが馬車を持つて私達を迎へに來た。そして私達はそれにのり込んでハザリの農園と、ポスコム沼へ向けて出發した。

『今朝困つた事を聞いたよ。』とレストレイドは云つた。『例の屋敷のターナが病氣危篤で、生命が何だか覺束ないさうです。』

『中老人だらうね？』

『六十計りだつて。だが外國で亂謀な生活をした爲めに體を傷めてゐるさうだよ。そして暫く前から

ら病氣をしてゐるさうだよ。おまけに今度の事件が大變利いたらしい。彼はマッカアヂイの古い友達で被害者にとつては大恩人らしいね。と云ふのは彼にハザリの家を地代なしで貸してゐると云ふ話だからね。』

『さうか。そりやあ面白い』とホウムズは云つた。

『さうだともさ！。凡ゆる方法で彼を助けてゐるんだつてさ。地主が被害者に對して好くしてやつた事は近所の評判なんだからね。』

『さうか！ このマッカアヂイが自分の財產とてはさうありもしないし、又そんなにターナに世話になつてゐる癖にさ、自分の息子を地主の娘と一所にしやうなどと云ふのは少し變だと思ひはしないかね、君？ それにさ、彼女は獨子の後取り娘だぜ、然かも圖々しく、此の方が結婚の申し込みさへすりやあ後の事は勿論の事と云つた樣に安心したやうな態度でさ。ターナ自身もこの緣談を避けてゐると知つては、こりや益々おかしいね。娘がさう話したよ。それから推して考へると何か分りさうなものじやないか？」

『また推理や推論とかを始めたね。』とレストレイドは、私に目配ばせし乍ら云つた。『空論、空想まで追ひまわさなくてもさ、ホウムズ君。僕は事實を組み合せるのにさへ仲々困難なんだよ。』

『君の云ふ通りだ。』とホウムズは何食はぬ顔をして云つた。『君には事實を組み合はせる事が困難だよ。』

『兎に角、僕は君に摑まりさうにもない一つの事實を摑んでゐるからね。』とレストレイドは少々躍氣になつて答へた。

「その事實とは？」

『親父のマッカアヴィが最後を遂げたのは、息子のマッカアヴィの手に掛つたと云ふ事實さ。さうでないと云ふ說は月光の樣に淡いものさ。』

『さう。月の光の方が霧よりは明るいからね。』とホウムズは笑ひ乍ら云つた。『だが、左の方に見へるのが例のハザリの家に違ひあるまい。』

『えゝ、さうです。』

それはまことに廣い、住心地の好さうな三階造りの建物で石盤で屋根がふいてあつて、壁には苔が蒸して、大層黃ろく汚ごれて見えた。然し窓には簾が垂れて、煙突からは煙が少しも立つてゐない爲めに、それは未だ、この事件の恐怖と云ふものがこの家の上に重く覆ひかゝつてゐる樣に目立つて見へるのであつた。

私達が訪問すると女中が出たので、ホウムズは賴んで主人が死ぬる時穿いてゐた靴と、それはその時のではなかつたが、又息子の靴をも見せて貰つた。ホウムズはこれ等を注意深く七八ヶ所の異なつた點から寸法を取つてから、中庭に通して貰ふ樣に賴んだ。そこから私達はボスコム沼に行く迂ね迂ねした道に隨いて行つた。

シャァロック・ホウムズが、熱心にその樣な犯罪の探偵をしてゐる時は別人の樣に變つてしまふのであつた。只彼をベイカー街の冷靜な思想家とし理論家としてのみ知つてゐる人には、こんな時は彼を全く別人と見違へるかも知れない。彼の顏には血が上つて來て黑ずんで來る。眉をひどく一本の黑い線の樣にしかめて、目はその下からとぎ澄ました鋼鐵の光の樣に鋭く光るのであつた。顏は下の方へ屈めて、背を低め、唇をきつと結んで、血管が彼の長い逞ましい頸に鞭繩の樣に浮んで來るのである。彼の鼻孔は獸物を追跡する獸物の樣に擴がつて、彼の心は全く彼の前にある物に集中してしまふので、質問しても、話し掛けても耳には入らない。耳に入つたとしても、返事をすれば激昂して早口に、焦立たしげに答へる位が關の山だ。無言で足早に彼は草原をつゝきつて森を通つて沼へ出る道を進んで行つた。沼は、その地方で多く見られる樣に、ジメ〳〵と濕潤した土地で路にも、その兩側の短かい草の中にも多くの足跡が印せられてゐるのであつた。時々ホウムズは急いで進ん

だり、又時としては死人の様にジッと立ち止まつたり、又一度は少し廻り道をして、草の中へ入つて行つたりした。私とレストレイドとは彼の後をついて歩んで行つた。レストレイド探偵は、冷淡な馬鹿にした様な態度で彼の後に隨いて行くのであつたが、私は友の一擧一動は何か確乎たる目的があるのだと云ふ、確信から起る興味を持つて彼の一指の動きをも注意して見たのであつた。

ボスコム沼は水のひろがりが直徑三十間計りあり、周圍には葦が生へた沼であつた。そしてそれは、ハザリの畑地と、金持の地主のターナの樹園との境にあつた。池の向ふ側には一帶の茂つた森林があつて、その上に突き出てゐる赤い色の尖塔が見え、それが金持の地主の住宅であると云ふ事を示してゐた。沼の、ハザリの方の側は、森が厚く茂つて、沼のふちにある葦と、樹立の端との間には幅の二十歩許りのジメ〳〵濕つた佳い草地があつた。レストレイド君は私達に死體の發見された場所を詳しく示した。實際、地が濕つてゐたので、被害者が倒れて殘した痕跡を明らかに見る事が出來た、ホウムズはどうかと云ふに、私達には見へない多くの他のものが、踏み躙じられた草の上に、彼の目に歴然と見へると云ふ事が、彼の熱心な顏付きや、覗き込む様な目付きでも判るのであつた。彼は獵犬が鳥のにほひを搜す時の様に走り廻つてゐたが、レストレイドの方へ怒つた様に食つて掛つた。

『何をしに沼の中へ這つたんだ？』

『熊手で水中を搜したんだよ。何か兇器か、其他の證據品でも沈めてはないかと思つてね。だが一體どうして僕が沼へ這込つた事が……？』

『チッ、チッ、そんな事を説明してゐる暇なんか無いんだが、内の方に捻じれた君の左側の足の跡が此の邊一杯についてゐるんだ。土龍だつて分り相な足跡だ、そして葦の間に見へなくなつてゐるよ。あゝ、皆が水牛の群の様に此處へ來て、此の邊を揑ね廻さぬ中に僕が來たら、どんなに雜作なかつたか知りやあしない。此處が卽ち門番の連中が來た所だな、死骸の廻り五六尺を踏み廻して跡を見えなくしてしまつた。』

彼は擴大鏡を取り出した。そして防水布の上に地が好く見へる様に伏俯した。そして始終、僕等に話し掛けると云ふよりむしろ獨言してゐる様に續けるのであつた。

『ウム、これが若いマッカアヴィの足跡だな、二度は歩き、一度早く走つてゐるもんだから、靴の裏の跡が馬鹿に深くついて、踵が殆ど見えないぞ。是れで見ると彼の云ふ事が本當らしい。親の倒れてゐるのを見て走つたんだな。それから此處に親父が行つたり來たりした足跡があるぞ。では、ウムこれは何かな？　これは息子が立つて聽いてゐる時つけた銃の臺尻の跡だ。そしてこれははゝ

あ、是は何だ、爪立つた足跡だ。足跡だ。それに四角な足跡！　ふむ、珍らしい靴だ。來て、行つてる　又來てるぞ――勿論外套を取りに來たんだな。はてな、何處から來たのか知ら。』

彼はぢつて行つたり來たりした。或る時は足跡を見失ひ、或は見出したりして私達は遂に森の端に入つて、大きな木の蔭へ行つた。その木はこの邊りで一番大きい木であつた。ホウムズはこの木の向ふ側へ行つて再び俯向きに伏したが嬉し相な滿足の小さい叫び聲を上げた。長い間彼は其處へ止まつて木の葉や落ちた木の枯枝やを引繰り返して私達には塵の樣に見へる物を集めて封筒の中へ入れ、そして擴大鏡で地面計りでなく、手のとゞく限り木の皮までも調べるのであつた。そして苦の中にギザ〳〵の石が轉がつてるたが、これを彼は注意深く取り調べてそれを保存した。それから彼は森を拔けてるる小徑に隨つて公道へ出ると、其處では足跡が皆んな消え去つてゐた。

『あゝ非常に面白かつた。と彼は日常の態度に返つて云つた。『あの右側の灰色の家が例の番小舍だと思ふがね。僕は這入つて行つてモウランと一寸話し度い事があるよ。或は短かい手紙を書いて來るかも知れない。それを終つてから、歸つて飯を食はうね。君、先へ行つて馬車へ乘つてゐてもらうよ。僕は直きに行くからね。』

十分計り立つと私達は馬車に再び乘つて、ロスの町へ歸つて行つた。そしてホウムズは未だ森の

中で拾つた石を持つてゐるのであつた。

『こんな物も亦一興だらう。レストレイド君。』と彼はそれを差出し乍ら云つた。『これでやつつけたんだよ』

『何の跡も無いね』

『跡はないさ。』

『どうして判る？　では？』

『此の石の下に草が生へてゐたからね。其處に置いてから二三日しか立つてゐないよ。そして、これを取り去つた樣な跡もない。この石の形が傷と合つてゐるんだ。然も外に兇器の有る樣樣がない。』

『そして下手人は？』

『丈の高い人だ。左利きで、左の足が跛なんだ。厚い裏の遊獵靴を穿いて、鼠色の外套を着て、印度産の葉卷を吸ふんで、煙草を挟むパイプを使ふね。　そして衣囊に切れない小刀を携帶してゐる人だね。未だ外に五つ六つの形跡があるんだが。これ丈でも僕等の探偵の十分助けになるだらう。』

レストレイドは笑つて『君の云ふ事は僕は未だ信じ兼ねるね。』と云つた。『說は至極結構だが何し

ろ相手が頑固な英國人の陪審だからね。』

『今に分るさ。』とホウムズは平然として答へた。『君は君流義でやりたまへ。僕は僕の流義で遣るからね。僕はこの午後は忙しいから、多分、今晩の列車で倫敦へ歸る樣になるだらう。』

『そして仕事は中途にして行くのかね？』

『いや、終つたさ。』

『然し此の祕密は？』

『解決したよ。』

『誰が犯罪者だ？では』

『僕が今詳述した人さ。』

『そりやあ一體誰の事だい？』

『見付けるにさう大して困難でもないだらう。此の邊はさう人が多くないからね。』

レストレイドは何だ詰まらないと云ふ樣に肩をすくめて、『僕は實際家だぜ。』と云つた。『左利の跛の人はゐませんかつて、方々搜し廻る事なんかどうして出來るものか。そんな事をしたら僕は警視廳の笑ひ者にならあね。』

『よし〳〵。』とホウムズは靜かに云つて、

『此處が君の下宿だね。僕が立つ前に手紙で知らせやう。』

私達はレストレイドを部屋に殘して、自分の旅館へ歸つて行つた。歸つて見ると卓の上には畫飯の用意がチヤント出來てゐた。ホウムズは苦しい立場にある事を知つた人の樣に無言で、思案に暮れて苦し相な表情を顏に浮べてゐるのであつた。

『ねえ、ウオッスン君！』と彼は食事が終つて片付いた時云つた。『まあこの椅子に坐り給へ。そして少し喋舌らして呉れたまへ。全く處致に窮したよ。君の智慧が借りたいんだ。葉卷を點けたまへ。說明しよう。』

『何卒。』

『扨てだね。この問題を研究するにあたつて、若いマッカアヴィの話をきくとすぐはてなと思つた事が二つあるよ。それは僕の目には被告の利益に映じ、君には不利益に思へた事だがね。一つは、彼が證言して居る、親父が彼を見ない内に Cuoes（クイー） と云ふ合圖の言葉を叫んだと云ふ事實だよ。第二は死ぬる時「鼠」と云ふ奇妙な事を一言言つた事なんだ。彼は君も知つてる樣に數語も口の中でもぐもぐ云つたんだが、息子が聞いたのはそれ丈なんだね。でこの二つの點から僕等の研究を初め

なくてはならないんだ。そして若者の云つた事が絶對に事實だと假定して初めて見やう。』

『では Cooee と云ふのは何だね。』

『それは息子にした合圖でない事は判り切つてゐるよ。親の知つてゐる所では、息子はブリストルに行つてゐたんだからね。息子が近くにゐてそれを聞いたのは全く偶然さ。その Cooee と云ふ合圖は誰だつてもさ、兎に角彼が約束した人の注意をひく爲めに云つた言葉なんだよ。然し Cooee と云ふ言葉は明らかに濠洲の言葉で濠洲人の間で呼び交はすんだ。で、彼がボスコム沼で會ふ樣に約束した人は誰か濠洲にゐた人だと云ふ假定がなり立つよ。』

『で「鼠」の方はどうだね？』

シャロック・ホウムズは、たゝんだ紙をポケットから取り出して、卓の上へ擴げた。『此れは、ビクトリヤ殖民地の地圖だ。』と彼は云つた。『昨夜ブリストルへ電報を打つて取りよせたんだ。』彼は地圖の一部を手で指して尋ねた。

『何とあるかね。』

『BALLARAT』と私は讀んだ。

『そしてこれは？』と彼は手を上げて尋ねた。

『BALLARAT』

『さうだ。それが被害者が言つた言葉なんだ。それを息子は最終の二綴り丈聞いたんだね。被害者はバラットの誰某と慘殺者の名前を云はうとしたんだ。』

『是は不思議だ。』と私は叫んだ。

『明瞭な事さ。これで僕の探索する範圍がズッと狹くなつて來た。で第三の點は鼠色の着物の持主だが、これも僕は息子の陳述を正しいと思ふ。僕等は今、單に漠然としてゐた事から、鼠色の外套を持つて、バラットから歸つて來た濠洲人だと云ふ事までは考へられる樣になつたんだ。』

『さうだね』

『この地方に餘程明るい人だぜ。だつて沼へは、ハザリの畑地からか、或はタナの土地からかよりしか近付けないんだからね。そして其處へは知らない者は迷ひ込めさうにもない處だ。』

『全くだ。』

『で今日の踏査になるのだが、地面を調べて、僕は犯罪者の人物について薄ぼんやりのレストレイドに云つた樣な詳細な事實を得たんだ。』

『どうしてそれを得たんだね？』

『君は僕の方法を知つてゐるだらう。それは些細な事の觀察の結果なんだ。』
『犯人の丈の高さは股の長さからざつと判斷出來るかも知れないね。靴の形も足跡で分るんだね。』
と私は云つた。
『さう。特別 靴だからね。』
「だが彼の跛な事は？」
『彼の右足の靴の跡が何時でも左足よりハッキリついてゐる。で左の方へいつも重みをもたせるんだ。何故かつてさ。跛をひくからさ――彼は跛だからさ。』
『然し左利きと云ふのは？』
「檢屍した外科醫が云つてゐる樣に、君も傷口の樣子を變に思つただらう。撲つたのは眞後からだが、それでも傷は左側についてゐるからね。打つた者が左利きでなくてはそんな傷がつく筈はないよ。彼は親と息子が會つて話してゐる間あの木の背後に立つてゐたんだ。そこで煙草さへ吸つたものだ 僕は煙草の灰を見付けたんだからね。僕は煙草の灰を專門に研究したから、印度產の煙草の灰と鑑定したんだ。君も知つてゐる樣に僕はこれには專心に注意をして、百四十種の異なつたパイプと、葉卷と、紙卷煙草について專攻論文を書いたんだからね。灰を見付けてから、僕は邊を見廻

すと若の間に投げ捨てた煙草の吸ひ殼が見つかつたんだ。それが全く印度產の煙草でロッターダムで卷いたものだつたよ。」
『そしてパイプの事はどうして分つた？。』
『その端を咬へた趾がないからさ。パイプを使つたのさ。嚙み切つたのではなく、先が切り去つてあつた。だが切り口が綺麗に切れてゐないから切れない小刀を使つたと云ふ事が分つたよ。』
『ホウムズ君 と私は言つた。君はこの人を逃がれられぬ網で取り卷いてしまつた。君が若し、彼を絞罪にしやうとしてゐる繩を斷ち切つたとしたら、眞に無罪な一人の人の命を救つたのだ。君の話で僕もなんだか見當がついて來た樣だ。犯人は……』とその時
『ジョン・タアナ樣です。』と給仕人は、私達が話しこんでゐる部屋の扉を開いて一人の訪問者を通した
入つて來た男は妙な、人目を引く姿の男であつた。彼ののろい、跛をひく足つきと、肩を丸ゐくしてゐるのを見ると、老衰したかと思はれるのであつたが……にも拘らず、頑强らしい深い皺のある岩石の樣な容貌と、彼の巨きい體で見ると、彼が非凡な體力で、意志も非常に强い男である事が分つた 髭が亂れて頭が胡麻鹽なのと、突き出た垂れてゐる眉が一緒になつて、何となく彼の樣

子に一種の威嚴と力とを與へてゐるのであつたが、彼の顏の色は灰色で、唇や鼻孔の隅の方は少々青味を帶びてゐた。それを見ると私には彼が恐ろしい慢性病を患つてゐる事が明らかに分るのであつた。

『何卒長椅子に御掛け下さい。』とホウムズは物靜かに云つた。

『私の手紙を御受け取りなりましたか？』

『エヽ門番が持つて參りました。世評がいろ／＼とうるさいから避ける爲めに此の旅館へ來て呉れとの御話しで。』

『若し僕がお宅へ行けば世間の人が兎や角云ふと思ひましてね。』

『どうして俺に會ひたいんだね？』と彼は返事を聞かないでも分つてゐる樣に、疲れ果てた目に絕望の色を浮べて友の顏を横から覗きこんだ。

『えヽ』とホウムズは言葉よりも目付きの方で答へた。『そうです。僕はマッカアヴイについては皆知つてゐますからね』

その老人は手で顏を掩つて、『どうしよう！』と彼は叫んだ。『然し俺には息子に憂き目を見せる氣は無かつたのだに、俺はきつと今度の巡廻裁判で彼の不利益になる樣だつたら自首して出る積りで

御座いました。』

『それを聞いて安心しました。』とホウムズは嚴格に云つた。

『俺に娘さへ居なかつたなら、もうとつくに自首してゐるんで御座いましたけど。どんなに娘が歎く事だらう。俺が捕縛されたと聞いたら、どんなに歎くだらう。』

『そんな事にはなりますまい。』とホウムズは云つた。

『何んですつて！』

『僕は其の筋の探偵ではないのです。僕の出張を乞はれたのは貴君の娘御なのです。で僕はその利益になる樣に仕事をしてゐたのです。だが、息子を助けなければなりませんな。』

『俺は先のない人間です。』とタアナは續けて、『俺は久しく腎臟炎を患つてゐるのでして、醫者の意見ではこの先一月は覺束かないさうです。夫れにしても牢屋で果てるよりも疊の上で死に度いなア。』

ホウムズは立ち上つて机に向つて坐りペンを持つて一枚の紙を前に置いた。

『有りのまゝに御聞かせ下さい。』と彼は云つた。『私は事實を書き留めませう。そして貴君が御記名下されば、この私の友が證人になります。で僕は若いマッカアヴイを救ふ爲めに、いよ／＼と云ふ

時、貴君の告白を出します。これを僕は、絶對的に必要と云ふ時よりほかには、使はない事を約束します。』

『それでも宜敷ふ御座います』と老人は云つた。『どうせ次の巡回裁判まで覺束ない命だから。俺はどうでもかまはないけれ共娘のアリスを驚かすのが心外で御座いますから。では何もかも明らかに御話しませう。それは私が手を下すまでは長い時日が掛つたのですけれども、御話するのに長くはかゝりません。』と彼は語り出した。

『貴君は死んだマッカアヅィを御存じないのです。彼は惡魔の化身でした。全くです。どうぞあの樣な人間の手に、あなた方はおかゝりにならない事を。俺は此の二十年間と云ふものを彼に急所を摑まれて來ました。彼が俺の命を駄目にしたのです。先づ俺がどうして彼の掌中に陷つたかその譯から御話し申しませう。

それは千八百六十年代の初めで濠洲に鑛山業が初まつた頃の出來事です。その當時は俺も血氣盛りの若者で、隨分向ふ見づでして、どんな仕事も辭ぜぬと云ふ氣だつたのです。それから俺は惡い友達が出來て、酒は飲み初める金堀りには運が向いて來ないので、大道稼ぎを初めた譯でまあ一口で云へば、普通世間で貴君方が仰言る追剝ぎになりました。俺等は六人組で亂暴な陽氣な生活を送

りました。時々停車場を襲つて金塊を奪つたり、鑛山へ行く荷馬車を途中で止めたりしたものです。バララットのブラック・ジャックと云へば俺が其の頃の通り名だつたんです。そして未だにバララット組だと云へば、その地方の人が身の毛をよだたせてゐるのです。

或る日の事です。バララットからメルボルンへ行く金を積んだ護衛兵付きの車が來ました。で俺等はそれを待ち伏せて襲つたんです。そして向ふの護衛兵も六人俺等も六人で殆ど互角で御座いましたが、最初の一齊射撃で敵の四人を斃して、俺等の方も仲間を三人なくしてか漸く獲物が手に入つたのです。俺は荷車の馭者の頭に短銃を當てゝ撃たうとしました。その男がこのマッカァジィだつたのです。俺は其の場で彼奴を撃ち殺して置けば好かつたんだけれ共、生命丈は救けてやつたのですよ。然し彼は生涯忘れぬと云つた樣に小さい目で俺の顏を見つめてゐましたつけ。俺等はその金を持つて逃げて金持になりました。そして其の足で直ぐ何等の嫌疑も受けずに英國へ歸つて參りました。そこで俺は仲間と別れて、まあ身を落付けて、靜かに正業につかうと決心しました。其の折丁度この屋數が賣り物に出てゐたので買つたのです。そして俺は勉めて、俺がこの金を得たその罪滅ぼしに、この金で世を益さうと思ひました。私は又結婚しました。女房は若死をしまして、可愛いい娘のアリスを殘して行きました。娘が未だほんの赤ん坊の時でさへ、あの可愛いい手を見る

と、子供の愛にひかされて曲つた道を踏まぬ樣に私を導いて呉れるかの如く思はれました。つまる全く行ひを改めて、過去の罪惡を償ふ爲めに努力致しましました。俺がマッカアヅイに急所を握ぎられないまでは、萬事好都合でトン〳〵拍子に行つたのです。

或日私が預金の爲めに倫敦へ行つた時、殆ど着物も着ないで、靴も穿かないこの男にレゼント街で出くはしたのです。

「オイ。ジャック」と彼は私の腕を叩いて申しました。「俺等は親族同樣にしよう　俺等は家族が二人ゐるんだぜ。息子と俺とさ。だから俺等を養つて呉れる事は易い事さ。若し嫌だなどゝ拔かせば、英國は他の所とは違つて法律の好く行き渡つた國で、すぐ手近かにいつでも警官がゐるんだからな。」そこで俺等はこの西部の田舍へやつて來、奴はどうしたつてこの身を離れないんです。して其れから後は無代で俺の一番上等な土地に住んでゐるんです。それからと云ふものは俺は少しも安心出來ず。心の安らかな時もなく、忘れる暇もありません。どちらを向いても、彼奴の狡猾な、ニヤ〳〵笑ふ顏が側へくついて來るんです。それがアリスが大きくなるに隨つて、こまつたのは、俺が、俺の舊惡を警官に知られるよりも娘に知られるのを一番怖がつてゐるのを見てとつたんです。彼奴は何でも欲しい物は是非と云つて持つて行くし、欲しいと云ふものは一言半句の文句も云はづに俺

は呉れてやつたんです。土地でも、金でも、家でもさ。所が遂々彼奴は俺に呉れと云つたのは俺の呉れる事の出來ない物です――娘を呉れと云つたんですからね。

『ねえ、御存じの通り、彼奴の息子も大きくなりやがるし、俺の娘も大きくなつて、俺が病身だと云ふ事を知つてゐるものだから、自分の息子を後へ坐り込ませるのは甘い話だと思つたんでせう。然し俺は斷乎としてこの事丈は承知しなかつた。俺はあの惡黨の種を俺の種と混ぜるのは嫌なんです。俺は決してあの若者が嫌な譯ではないけれ共、親父の血があれに混じつてゐると思ふと、それ丈でもう譯山です。俺は固く取つて動かさない。彼奴は威しやがるんです。で俺は勝手に舊惡を發くなら發ばけ。何んでもしろと云つたんです。そして、この事を相談する爲めに俺等の家の間にある沼の側で會ふ約束をしました。

俺は其處へ行つて見ると彼奴も息子と立ち話しをしてゐるのを見ました。で俺は葉卷きを吸つて彼奴が一人になるまで木の後で待つてゐました。けれ共、俺がきいてゐると、彼は俺には堪へられない樣な腹黑い酷い事を吐かすので、俺はむか〳〵して來たのです。そして彼奴は、俺の娘が醜業婦か何かの腐れ女ででもある樣に、娘が何と考へてゐるかそんな事はお構ひなしにしきりに息子に娘と結婚する樣に勸めてゐるのです。俺は、俺も俺の娘も彼奴の樣な野郎の自由になるのかと思ふと發

狂する様に腹が立つて來ました。どうかしてこの腐れ縁が切り度い。俺はどうせ死にかゝつた。此の世に何の望みもない人間だ。俺は心に憂りもなく、身體も可成り丈夫だが、俺の命數は限られて且夕に迫つてゐると云ふ事を知つてゐます。然し死んでからの俺の名と、可愛いい娘とが！　あの惡いロを默らせれば兩方とも救はれる譯です。やつつけました。ホウムズさん。今一度あの位置に立てば又でもやりますよ。俺は罪深い人間だが、火責め、水責めにあつてその罪滅ぼしをしたのです。だが可愛いい娘までも同じ繩目にからむ事はとても俺には忍び難い事なんです。私は虫でも殺す樣に何等良心の苛責もなく彼を叩き殺しました。彼の絕叫を聞いて息子が引き返して來ました。その時はもう森の蔭にかくれて息子の目には掛りませんでしたが、私は逃げる時落した外套を取りに行かなてはなりくませんでした。私の云ふ事はこれ丈です。これが私の有りのまゝの話しです。旦那さん。』

『あゝ私はあなたの善惡をさばく力はありません。』とホウムズは、彼が書き取つた陳述に老人が記名する時云つた。『吾等はどうかそんな誘惑に會はないやうに私は祈ります。』

『どうぉ會ひにならないように。だが俺をどうなさるんです』

『御病氣中だから、どうも致しません。御承知の事ですが、貴君が程なく貴君の行爲の責めを負ふのは定期法廷でなくあの世の法廷です。僕はこの懺悔默を保存して置いて、若し息子が死刑の宣告

でも受ける樣な事があつたら　差し出さなければなりますまいが、さもなくば人の目には見せません。そして貴君の祕密は、貴君が死なうが死ぬまいが、僕等に任せれば大丈夫です。』

『それならば、』と老人は嚴かな聲で云つた。『御蔭樣で此の身も安心して死なれます。それお思びになれば貴君方も私を助けて下さつたのを思ひ出して安らかに死なれるので御座いませう。』

彼はヨロ〳〵と大きい體を顫はせ乍ら、よろめいて徐々と部屋を出て行つた。

『あゝ、』とホウムズは長い間無言でゐた後云つた。『何故運命はこう弱い人間に惡戯をするんだらう。僕はこんな哀れな話を聞くときつと。バクスタアの言葉を思ひ出し、そして云はざるを得ない。「をやまあ、そこにシャロック・ホウウズが居るよ。」と。』

ジェイムス・マッカアヅイは、ホウムズか起草して、被告辯護士に送つた數々の異議の爲めに無罪の宣告を受けたのであつた。老人のタアナは我々との會見の後七ヶ月生きてゐたが、今は死んでしまつた、そして例の息子と、娘は二人の親の過去に如何なる黑雲が懸つてゐたかを知らずに、夫婦仲睦じく暮す樣になるだらう。

○

五つの蜜柑の種

一八八二年から、九十年までの月日の間にシャロック・ホウムズが取り扱つた事件を、私が簡單に書き留めて置いた記錄にザット目を通して見ると、奇異な事件や、興味の豐かな事件にばかりぶつつかるので、どの事件を選んで好いのか、どれを捨てたら好いのか、いざ筆を取つて見ると容易に取捨する事が出來ないのである。しかしそれ等の事件の中でも或るものは當時の新聞紙上に已に報道されてゐるし、又他の事件は新聞が競つて書き立てる樣な事件でもなく、また彼獨特の才能を發揮する舞臺とならなかつたものもある。又或る事件は流石に分解的に事件を解決してゆく彼の手練も見事に裏をかゝれたものもあるし、又あるものは一つの物話の樣に、事件の發端があつて尻切れ蜻蛉の樣な工合にその結末が立ち消へになつてゐるのもあるかと思ふと、その一部分丈疑雲が晴れてゐるものもある。そしてその說明もホウムズが好む樣に或る證據から理論的に推究して解釋したものでなく、むしろ揣摩憶測したものもある。だがその中でこの一件こそは內容が際立つて面白く、その結果が又吃驚する程意外なので、その事件に關しては全く明らかにする事が出來なかつたいやおそらくは永久にその疑問が解けまい。と思はれる點があるにも拘らず、私は今筆をとつてその顚末を述べて見たくなつたのである。

一八八七年と云ふ年は私達に隨分多くの興味深い事件や、比較的興味の薄い事件やを與へて與れ

た年であつた。それ等の事を、私は皆記錄して保存してゐる。その一年間の記錄の中には『パラドル部屋の奇談』や『素人乞食會の事件』もある。その會員等は或る家具倉庫の地下室に盛んな倶樂部を設けてゐた。又『英國のバーク型のソフィ・アンダーソン號の難破事件』もあれば、『ホウファー島に於けるグリス・ベータースンの奇想天外とも云ふべき冒險もある』そして『キャンバーウエル毒殺事件』でその年の數多かつた事件の最後の幕を閉ざしてゐる。その事件では、諸君の記憶に殘つてゐるかも知れないが、シャロック・ホウムズは死人が持つてゐた懷中時計のねじを卷いてみて、その時計が二時間前に卷かれたことを知り、其處から被害者は二時間前に床に入つたのだと云ふ事を推知したのであつた。實にその推論はその事件を覆つてゐる疑雲を一掃するのに非常に重大なものであつた。凡てそれ等の事件については又何時か未來に於て筆を取る時があるであらうが、今私がペンを取つて記述し樣とする事件の樣に不可思議な事件、出來事が後から後からと續いて來る樣な奇怪極まる性質を帶びた事件は先づないのである。

それは九月の末のことで、彼岸の暴風雨がことの外烈しく吹き荒む頃で終日風は叫び、雨は窓に叩きつける樣に横撲りに強く降りしきつた。爲めに此處、人爲を盡した倫敦の大都會のまつたゞ中で、私達はしばしの間は離隔とした日常の生活から心を離して、檻の中へ閉ぢ込められた猛獸の樣に、

文明の鐵格子の間から人類に烈しく叫びかゝつて來る暴風の大威力を認めなければならなかつた。夕暮が近くなるに隨つて暴風は益々强く、益々凄い唸りを生じて咆へ狂ひ、風は煙突の中で子供の樣に泣き叫び、又は潛々と啜り泣く。シャロック・ホウムズは爐の左側に不機嫌な顏をして、ふさぎ込んで記錄に見出しを付けてゐた。が私は彼の向ふ側に坐つてクラーク・ラッセル氏の美しい、海の物話を讀み耽つてゐると、戸外の荒れ狂ふ暴風の咆哮は何時か本の中の美しい物話と入り交つて雨のびしやびしや降りつける音が長く引き伸ばされて、どう〳〵と怒號する怒濤の轟きの樣に思はれた。私の妻は彼女の叔母の家へ宿りに行つてゐたので、私は再びベイカー街の私が以前ゐた下宿にホウムズと一諸に暮してゐるのであつた。

『オヤ』と私は友の顏をチョット見て云つた。『あれは確かに呼鈴の鳴る音だね。大體今晩の樣な荒れ狂ふ夜に、誰が來たのか知ら？　大方君の友達だらう？』

『僕は君より外には友達はないよ。』と彼は答へた。『僕は人が來る事を餘り好かないからね。』

『ぢやあ事件の依頼者が知ら？』

『依頼者だとすると重大事件だぞ。でなければ、今晩の樣な暴風雨の、然かもこんな時刻に來はしない。だが僕はお主婦さんの誰か茶呑み友達だらうと思ふね。』

然し、シャアロック・ホウムズの推測は見事誤つてゐた。と云ふのは廊下を歩いて來る足音が聞こへて來て、續いて輕く扉を叩く音がした。彼は長い腕を伸ばして、自分の側からランプを離して新來者を坐らせる空き椅子の方へ押し遣つた。そして彼は『お這りなさい。』と云つた。

這入つて來た男はせい〳〵二十二位に思はれる若い男で、身仕度はキチンとしてゐて、着物は小綺麗で、彼の態度には何處か上品な華酒なところがあつた。彼が手にしてゐる雫のダラ〳〵垂れてゐる蝙蝠傘と、びつしよりにぬれてランプの光を反射して光る長い雨外套とを見ると、彼が冒してやつて來た暴風雨が如何に激しかつたかゞ分るのであつた。彼はギラ〳〵輝くランプの光の中に心配相に邊を見廻した。そして何かの事でひどく心配してゐる人のそれの樣に、顏はひどく蒼ざめて、眼は重げにどんよりしてゐた。

『どうも濟、ません』と青年は金の鼻眼鏡を目の所へあげ乍ら云つた。『決して不作法な事をする積りでは　り　せん。が暴風雨の中をやつて來て雫や土ばねを綺麗なお部屋の中へ持ち込みまして、』

『上衣と傘をこちらへかしたまへ。』とホウムズは云つて、『此處の鈎に掛けて置けば間もなく乾きますよ。時に君は西南の方からいらつしやつたんですな。』

『さうです、ホールシャムから來たました。』

「君の靴先についてゐる粘土と白堊の混じつた泥土を見ると明らかに分りますよ。」
『私は貴方に御相談する爲めにお伺ひ申しました。』
『そうですか。そりやお安い事です。』
「そして助けて下さる事も。」
『その方はいつもさう容易に行くとは限りませんね。』
『僕は貴方の御高名を承つてゐます。タンカーヴヰル倶樂部醜聞事件で貴方がブレンダアガスト少佐をお救ひ下さつた話を少佐から聞きました。』
「あゝ、さうでしやう。少佐はトラムプで詐僞手段をやつたとかでひどく責められてゐましたからね。」
『少佐のお話では貴君はどんな難事件でも御解決下さると申してゐました。』
『そりやあ少し買ひかぶりですよ。』
『そして貴方は御失敗なさつた事がないと……。』
『いやありますよ　四度やつつけられました。三度は男に……一度は女にね。』
『然しそんな事は貴方の御成功なさつた數に比較すれば何でもないじやありませんか？』

『いや、全く大概の場合は立派にやつてゐるからね。』
『では何卒、私の事件も一つうまく御願ひします。』
『まあ、椅子を火の側に近付けて、どんな事件が起つたのか、それについて細かく話して呉れたまへ。』
『ところでなかなか尋常一樣の事件でありません。』
「僕の處へ持ち込めば不可思議なと云ふ事件はないからね、まあ僕の所が最後の訴へ場なのさ。』
『だが貴方が色々御經驗なさつた中でも、私の家族に起つた樣な不可思議な合點の行かない出來事が後から後からと續いて起つて來る樣な事件は未だお聞きなつた事がならうと存じま　。』
「何だか馬鹿に面白さうな話ですね。』とホウムズは云つた。『何卒初めから主要な事實を御話し下さい。その後で僕は最も大切だと思はれる詳細な點は僕の方からお尋ねしますから。』
青年は椅子を前へ乘り出して、ぬれた足を勢よく燃へ立つてゐる火の方へ突き出して話し初めた。
『私の名前はジョン・オーブンショウと申します。』と彼は續けた。『だが、私の知つてゐる限りではこの怖ろしい事件はあまりに關係のない事なのです。それは親から子へと傳はつてゐる、代々の問題

で、貴方にこの事實を分る樣にお話しする爲めには、先ず事件の發端へ遡つてお話しなければなりません。私の祖父には二人の子がありまして、一人は叔父のエリアスで一人は私の父のジョセフなのです、父はコベントリィ市で小さい製作所を持つてゐて、自轉車へ乘る術を發明したその當時は製作所を擴張しました。父はオーブンショウ破損知らずタイヤの專賣特許權の持主で、事業が成功したものですから權利を賣つて相應な金を作つて隱退して靜かに生活してゐました。

叔父のエリアスは未だ若い時分に米國へ出稼に參りまして、フロリダ州で耕作場主になり、相當事業もうまく行つたのださうです。處が南北戰爭になりまして其の當時叔父はジャクソン將軍の部下として戰ひ、後にフード將軍の揮下に參加して大佐に昇進しました。然しリー將軍が兜を脫いで軍門に降つたので、叔父は再び耕作場にかへつて其處に三四年停つてゐたのです。が一八六九年か或はその翌年の一八七〇年かと思ひますが、叔父は歐羅巴へ歸つて參りまして、ホールシャムの近くのサセックスに小じんまりした家を持ちました　叔父は合衆國で餘程の財產を造り上げまして、歸つて來た理由と云ふのは黑奴が毛虫か何かの樣に嫌いで、黑奴にまで參政權を與へる共和政策は虫が好かぬと云ふのです　叔父は妙な變り者で、短氣で兇猛な性質でして、怒りでもしたら聞くにたへない程口汚なく罵るのです。ですが日頃は無口で引込み愚案な方なのです。叔父がホールシャ

ムに住んでゐた間には町へ一歩も踏み込んだ事はないだらうと思ひます。家の廻りには庭園と二つ三つの畑が御座いましたが、時々一週間も二週間もぶつ續けに部屋へ引込んで外へは少しも出ない事もありました。然しその庭や畑でよく運動をしてゐたものです。叔父はブランデーはおそろしく澤山呑めるロで、煙草も又隨分ひどく吸つてゐましたが、社交などゝ云ふ事は大嫌ひで、友達は一人も欲せず兄弟とさへ親しい交りはしなかつた位です。

叔父は別に私には構つて呉れなかつたのですが、叔父が初めて私を見た時は未だ私は十一二の少年だつたものですから、實を云へば私を愛らしい奴だと思つたらしいのです。それは何でも叔父が英國へ歸つてから八年か九年か經つて一八七八年のこと、叔父は父に賴んで私を叔父の方へ引き取つて世話をして呉れる樣になり、あれでなか〳〵私を可愛がつて呉れたものです　叔父は寂しくなるといつでも私を相手にすごろくをしたり、碁を圍んだりする事を好むのが常でした。そして下男や下女や、又は商人などに對しては、私に叔父の代理をさせたものですから、私が十六になつた時は全く一家の主人で家の中の鍵と云ふ鍵はみな私が保管してゐて、叔父の閑居の邪魔をしない限り、何處へ行かうと、何を爲さうと私の勝手次第でした。然し只一つ妙な事には例外がありました。と云ふのは屋根裏の部屋の中にがらくた物の入れてある物置がありましたが、それは年から年中鍵が

下りてゐて、私でも、又はどんな外の人でも這入る事は決して許さなかつたのです。私は子供の好奇心から鍵穴から内を覗き込んで見ましたが、見へる物はそんな部屋にふさはしい古い旅行靴とか包の様なものがごた〳〵這入つてゐる許りでした。

或日――それは一八八三年の三月の事でした――外國の消印のある一通の手紙が卓上の大佐の皿の前に置かれました。叔父は勘定は皆現金で拂ふし、別に友達などと云ふ者は持ちませんので、叔父の處へ手紙が來るなどゝ云ふ事は珍らしい事でした。『印度からだ！』と叔父は急いで手紙を取り上げ乍ら云ひました。『ボンディチユリィの消印だな。はて何だらう？』と云つて大急ぎで封を切ると、その中から五つの乾からびた蜜柑の種が飛び出してばら〳〵皿の上へ落ちました。私はそれを見てお可笑しくてたまらないので笑ひかけましたが、叔父の顏を見ると笑ひかけた唇が閉ぢてしまひました。叔父は唇をゆがめて、目は何か非常に驚いた様に飛び出して顏の色を眞蒼白にして、未だぶる〳〵震へてゐる手に持つてゐる封筒を見つめてゐるのです。『K、K、K、』と叔父は悲しい聲で叫びました。『あゝ、あゝ、俺の犯しに罪惡の酬が來たのだ』

『何ですか叔父さん？』と私は叫びました。

『死！』叔父は云つたきり、卓から立ち上つて自分の部屋へ引入みました。後に殘された私は恐怖

の爲めにどき〳〵とはげく慟悸が打つてゐるのを知りました。私はそこにあつた封筒を取り上げて見ますと、その口の護謨糊のついてゐるすぐ上の所に、赤インキでK、と云ふ字が三つ走り書きに書いてあるのが目につきました。其の外の物と云つては五つの乾からびた密柑の種子より外には何もありません。大體叔父があんなに怖れた理由は何でしやう？　私は合點がゆかぬので朝食の食卓から立ち上つて階段を昇つてゆくと、古い錆のついた鍵を片手に持つて下りて來る叔父に出會ひました。それは正しく例のがらくた部屋の鍵に違ひありません。そして他の方の手には眞鍮の小さい錢箱の様な箱をさげてゐるのです。

『彼奴等は思ふ通り勝手な事をしろ。俺は彼奴等の計畫を敗つてやる。』と叔父は怒つて罵る様に云ふのです。『オイ今日はメリイに私の部屋に火が入用だとお云ひなさい。そしてホールシヤムへフオードハム辨護士を呼びにおやり。』

私は叔父が命じるまゝに火も入れさせ、辨護士も呼びにやりました。そして辨護士がやつて來ると叔父の部屋まで來る様に云はれるので行つて見ると、炉がカツカと燃へ立つてゐて、爐の中に眞黑な、丁度紙を燒いた様なふわ〳〵した灰が一杯ありました。そして例の眞鍮の箱は明けつぱなしで中には何も這入つてゐません。私は箱をチラと見ると、驚いた事にはその蓋の上に朝封筒の上に

書いてあつたと同じ様にK、と云ふ字が三つ書きつけてありました。

叔父が申しますには、『おい、ジョンどうか俺の遺言狀の證人になつて呉れ。俺は俺の財産もその利益も不利益も一諸に俺の兄弟、即ちお前のお父さんに殘すのだが、やがては勿論お前のものとなる。若しお前がそれを何事もなく持つてゆかれたらこれに越した事はない。だが若し財産を保つて行けない事が分る時が來たら。俺の云ふ通りにお前の一番憎い不倶戴天の敵にそれを讓つてやれ。俺はこんな曖昧な財産をお前に與へるのは悲しい。だが俺には萬事形勢が好くなるか惡くなるか分らないのだ。どうかフォードハム君がお前に示される證書に捺印して呉れ。』

で私は云はれるまゝにその證書に捺印しますと辨護士はそれを持つて歸りました。御察しの通りこの不思議な出來事が深く私の心に刻みつけられました。そして私はその出來事を心の中で一生懸命になつて考へて、色々な方面から操り反し操り反して熟慮を廻らしましたが何の事かさつぱり知る事が出來ませんでしたが、それと云つて、一週間一週間と過ぎるに從つて、またと私達の日常の生活を搔き亂す樣な事は何も起りませんので、そうした印象は次第に薄れて行きはしたものゝ、その出來事の後に殘された漠然とした恐怖の感情は振り離す事は出來ませんでした。然し叔父を見ると何故か今までとは違つて變つて來たのが分りました。叔父はそれまでよりも以上に酒を煽り、人との

交際はどんな交際でも猶一層さける樣になり、大概部屋に閉ぢ籠つて內から鍵をかけて出て來ません。すると、時々酒に醉つぱらつて狂亂の體で家の中から飛び出し、手に拳銃を持つて庭の邊を目茶苦茶に歩き廻るのです。そして、俺は誰も怖ろしかあないぞ、俺は人だつて鬼だつて誰にだつて檻の中の羊の樣に閉ぢ込められなんかする筈がないなどと怒鳴り散らして居るかと思ふと、そうした狂人の樣な激しい發作が去るとどん〳〵家の中へとび込んで鍵を下ろした上に閂さへしてしまふのです。それは丁度魂の根元に巣くつてゐる恐怖に逆らつて、とても最早こう鐵面皮にはやり通せないと云つた人の樣に。だがそんな時にはキット水溜から出て來た許りの人でも見る樣に、縮み上る樣な嚴寒の日にさへ、顏がしつとり滿れて光つてゐるのです。

扨てホウムズさん。長々と面白くもない話をして來て聞くに堪へられなかつただせうが、遂々其の事件が終る日が來 した。或る夜の事叔父は例の樣に醉ぱらつて飛び出したきり再び家へ歸つて來ませんでした。で私達は叔父を搜しに出掛けますと、庭の突き當りにある青い泡のブク〳〵浮いた水溜の中に俯伏して死んでゐる叔父を見付けました。誰も叔父に暴行を加へたらしい形跡もなし、水の深さは僅か二尺位でした。で陪審官は叔父の日頃から人並はづれて狂人じみてゐたのを一つの理由として自殺と決めてしまつたのです。が僕は叔父が死と云ふ事はどんな死でも非常に嫌つ